
銀月の魔女は闇と歩く

桜色藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀月の魔女は闇と歩く

【Nコード】

N9273J

【作者名】

桜色藤

【あらすじ】

漆黒の髪と目を持つ男がいた。その男、ジークはその功績から英雄と呼ばれる青年。誰にも屈しないその姿は世界中の人々の憧れだった。彼の隣に立つのは同じく双黒の少女。可憐なその外見と相反する巨大な力と秘密をその身に秘めていた。

二人の目的はセリスにかけられた呪いの解除。その旅路でセリスは逃げ続けていたジークの想いと自分の心に向き合わされる。ジークも、セリスの心の傷を悟りながら、どうする事も出来ずにいた。契約で結ばれた二人。近づいては遠ざかる心。すれ違う想い。

これはひそかに語り継がれる、銀月の魔女と闇の守護者の、永遠の愛の物語である。

*あらすじ変更しました！2章 太陽の都連載中です。

《創世記》

はるか昔、時さえ存在しない程の昔、《世界》は全ての元である《混沌》であつた

ある時、《混沌》の力の一部が凝り、《世界》は《陽》、《月》、《闇》、の神を生み出した

三柱の神は《混沌》の中からそれぞれ自らに近しいものを集めた
集められたものから、新しい神が生まれた

《陽》は《火》と《土》を生み出した

《月》は《風》と《水》を生み出した

《闇》はそれらをつなぎ、整え、《世界》は現在の形となつた

《火》と《風》と《土》と《水》は親神の力と互いの力を使い、様々な《命》を生み出した

《土》と《水》により《木》が生まれた

《水》と《風》により《雷》が生まれた

《火》と《土》により《金》が生まれた

……(省略)……

最後に《火》と《風》と《土》と《水》から《人》が生まれた

《火》と《風》と《土》と《水》の神々はその一つ一つに《名》をつけ、それに自らの息吹を吹き込んでいった

神につけられた《名》はその存在そのものとなった

《世界》は《命》で溢れ、《混沌》から《世界》へと自ら《名》を変えた

『ラ・ティルン』
『世界記』
『名も無き章』より

抜粋

序話 2人の旅人

「鬱陶^{うつとう}しいな。どうにかならないのか。」

独り言に近い呟きに、しかし、鈴の音のような可憐な声が返ってきた。

「仕方ないでしょう？それともこいつらに強力な一発をお見舞いする？」

まあその場合、こいつらだけでなくあたりも一緒に吹っ飛ぶだろうけど。

「……いや、やるなよ？冗談にならないから。つか、お前も相当キてるだろ。」

可憐な、しかし据わった声音とその内容に、つぶやいた青年は頬をひきつらせながら様子をつかがう。

「当然でしょう！？さっきから何匹倒したと思ってるの！しかもまだ増えてるし！」

あーもう、報酬につられて受けるんじゃないやなかったこんな仕事！
雑魚だから簡単だと思ったのに……！！」

内心その少女の声に同意しつつ、青年は目の前の相手を見すえる。

目の前 いや、周囲にいるのは三つ目狼^{モンスター}。素早い上に、一般的に群れで行動するため、それなりに厄介な怪物だ。

数十匹はいるそいつらに対し、こちらは二人。

どちらも旅人用の白っぽい外套を着ているため、黒い群れの中になり目立つ。

背後の爆音を聞きながら、赤い目をぎらつかせて跳びかかってくる一匹を避け、その勢いを利用して腹部を切り裂く。剣を止めずに襲いかかるもう一匹に切りつける。

一般よりも一回りは大きい剣を操りながら、その動きは滑らかで、速く、舞のようにすら見える。

4、5匹を倒すと後退し、再び少女と背中合わせに立つ。

「平気か？」

「もちろん」

間髪入れずに返ってきた言葉に心配はいらないと知りながらも少しだけ安堵する青年に、見透かしたようなクスクス笑いとともに声がかけられる。

「この程度で私がどうにかなる訳ないでしょう？昔から心配症なんだから。」

そのからかうような、少しだけ『彼女』が見える声音に嬉しさを感じていると、

「ところで何匹倒した？」

と、真剣な声が掛けられる。

会話の間も続く三つ目狼の攻撃を剣で受けながら、

「二、三十匹というところだろうな。お前は？」

「固まってる所に攻撃魔法をぶつけてるだけだから正確じゃないけど…ま、同じくらいでしょうね。」

「少なくとも40匹以上か…で、それがどうした？」

その問いに、少女は不穏な笑みを浮かべて言った。

「吹っ飛ばさないから『強力な一発』やっていい？」

・・・しばらくして、数十匹の三つ目狼の氷漬けの像と、町に向かう二人の姿があった。

序話 2人の旅人（後書き）

はじめまして。こんにちは。桜色藤と申します。
初投稿なくせに行き当たりばったりなので、至らない点はどんどん指摘してください。荒らし以外なら、厳しい評価でも大歓迎です。
遅筆なので、更新は遅くなるでしょうが、気長に待っていただけると嬉しいです。

登場人物紹介

【】は正式名、（）は呼び名

【????】（セリス）女性 外見年齢・15歳程度

髪・黒銀 瞳・黒紫

主人公その1。

ジークと共に旅をする魔法士の少女。

外見のわりに大人びた言動をする。

博識だが世間知らずで、自らの容姿に無頓着。というより無自覚。

ギルドランクはD。

色々謎。

【ジークフリード】（ジーク）男性 年齢・20歳位

髪・黒 瞳・黒

主人公その2。

端正な顔立ちの男前。

大剣や長剣を使う。

ギルドランクAで、二つ名は《闇夜》。

セリスのことを想っているが、押し隠している（言動でバレバレ）

《サラテイルドの大侵攻》の経験者

昔は女遊びがひどかったらしい

【エイギル＝ジエード】（エイギル）男性 年齢・25歳
髪・茶 瞳・翡翠

ジークの悪友の双剣使い。

友人の相棒であるセリスに興味を持つ。

結構腹黒で、気に入らないものには容赦が無い。

ギルドランクはB。

《サラテイルドの大侵攻》の経験者。

【アンジェリカ＝ヘイゼル】（アンジェリカ）女性 年齢・21歳
髪・赤 瞳・榛はしはみ

ランクDの傭兵で、強いグループを渡って生活している。
ジークにまとわりつき、セリスを敵視する。
天敵はエイギル。

【トウーリ＝アンバー】（トウーリ）男性 年齢・15歳

髪・栗色 瞳・薄茶

隊商の一員で治癒士見習い。ヒーラーただし、正式な隊員ではなく、目的サラテイルド地までの同行者だった。

感知能力は一級で、セリスの尋常でない力に気付き、接触した。

サラテイルド出身で、兄がいる。

【ルーセルディリア】（ルース）黒馬

ジークの愛馬。もとい相棒。

神馬という種族の血を引いていて、賢く、誇り高い。

自分が認めた者しか乗せず、その暴れっぷりはもはや伝説。

ギルドについて

世界中に支部を持つ傭兵組合。主に傭兵への依頼の斡旋をしている。

傭兵の実力や功績、依頼の達成率などによるランク分けが特徴。ランクは上からS、A、B、C、D、E、F、Gとあり、上に行くほど昇級は困難となる。

都市によっては隊商護衛専門など、《砂漠の薔薇》のような専門の支部もある。

《過去》編 登場人物紹介

セリスティア

銀髪の美女。

少年

傷だらけで倒れていたところをセリスに拾われる。
記憶喪失。

1話 砂漠に臨む街

デユリアーク

『砂漠に最も近い街』と呼ばれるこの街は、交易で栄えている。砂漠を越えようとするとする人々がここに立ち寄り、それを狙って商人たちも集まる、ということを繰り返して発展してきた街だ。それゆえ、この町の特産品は二つに分かれる。ひとつは砂漠越え用の品や越えてきた人々による異国の品、つまり物資。そしてもうひとつは

ようぐい
人だ。

今、そんな街の一角を2人の旅人が歩いていた。

「で、これからどこ行くの？」

『三つ目狼の討伐』という依頼を終え、ギルドで報酬を受け取った直後にかけられた問いに、彼はちらりと隣を歩く小柄な人物を見下ろした。言いつけに従って外套のフードを深くかぶっているため、顔は見えない。

無言の彼をどう思ったのか、その人物はさらに問いを重ねる。

「砂漠を渡るのでしょう？必要なものを買うの？さっきもらった報酬、割と良かったよね。依頼が三つ目狼退治だったからめんどくさかったけど。」

それとも足りない？

そんな言葉に、青年

ジークはため息をついた。

「一家五人、二月は遊んで暮らせる金額だぞ？足りないなんてあつ

てたまるか。いい加減金銭感覚を身につける。そして常識を知れ。あと、自分のとんでもなさを実感しろ。フードを下ろすな。」

立て続けに言われたためか、少女は頬を膨らませて（見えないが何となくわかる）反論する。

「暑いんだもの。それに、常識は知ってるわよ。

昔のだけど。」

小声でささやかれた後半部を聞き取って、ジークは溜め息を堪えてなだめるような口調で少女に言う。

「いいというまではフードは駄目だからな、セリス。お前は目立つんだから。」

そう、傍らの少女、セリスは目立つのだ。

珍しい、双黒

その点はジークも同じだが

に加

えて、可憐というのがふさわしい整った容姿。どう見積もっても14、5歳にしか見えない外見や、華奢な姿態は、人目はもちろん、邪な考えを持つ者たちを惹きつけるに違いない。

まあ、手を出せば痛い目を見るのは相手だろうが。

そこまで考えて、ジークは思わず頬を緩ませた。

「それで、どこに向かっているの？」

小さく笑ったジークを見て、フードの陰で眼を細めたセリスは先程よりやや強い口調でもう一度行き先を訪ねた。

「砂漠の旅として最も安全なのは、隊商に加わることだ。そして、デュリアークには隊商の護衛専門のギルド窓口がある。」

ギルド

全世界に広がる傭兵組織だ。

民間からの依頼を仲介料としていくらかの料金を受け取って、傭兵に流すのだ。依頼は難易度別に紹介され、難易度によって仲介料も変わる。ギルドに登録している傭兵達はそこから依頼を選び、引き受け、成功させることで報酬をもらう。

成功させた依頼の難易度や、成功率などによって傭兵達はランク分けされており、一定ランク以上でなければ引き受けられない。できない依頼もあるという。

ランクは最初はEから始まり、最高はSSSだという。最もそれは歴代に数人だそうだが。

ランク上位の者には、二三名がつけられ、彼ら個人に入る依頼もあるという。

依頼は多岐にわたるため、下部組織も複数存在する。今から向かうのはそんな組織の一つなのだろう。

「これからのことは、そこに行つてからだな。俺らの目的地はラテイルドだから同じ方向の隊商はあるだろうが、それがいつ出発かわからないからな。」

ところで、お前は砂漠を旅した経験ないのか？」

「あるわよ」

予想外の答えだったのか目を瞬かせたジークだったが、続く言葉に納得した。

「でも、ずいぶん昔のことだから。やっぱり時間がたてば変わるものね。」

街を眺めながらの言葉はともすれば子供の背伸びのようだったけれど、事情を知るジークにはどこか達観したものに聞こえた。

「じゃあ、必要なものはお前のほうが詳しいな。買い物はお前に任せるぜ。」

ふと胸をよぎる寂しさを感じながら、ジークはそう言って笑った。

それからしばらくして、

「……………つと、ここだ。」

振り返ってセリスに念を押す。

「いいか、俺が言うまでフードは外すなよ。」

そう言ってジークが扉に手をかけたそこは……………
……酒場だった。

1話 砂漠に臨む街（後書き）

前話より長いですねー。（前話が短すぎるだけだが）

そして説明が多い・・・

と、いつか受験前なのに何をやっているんだろっか自分は・・・

2話 砂漠の薔薇

砂漠の薔薇という、妙に上品な名のその酒場に足を踏み入れて、セリスはフードを外すなというジークの言葉の意味を知った。

そこにいたのは、いかにも傭兵、という感じの荒くれ者たちだったからだ。

セリスも自分の容姿が人目を引くことは自覚している。知らない者が見れば絶好のカモと考えるであろうこともだ。

「・・・ジークが聞けば、眉間にしわを寄せて「それだけか。」と抗議しそうな程度の『自覚』だが。

それでも、周囲の視線を集めていることが理解できないほど鈍くもない。そもそも店に入った今でも外套は脱がず、フードもかぶったままなのだ、怪しすぎる。

最もこの視線の集中砲火の理由はそれだけではないが。

「黒髪黒目・・・《闇夜》だ・・・」

「・・・《ラテイルドの英雄》だろ・・・本物か？あんな若造が・・・」

「・・・Aランク・・・ここ二年ほど行方知れずだったそうだが・・・」

そんな囁きを聞き取り、セリスは隣をちらりと見上げる。

ジークは視線を気にせず、むしろ不敵な笑みを浮かべるとカウンタ―へと歩みだす。

ギルドAランク傭兵、《闇夜》ジークフ
リード

九年程前に傭兵となり、Aランク傭兵、《劍聖》ザリアスに師事し、共に旅をする。

約三年でCランクという記録を打ち立て、それを機に独立。

パートナーを作らず、滅多にパーティーも組まないことから密かに《孤高の傭兵》と呼ばれる。

その二年後にBランクとなり、その珍しい髪と目の色から《闇夜》の二つ名を得る。

Aランク昇格は時間の問題だと囁かれていたところで、三年前の《サラテイルドの大侵攻》と呼ばれるラテイルドに突如現れた魔族の軍勢との戦いにおいて勝利への功績、その後のラテイルドの復旧への貢献を評価され、《ラテイルドの英雄》として一般にも有名になるとともに異例の若さでAランクにまで上り詰める。

二年前に突如行方知れずとなり、消息不明に。早すぎる引退や、依頼失敗による死亡説までささやかれていた。

ジークの後を追いながら、彼の人目を集めるのに十分すぎるほどの華々しい功績を思い、セリスはそつと目を伏せる。

『常識知らず』といわれるセリスだが、ジークがどれだけ功績を上げてきたかは知っている。ずっと『見て』きたのだから。『あの時も。』

「・・・ラテイルドへ向かう隊商はあるか？できるだけ早いのがいい。」

胸によぎる思いを振り切ると、ちょうどジークが店主であるう護衛の空きがあるかを尋ねているところだった。

あわてて隣に並ぶセリスを一瞥し、明らかに傭兵上がりであると思われるいかつい店主は口を開く。

「・・・三日後に出発する隊商がある。名高い《闇夜》なら大丈夫だろうが・・・そっちは護衛対象か？」

「いや、パートナー相棒だ。」

その言葉に、店主がセリスに興味深そうな視線を送る。

「セリスといます。」

店主の視線を感じ、礼をして名乗る。

優雅な礼を見た店主は少し目を細め、見定めるように眼光を鋭くする。

「《孤高の傭兵》の相棒・・・興味深いが、顔を見せてもらえないか？」

店主の言葉に、セリスがジークを見やると、ジークは頷き、セリスの後ろに回った。

これで後ろから見ると、セリスの姿は頭一つ以上高いジークの体に隠れ、まったく見えなくなる。

そしてセリスに向かって、「いいぞ」とささやいた。

ジークのささやきを聞き、セリスはゆっくりとフードを下ろした。

2話 砂漠の薔薇（後書き）

ちよつと間があきました。

しばらくは投稿は不定期になると思います。

3話 異なる「黒」

ジークの行動に怪訝な顔をしていた店主は、現れたセリスの顔を見て驚き、次いでその美しさによって納得した。

なにせ双黒は目立つ。

また、ジークの相棒が女性ということも驚きだった。その色から一瞬ジークの妹かと思ったが、すぐに考えなおす。

ジークの持つ『黒』はまさに吸い込まれるような漆黒という表現がふさわしいものだ。二つ名になるほどには印象深い。

対して目の前の少女の持つ『黒』はさらに変わっている。肩を越える長さの髪は、影の部分は間違いなく黒だが、光が当たる部分は銀の光沢を帯びている。瞳も、よく見れば紫がかったようだ。その美しさもあいまって、神がかった、神秘的な印象さえ感じられる。

顔立ちも、どちらも整っているが共通点はなく、血がつながっているようには見えない。また、彼には親の顔を知らず、彼を捨てた養い親がザリアスと知り合っていたことからジークと知り合い、剣の才能を認めて弟子にしたのだと聞いたことがある。

だがそれ以上に店主が兄妹という関係だと思えない理由は、二人の対等な雰囲気と、ジークの彼女を見る眼差しだ。

ジークのことは《剣聖》ザリアスと共に旅をしていた頃から知っているが、女性にこのような優しげな、愛おしげな眼差しを向ける彼は初めて見る。

何もせずともジークは女に困ったことはない。向こうから寄って

くるからだ。長身で引き締まった細身の体。端正だが消して女性的ではない精悍な顔立ち。その彫刻のような顔立ちを、鋭く、不敵ささえ感じさせる眼光が生氣あるものになっている。それに加えて誰もが認める剣の腕前と名声を持つとなれば、女性達が目をつけられないはずがない。

実際、店主はジークが目の前で誘いをかけられる場面を何度も見ただことがあるし、彼がそれに応じることも多々あった。しかし、誰もが『一夜の関係』で終わっているのだ。

そんな彼が愛しげに見る少女。しかも、今までの行動から見てかなり大切にしているようだ。

そんなことを考えながらまじまじと（半ば見惚れながら）見ていると、「・・・もういいだろ。」というジークの不機嫌そうな声とともに再び少女の顔がフードで隠された。そんな突然の行動に驚き抗議する少女の声を聞きながら、店主は「何が出来るんだ？」と尋ねた。

外套の上から見ても明らかに少女の体は華奢で、武器を取って戦うようには見えない。とすればおそらく

「魔法を。属性は一通り、中級程度まで使えます。得意なのは風と水の系統、これらは上級まで大丈夫です。後は結界と治癒。魔法以外では体術を少々。まあ、護身術程度ですが。あと・・・・術です。」

セリスの答えはほぼ店主の予想通りだった。魔法を使うことはどう見ても戦士向きではない体格からして確実。体術はジークが仕込

んでいるのだろう。ただ、最後のひとつが引つかかった。

「治癒が出来るのなら、医術は必要ないんじゃないか？」

治癒とは魔法を使つての治療。医術は魔力を使わず、薬草などを使う治療。これが一般的な認識だ。

治癒と医術の両方を修める必要はない。

「あ、それは間違つた考え方です。まず第一に、治癒は切り傷や打ち身、火傷など、肉体の怪我には大きな効果がありますが、特殊なものを除いて病気にはあまり効きません。逆に医術は基本的に自己治療能力に任せるので特に大怪我には手の打ちようがないですけど、病気には体の内側から治していけるので、治癒をかけるよりよっぽど確実なんです。第二に、大きな怪我なんかは一から治すのにとっても魔力を使うんです。でも、医術を利用して症状を緩和させれば魔力の無駄遣いが減ります。これはとっても大きいです。最後に、薬草をはじめとする医術の知識って、治療以外でもとっても役に立ってますよ。」

ふふふ、と黒い微笑とともに付け加えられた最後の部分に店主は思わず冷や汗をかいた。

3話 異なる「黒」 (後書き)

不定期と言いながら、連続更新です。
なかなか先に進まないんですよえ…。

4話 彼女の力

冷や汗をかきながら、店主はジークにセリスのランクを尋ねた。

ギルドランクを尋ねるのには意味がある。実力はあっても実戦経験がない、というのではないぞというとき使えないのだ。ジークが相棒というのだからまったくの素人ではないのだろうが、知っておくに越したことはない。

「ランクはDランクだが、そもそもギルドに加入したのが一年ほど前だから参考にはならないぞ。ただ、使えるということは保証する。経験に関しては確実に俺よりあるし、実力も今の状態でも本気で戦えば俺でも勝てるかどうかだからな。」

ジークのランクはAランク。最強といえる部類だ。そんなジークの言葉に驚いていると、トドメとばかりの台詞が。

「この前、三つ目狼退治の依頼をこなしました。数が多かったのでジークと二人で、ですけど。」

「ここから南に10キロ程の所だな。結局60頭ほどいたんだよな。」

「……確かその地点には30ほどの氷漬けの像が立っているのだと2、3日ほど前から噂があったはずだ。」

「……わ、わかった。力は十分なようだな。依頼主は商人のラダムス。砂海亭という宿にいる。『砂漠の薔薇』からの紹介だと言

えば大丈夫だから、この後会っておけよ。」

酒瓶が並ぶ棚の陰から書類を引き出して告げる店主に礼を言い、店を出ようとした時、

「……ジーク、やっぱり降りないか？」

店主の思いがけない言葉に振り向くと、心配そうな顔があった。

「サラテイルドで名指しの依頼がある。緊急の要件だそうだ。次は一週間待たなくてはならないからな、却下だ。」

「そうか。いや護衛のメンバーが少しな。お前の顔見知りがいギルと……アンジェリカなんだ。」

「アンジェリカ？」

その名を聞いて、首をかしげるセリスと顔をしかめるジーク。2人の（とくにジークの）様子を見て「やっぱりやめるか？」と声をかけたが、ジークは首を振った。

「分かった。気をつけるよ……。」

「ああ」と答えて店を出るジークと、それを追いかけるセリス。2人の後ろ姿を店主は心配そうに見送っていた……。

・・・数時間後、場所は変わって宿で。

『砂漠の薔薇』を出た後、その足で二人は砂海亭へ向かった。砂海亭は最高級の宿なので場違いな旅人二人が門前払いされかけるとい一幕もあったが、ジークのAランクのギルド証によって何とか入り、ラダムスに面会すれば、後は『砂漠の薔薇』の紹介とAランク傭兵ということで、無条件で雇用が決まった。

その後、ジーク行きつけの『安くて料理がうまい宿』で部屋を二つ取り、二人はそれぞれの部屋で旅装を解いて、今、ジークの部屋で二人でくつろいでいた。

ちなみに、わざわざ二つ個室をとったのに片方の部屋で休んでいるという現状に疑問を持たない。

少なくともセリスにとっては二人部屋ひとつでも構わないのだが、セリスの年恰好から不名誉な噂を立てられてはたまらない、というジークの意見によって部屋を分けている。

「アンジェリカって誰なの？」

唐突に投げられた問いに、愛剣の手入れをしていたジークはセリスへ目を向ける。ベッドに寝そべる相手の目に浮かぶのは予想通り、嫉妬などではなく溢れんばかりの好奇心だ。その様子に内心ため息をつきながら、「昔の女だ。」と答える。

「それだけ？」という視線を向けてくるが、無視して手入れを再開する。そんなジークの様子をつまらなそうに眺めるセリスを見ずに、からかいを交えて「『見て』いたんじゃないのか。」と尋ねる。

「言っただでしょ。基本的に『見て』いたのはその剣を抜いたときだけよ。確かに様子は知りたかったけど、監視をしたい訳じゃなかったもの。私生活なんかほとんど知らないわ。」

「と、いうことは少しは『見て』たんだな？」

「・・・っ！そ、そういうえば、もう一人、えーと・・・そう、エイギル！！その人は誰なの？！」

ジークの切り返しに、旗色が悪くなるのを感じてか、話題を変えようとセリスは叫ぶ。しかし、

「ただの知り合いさ。で、『見て』たんだよな？」

「わ、わざわざあの店主が言うんだもの、それなりに親しいのよねっ！」

「何度か一緒に仕事はしたな。で、どうなんだ？」

「・・・」

「どうなんだ？」

「・・・」

「黙ってるってことはやっぱり『見て』たんだな？」

「・・・」

「・・・あーもう！確かに少しは『見』ましたよ！しばらく剣抜いてないけどどうしたのかな、と思ったのよ！」

「つまり、心配したんだな？」

「当然でしょう！！・・・こうなったら、そのエイギルとかいう人に、あなたの可愛かった子供時代をばらしてやるから！！！」

こぶしを握って言うセリスに、思わず、何度も尋ねた疑問を投げる。

「・・・ほんとに精神そのままなのか？性格変わりすぎだろ。」

返ってくる答えも、向けられる少女とは思えぬ艶やかな笑みも何度も見たもの。

「女は誰だっっていくつもの顔があるのよ。」

その笑みは確かに『彼女』そのままで、ジークは思わず………見惚れた。

4話 彼女の力(後書き)

PV700突破 ありがとうございます。

また、評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。これからも見守ってください。

5話 波乱の出発 1 (前書き)

とうとうサブタイトルに番号をつけてしまいました・・・

5話 波乱の出発 1

煌々と輝く月。

静まり返った街の中、一人、少し欠けた月を見上げる。

「満月まで、あと五日、か……。」

ほろり、言葉がこぼれ落ちて

消えた

隊商の護衛の依頼を受けてから三日後、セリスは砂漠の入り口で佇んでいた。

ジークは少し離れたところで、面通しを兼ねた今日の、ひいては今後の日程についての確認をしている。おそらく、護衛の位置や緊急時の対処についての打ち合わせをしているのだろう。

その外見のために侮られることが少なくないセリスは、そういった打ち合わせに参加することはない。意見をしてもらえられ、必要ないことは滅多に無いし、基本的にジークと行動するため、必要なことは彼から聞けば済んでしまうのだ。

なので、この状況自体に文句はないのだが……

「少し離れてるっていうのはひどいよねえ？」

そう言つて見上げたのは、一頭の黒馬。セリスがその影にすつぱりと隠れてしまうほどに大きい。

ルースという名のこの馬は、ジークの愛馬だ。足が速いのはもちろん、賢く、誇り高く、己が認める人間以外はその背に乗せないという。

彼の日陰にいるセリスだが、暑さはどうしようもない。うんざりしているセリスに、ルースは申し訳無いというように小さくいななく。

今回のように急ぎの旅のときは普通、転移陣を使う。転移陣は大都市には必ず設置されており、少々の使用料を払えば一般人でも使用できる。今回の目的地であるサラテイルドは大国ラテイルドの首都であり、当然転移陣も存在する。ただし、転移できるのは人だけであり、大量の荷物を運ぶ隊商や、セリス達のように騎馬を連れたいものは使用できない。よって確かに今回の砂漠越えは彼のせいといえるのだ。

普通ならば馬にそんな事情が理解できる訳はないが、彼はただの馬ではない。また、色々逸話もあるらしく、本来Aランクとはいえない傭兵が所有できるものではない。手に入れるまでの経緯に興味はあるが

「教えてくれないんだよねえ。」

なぜか、いきさつを教えてくれないのだ。

話を漏れ聞く限りではかなり有名な話のようだが、ジークは教えてくれないし、よほど聞かれたくないのか他人に尋ねようとしても邪魔されるのだ。

「・・・・・・・・・・はあ。」

長く離れていたのも、知るのは必要最低限の様子のみにしたのも自分の意志だが、『自分の知らないジーク』というものに思わず溜め息をつく。と、打ち合わせが終わったらしく、集まっていた人々が散っていく。それでもぼんやりしていると、近づいてくる気配がした。

セリスは戦士ではない。しかし、過ごしてきた多くの経験ゆえに、ジークには及ばないものの、魔法士としては格段に気配を察知することに長けている。近づく気配にどうしようか迷い、ジークの居場所を探る。セリスとジークはある事情から離れていても互いを認識することができる。本来ならば意思疎通さえできるのだが、『本来の力』を抑えている状態ではそれは叶わない。ジークがまだ先程の場所から動いていないのを知り、いざという時の味方として背後の黒馬に近づくと、黒馬は安心させるように顔を近づけた。

ルースのその反応から、少なくとも警戒すべき存在ではないと感じ、セリスは体の力を抜いてルースの顔をなでる。そうしているうちに気配は近づき、足をとめた。

気配がある方向に顔を向けると、明るい茶色の髪をした青年がいた。こちらを見て、きれいな翡翠色の目を丸くしている。年恰好はジークと同じくらい、いつもどこか鋭い印象のある彼とは正反対だが、なかなか魅力的な顔立ちだ。腰にさした二本の剣はなかなか使いこんであり、護衛の一人だろう。

黙って観察していると、青年のほうから話しかけてきた。

「えっと・・・その馬『ルース』だよ。かの《闇夜》の愛馬、《戦神の神馬》のルーセルディリア。」

耳慣れない単語があったが、間違っではないので頷く。すると面白そうな顔をされた。

「そいつがそこまで懐いているってことは、君が噂の『相棒』さんかあ。」

そう言って笑う。しかし、その目はセリスを観察し、推し量っていた。

「『相棒さん』ではなく、セリスです。あなたは？」

それを気にせず、セリスからも尋ねる。自分から名乗ったのは相手の名が予想できたからだ。

「俺はエイギル。よろしくな。」

思った通りの答えに、セリスは微かな笑みを浮かべた。

5話 波乱の出発 1 (後書き)

PV1000、ありがとうございます！

ユニークアクセスももうすぐ(?)500です。

ほんっとーに感謝しています。

これからもよろしくお願いします。

*書き方を少し変えてみました。

6話 波乱の出発 2

相手の名が予想通りで会ったことに満足したセリスは、とりあえず一番気になっていたことを尋ねることにした。

すなわち、『戦神の神馬』と『ルーセルディア』という言葉について。

ルースを指していることは解るのだが、どんな意味かは知らない。そうエイギルに言つと、目だけでなく口まで開くほどに驚かれた。

…ずいぶん有名な話らしい。

「ルーセルディアアっていうのはその馬の名前。ジークはルースって愛称で呼んでるけどね。」

もともとラティルドの王が所有していて、神馬っていう特別な種族の血をひく誰にも従わない暴れ馬として有名だったんだ。それがあの《サラティルドの大侵攻》で乗り手を選び、共に戦神もかくやという戦いぶりをした、ということであつた。呼び名が《戦神の神馬》という訳。」

エイギルの説明に安直なと思いつつ、フムフムと頷いていると、「本当に知らなかったの？」と笑われた。

「有名な話なんだとは思ってましたよ。でもジークに訊いても教えてくれないし、人に訊こうとすれば邪魔されるんで知りたくても知れなかつたんです。」

笑われたことにムツとしてそう反論すると、彼は悪戯っぽい笑み

になった。

「へえ……ジークがねえ……」

じゃあ、これも知らないかな？ジークとルースが有名になったもう一つの理由。

実はジークがラティルド王からルースを賜る時、本当はルースではなくひ」「おい。」

エイギルの言葉を遮る様に向けられた声。と同時に後ろから肩をがしり、と掴まれる。

近づいてくるその人物に初めから気付いていたセリスとは違い、よほど驚いたのか固まるエイギル。しかし肩を掴んだ手にググツと力を込められたのを感じて無理やりな笑みを浮かべて振り返る。

「や、やあ。ひさしぶりだね……ジーク。」

引きつった声音での挨拶に、ジークは口元だけの笑みを返す。しかし、目は笑っていない。

「ああ、久しぶりだな、エイギル。で、人の相棒に何をロクでもないことを吹き込んでるんだお前は。」

「い、いやだなあ。脚色されまくった噂ではなく、親友の目線からの真実を聞かせていただけだよ。」

ロクでもないなんて人聞きが悪い。」

「誰が親友だ、誰が。」

物騒な笑みのジークと冷や汗を浮かべるエイギル。

しばらくそんな二人の攻防を眺めていたセリスだが、痺れを切ら

して口を開いた。

「で、ルースではなく、なんなの？」

びたり、と二人の動きが止まる。エイギルを引つ掴む手はそのま
まに、ギギギ、という音が聞こえそうなほどきこちなく、ジークは
セリスのいるほうへ首を回す。

「……………何の話だ。」

「ジークがルースを貰う時の話？」

「……………エイ
ギル。」

長すぎる沈黙ののち、冷や汗を浮かべるところかダラダラと流す
古なじみの友人の名を呼ぶと、ジークは

「逝つてこい。」

「オワッ!!!」

抜刀した。

大剣とは思えない速度のそれを、とつさに避けるエイギル。だが、
続いて二撃目、三撃目と繰り返される。何とか避けきり、距離を置
くエイギル。

セリスはそんな二人を眺めていた。止める気はない。ジークには
やや劣るが、見た限りではエイギルはそこらの剣士では太刀打ちで
きないくらいには強い。本気でやれば確実にジークが勝つだろうが、

彼も本気でいるわけではない。よってエイギルに危険は無し、と判断する。

気の済むまでやらせようと考えながら二人の攻防を観戦していると、誰かが近づいてくるのを感じた。

6話 波乱の出発 2 (後書き)

PVアクセス 1500突破。 ユニークアクセス 500突破。
ありがとうございます。

少し間があきました。

もう少しペースを上げて頑張りたいです。

7話 波乱の出発 3

ジークが二戦目を始めようとしたとき、

「ジーク。」

邪魔されたということよりもその声の主に苛立ち、ジークはその苛立ちを隠そうともせず舌打ちした。そもそも打ち合わせの後にこの女に引き止められていたせいでセリスの元に行くのが遅れたのだ。エイギルを見ると、それがわかつているのか苦笑いをしている。いつそ無視してやりたいが、この場にはセリスがいる。女性の扱いに厳しい彼女は決してそれを見過ごさないだろう。ややこしい事態になるのは明らかだ。

仕方なく剣を収めると、駆け寄ってくる女の姿があった。傍に来た女はジークの腕を取り豊かな胸に押し付け、自らへの自信と媚を覗かせた目で見上げる。赤い唇からこぼれるのは甘えを含んだ声。

「いきなりどっかに行くからビックリしたわ。まだ話は終わってないわよ？」

その男を惹きつけてやまないであろう容姿も、肢体も、動作も、ジークの心に何一つ感銘をもたらさない。いや、どんな美女でも同じだった。すでに彼の心にはいつでも唯一人がいるのだから。

近づいてきたのは赤い髪が印象的な女性だった。剣士であることを示す剣は女性用らしく、一般のものよりも細身である。肩までの髪は鮮烈に赤く、ゆるく波打っている。長身だが簡素な革鎧の上からでも女性的なラインが明らかかな肢体や、自信に満ちたはしばみ色の瞳もあいまって、勝気な美人という言葉がよく似合う。

「アンジェリカだよ。」

セリスが、身を寄せ合うようにして（というよりアンジェリカが一方的に擦り寄っているのだが）話す二人をぼうっと眺めていると、いつの間にかエイギルが隣に来ていた。アンジェリカが来たのを幸いにジークの元から避難したらしい。

セリスが見上げると笑い返された。

「気になる？」

「別に。」

間を開けずに返ってきた返答が含むもの。それを見分けようとして、エイギルは挫折した。

言葉だけならば、意地っ張りな少女の虚勢のような反応。しかし、そうにしてはあまりにも空虚な声音。表情が変わらないこともあり、本当に人形になったかのようだった。

何となく目を逸らしながら（友人^{ジーク}の為に）アンジェリカについて補足をする。

「剣の腕は中の上ってとこかな。強い人間のいるグループに加わって生活しているらしい。」

見ての通り、ジークに熱烈アタック中。打算も入っているだろ

うし、どれだけ本気かは知らないけれどジークは全く相手にしてないな。

「当人はなんか言ってた？」

「聞いたんだけど、昔の女だ、としか言ってくれないの。」

先程の虚ろな様子が嘘のようなセリスの態度。しかし、その言葉の内容にこそエイギルは驚いた。ジークがそこまで話しているとは思わなかったのだ。

「………ちなみに意味は解ってる？」

「そこまで言わすの？肉体関係があつたつてことですよ。」

「えーと………スミマセン。」

睨まれて思わず謝りながら、そのざっくりした説明に内心絶句するエイギル。

そんなエイギルから目を離し、セリスはフィと視線をジーク達に戻した。こちらへと歩いてくるジークとそれを追うアンジェリカを見つめる。

「………やっぱり、離れるべきかな。」

小さな呟き。しかし、うつむく彼女の表情は見えなかった。

7話 波乱の出発 3 (後書き)

なんだかアンジェリカが出てきてから書きにくい…。
個人的には好きなんですけどねー、彼女。

8話 波乱の出發 4 (前書き)

いつの間にやらPVアクセス30000&ユニークアクセス10000
突破!

ありがとうございます……!

8話 波乱の出発 4

まとわりつくアンジェリカを無視してセリスの元へ向かうジークの機嫌はとてつもなく悪かった。

普段なら即座に剣を抜いているところだ。それをしないのはセリスの存在があるからだ。

しかしそれを勘違いしたのかアンジェリカはしきりに声をかけ、ジークの歩みを妨げる。正直、いつも以上に鬱陶しい。

だがそのイライラも、こちらを見るセリスの表情を見た瞬間に吹っ飛んだ。

アンジェリカのことなど頭から消え去ったジークは、まとわりついてくる腕を乱暴に振り払い、セリスへ駆け寄っていた。

一見、普通な、しかし見る者に奇妙に虚ろな印象を与える、その表情。

それはセリスが、『ジークがけして許せないこと』を考えている兆候だった。

すなわち
セリス
ジーク
彼女が自分の前から消えることを。

「セリス」

自らの思考に沈んでいたところに、突然かけられた声にゆっくりと、知らず俯いていた顔を上げる。

「セリス、俺を見る。」

言われたとおりに長身のジークの顔を見るために、小柄なセリスはさらに顔を上げる。

反対にジークはセリスの瞳を覗き込むように身をかがめる。

互いの吐息が感じられそうな距離。まるで口づけするかのような体勢だが、二人はそんなことに気づかない。

空虚なセリスの瞳を見つめながら、ジークは囁く。

「俺は自分の意志であんたのそばにいるんだ。今の状態は俺自身の望みによるものだ。あんたが悩むことじゃない。俺の人生も、幸福も、この現状も、俺の意志で望んだものなんだからな、後悔なんてない。」

ジークの言葉に、空虚であったセリスの瞳の奥から感情があふれる。悲しみと安堵、その両方でセリスの表情がくしゃりと崩れた。

「後悔した時には遅いんです。今ならばまだ間に合う。ジーク、あなたには人間として幸せになってほしいんです。人間として生まれたものは人間として生きてほしい。それを捨ててしまった私だからこそ、誰よりもあなたにそれを願うのです。」

ジーク、私の愛しい子よ。あなたには私と同じ想いをしてほしくはない。」

自分を大切に思ってくれるが故の言葉。それはとても嬉しいものだったが、彼が望むものではない。彼の望みは、幸せは、唯一人の元にあるのだから。

けれども、まだ、言えない。言っではいけない。
こみ上げる彼女への思いを飲み込んで、自分の心だけを言葉にする。

「あんたの言うことは解る。けれどそれを受け入れてしまったら、俺は間違いなく後悔するんだ。

確かにいつか後悔する日が来るかもしれない。けれど、後悔すると決まっているのにその道を選ぶことだけはできないし、したくもない。少なくとも、今の道を選んでから、その選択で後悔なんてしていない。していたら、その時に契約を解いている。俺にはその権利があるんだからな。」

最後の言葉にはつとめるセリス。その左耳で揺れる耳飾りに、ジークはそつと触れる。セリスは右耳には何もつけていない。対である片割れは彼の右耳で揺れている。それは自分がセリスに契約の証として贈ったもの。同時に、ジークにとっては覚悟と決意の証でもある。

「……………わかりました。」

自らの養い子の心を尊重し、セリスの方から折れた。

8話 波乱の出発 4（後書き）

セリスの口調、というか性格が変わっているのはわざとです。

彼女の言葉を借りれば、「いくつもの顔を使い分けている」といった所です。

でも、どれも彼女ではあるんですよ。

9話 波乱の出発 5

目の前の光景に、エイギルは硬直していた。理由は、少し前までさかのぼる。

妙に空虚な印象をもたらすセリスを見ていられず視線を逸らすと、友人がこちらへ歩いてくるのが見えた。まわりつくアンジェリカの腕を無視する姿に違和感を感じていると、フツとジークがこちらを見た。その途端、顔色を変えると乱暴にアンジェリカの腕を振りほどき、こちらに向かってくる。視線をたどると、軽くうつむくセリスの姿があった。

駆け寄ったジークは顔を上げたセリスに自分の顔を近づけ、二人はそのままにやら話し始めた……。

そして今、エイギルの前には、知らない人が見たら間違いなく誤解を受けるであろう体勢をやめ、何事もなかったかのように立つ二人と、ジークにしなだれかかり微笑みながらもセリスを睨みつけるアンジェリカがいた。

(えーっとお……………)

先程から自分に向けられる鋭い視線にセリスは困惑していた。

ジークとの会話を終えたあと、彼を追ってきたらしいアンジェリカはセリスを見咎めた。彼女の視線はまずセリスの顔に向けられ、次に下へと降りていき、また顔に戻る。しばらくじろじろと見たあと、フンツと鼻で笑った。そして、ジークにしなだれかかる。

鬱陶しげに顔をしかめるがいつものように邪険にはしないジークに気分を良くし、セリスに向かって優越感に満ちた笑みを投げかけた。

「あなた、ジークの依頼人？」

「えっと」「俺の相棒だ。」

セリスの言葉を遮り、切りつけるようなジークの言葉。その思いもかけない内容にアンジェリカはセリスを睨みつけた。

突然向けられた鋭い視線に、訳が解らないセリスはわずかに身動きする。

そんなセリスを背にかばうジークに、アンジェリカはセリスを見る視線をより鋭くさせた。

そんな攻防をを他所よそに、セリスは自分を見下ろし、身につけている物を確かめる。

生成りのチュニツクに桃色のワンピースを重ね、黒いスパッツをはき、こげ茶のブーツを履く。両手には革の指無し手袋をして、旅人の必需品といえる外套をまとう。本来はこれに砂避けのフードマ

フラーをするが、今はしていない。

防具をつけていないこと、外套が砂漠用ではなく一般的な厚手のものであるということを除けば、砂漠の旅人の典型的なスタイルだ。

(別におかしくないよね・・・?)

アンジェリカの視線の鋭さの理由に思い至らず、首を傾げるセリス。

以前にも述べたが、セリスは自身の容姿については自覚しているし、まともな美醜感覚も持ち合わせている。しかし、その容姿が周囲に与える影響の大きさというものをまったく考えていないのだ。

よって、自分が狙っていたジークの相棒になった少女に嫉妬し威嚇をした。ということに思い至らないのだ。

そんなのんきなセリスの様子を見ていたエイグルは、アンジェリカの威嚇が通じていない様子にホツとした。しかし、アンジェリカと向き合うジークの様子に再び顔を強張らせる。ジークとはなかなか長い付き合いなエイグルは、まわりついてくるアンジェリカに急激にジークの機嫌が悪くなっていくことを感じ取っていた。それが、セリスについて難癖をつけるアンジェリカの言葉によって、限界が近づいてきたのだ。

セリスのほうはそれがわかっているのかいないのか、一方的にどんどん激しくなっていく会話を静かに聞いている。

そしてとうとう、ジークの堪忍袋の緒が切れた。
乱暴にアンジェリカの腕を振り払い、距離を置く。

「いい加減にしろ!!! お前とセリスでは比べ物にならない。実
力も、それ以外でもな!!!」

そもそも、俺にとつてお前は何の価値もない存在だ。これ以上
無駄な時間を費やさせるな。目障りだ!」

これまでの憤りが一度に噴火したのだろう。乱暴な口調で吐き捨
てるジーク。

大きく目を見開いたアンジェリカに向かって最後通牒を突きつけ
た。

「これ以上うるさく言うなら、切る。」

身にまとう殺気は本物だった。

さすがに言い過ぎだと感じ、その気迫に耐えながらエイギルはジ
ークをなだめようとした。

しかし、それより早く

「ジーク!!!」

振り向くと、腰に手を当てて仁王立ちし、ジークの殺気に怯むこ
となく睨むセリスがいた。

9話 波乱の出発 5 (後書き)

次は少し短くなるかもしれませんが・・・。

10話 波乱の出発 6

長い付き合いであり、傭兵として幾度も死線をくぐり抜けてきた強者であるエイギルでさえも怯む、ジークの本気の殺気。

しかし、セリスはそれに臆する事なく、むしろそれ以上の気迫でビシリと指を突きつけた。

「部外者で、経緯を知らない私が口を出すのもどうかと思って黙って聞いていましたが、もう我慢できません！」

自分より弱い女性に対して切るとは何ですか！！！！

他にも目障りだとか、何の価値もないとか・・・いくら何でも言いすぎです！！

アンジェリカさんと何があつたのかは知りませんが、これから一緒に旅をする人、しかも協力し合うべき護衛という立場の相手に言っている言葉ではないでしょう！！そもそも

「

延々と続くセリスの説教に、ジークは少々怯んだ様子を見せた。

渦巻いていた殺気はすでに無い。

ようやく、先程からのジークの不可解な言動の理由をエイギルは知った。

ジークは女性に冷たいというわけではない。必要以上に表に出さないし、にこやかにしている訳でもない。誤解されがちだが、いっただってさりげない優しさを持っている。

ただ、それに勘違いしたアンジェリカのような女には容赦がないのだ。特にしつこい部類に入るアンジェリカに対してはなおさらで、本来なら腕をからめたりしなだれかかられた時点で一睨みし、突き放すぐらいはしているはずなのだ。

それをしなかったのはセリスを怒らせたくなかったからか。

自分より小柄で若い少女にこんこんと説教され、反撃どころか
す術も無いジークを見やって思わず微笑^{わらう}う。

さすがのAランク傭兵も相棒には敵わないらしい。

「こいつが理解しないのが悪い。俺は以前から言い続けているんだからな。」

普通に言ったのでは理解しないんだ。その時点で気を使う必要は無いだろうが。」

セリスの言葉の合間をぬって何とか反論したジークだが、即座にセリスは叩き潰す。

「何のために話術を仕込まれたと思ってるんですか!!!物には言い様という物があるんですよ!

それに、女性には優しくと教えられたでしょう!!!他人への気遣いを忘れるなども言われたはずですよ!!!

そもそも、手当たり次第に女性に手を出すからいけないんですよ!!!

貴方も立派に成人した男性ですから、女遊びは目を瞑るとしても相手を選ぶべきなんです!!!

そんなんじや本命が出来ても逃げられますよ!!!」

10話 波乱の出発 6 (後書き)

セリスが切れました(笑)

ジークがセリスを怒らせることは滅多にありませんでしたが、その分一度雷が落ちたときの恐ろしさは身にしみています。

そのため、どうしてもセリスの説教モードには気後れしてしまうのです。

11話 波乱の出発 7

沈黙から一番最初に回復したのは、やはり一番付き合いの長いジークだった。

セリスについてよく理解しており、彼女の事情も知っているからこそ、セリスの精神が外見の幼さに反して長い時を過ごしていること、常人とはかけ離れていることを承知していた。

それでもしばらく固まったのはその発言内容ゆえだが。

「女遊びに目を瞑るって・・・『見て』無かったんだらう？」

動揺のあまりに、余計なことを口走るジーク。だがセリスは知らずジークに追加の爆弾を落とす。

「確かに『見る』ことはなかったけれど、オウルがよく教えてくれたわよ？」

「はあっ？」

「あの子も仕事で忙しいから直接会うことは少なかったけれど、連絡は取れるようにしていたから・・・。ジークのことを心配してるだろうからって良く教えてくれたの。」

「あの野郎・・・。」

唸るジークに思わず口に手を当てて笑みをこぼすセリス。と、ここではっとして再びビシリと指を突きつける。

「と、とにかく!!! ジークはアンジェリカさんに、今の発言についてきちんと謝るべきですよ!!!!」

とたんに心底嫌そうな顔をしたジークは、おもむろに騒ぐセリスを抱え上げるとルースの背に乗せた。

驚いたセリスは思わず口をつぐむ。

それを逃さずジークもルースの背にまたがった。

「ちよ、ジーク!!!?」

それに慌てたのはエイギルだ。

「なんだ。」

「何だつて……セリスを乗せて行くつもりなのか? ルースに負担がかかるし、いざという時危ないだろ。」

砂漠の旅において騎馬の体力を極力消費させないようにするというのが常識だ。

さらに、ただでさえ狭い馬の背に二人乗ると身動きがとりにくく、戦闘が起こったときに不利になる。ジークは最前線で戦うことが多いため、セリスだけでなくジークにも危険が及ぶ可能性がある。

常識的に考えてメリットは無いのだ。

「ルースの体力の尋常の無さはお前も知ってるだろうが。それにセリスは馬車に押し込めるより、外に出ていたほうが役に立つ。」

「ルースには申し訳ないけれど、私にとってもこの方がなにかと都合がいいの。」

ルースまでもが気にするなと言わんばかりに鼻を鳴らす。思わず

エイギルは頭を抱えた。隣で蒼白になり、唇を震わせるアンジェリカを横目で見やる。

ルースが大人しく乗せているというのはセリスはルースにそれだけの人物だと認めさせたことになる。自分が認めた者以外けして乗せることは無かった誇り高い馬。そのルースがジーク以外の者に乗せることは滅多に無い。だからこそセリスがルースの背に乗ることを許されたということの意味は大きい。

いきなりルースの背に乗せることで、ジークに誤魔化されたことに気づいたセリスが抗議しようとしたそのとき、出立の笛の音が響いた。

その合図にエイギルもアンジェリカも慌てて自分の配置に向かう。それを見送り、ジークも馬首をかえした。

突然の動きに、不安定な体勢でいたセリスは体をふらつかせた。

普段はジークの後ろに座っているが、今は彼の前に座っているの
で咄嗟に掴まる物が無く、大きく揺れたセリスの上半身はジークの
広い胸に受け止められた。

そのまま見上げると彼の顔が見え、今の自分とジークの身長差を
思い知らされた。

そして、気づいたことがもう一つ。

「ジーク。」

名を呼ぶと視線だけが落とされる。

「さっきは色々言いましたけど」

覗きこめば何もかも見透かされそうな漆黒の目をまっすぐに見つめ、微笑わらいかけいかける。

「貴方あなたがとっても優しいことは、良く分かっていますから。そう、例えば

今の、気遣いとが。」

ジークの影にいるために、セリスには砂漠の強烈な日差しは届かない。それだけでも体への負担はかなり減る。セリスを前に乗せたのはそのため。

それだけ言っただけでセリスは口をつぐむ。再び前を見るジークは何も答えない。静かだが、気詰まりでない空気が漂う。

しばらく二人は寄り添ったまま、その心地よい沈黙に浸っていた。

「二人の世界を作っちゃって、まあ。」

呆れたようなエイギルの視線と

「……………」

暗さと危つさを秘めた視線が向けられていることに気づかぬまま
に。

火種を抱えたまま、
今、旅ははじまったばかり

11話 波乱の出発 7 (後書き)

やっと終わった!!!

ずいぶんグダグダになってしまった気がします。

でも、どうしても書きたいところばかりだったんですよ！

12話 第一夜 1

まだ街からさほど離れていないこともあり、第一日は盗賊の襲撃なども無く、何事もなく終わった。

しかし、交代とはいえ1日中気を張り詰めていたこと、灼熱の日射しに炙られ続けていたことで体力が資本の傭兵達も少々疲れを見せていた。

砂漠では昼夜の気温差が激しい。

日が昇るにつれ辺りは灼熱地獄と化し、日が沈めば気温は容易く氷点下を下る。

それゆえ旅人たちは日が最も高く昇る正午の活動を避け、活動する生き物の少ない夜に短い休息を取る。そして比較的過ごしやすく、星が出ていて方角が分かりやすい夜明けと日没間際を中心に行動するのだ。

今日も日が沈みきり急速に近づく冷気に耐え、皆野営の準備をする。複数でパーティーを組んでいるものは天幕を用意し、そうでない者は火をおこしたり寝場所の確保にいそしむ。

しかし、個人差はあれど皆疲れた顔で皆が黙々と作業する中、ある一角だけは賑やかだった。

セリスとジーク、エイギルの三人である。

「なあ、ジークはともかくなんでセリスまでそんなに元気なんだ？他の奴なんか護衛と砂漠越えてっていう組み合わせのせいで交代で休憩してても疲れてんの丸分かりなのにさ。」

護衛というのはただでさえ神経を使う。常に襲撃を警戒し、不測の事態に備えるからだ。

それに過酷な砂漠という環境が加われば、心身への負担は相当なものだ。

なのに繊細な花のようなこの華奢な少女に、疲れのかげりは見えな

い。「セリスを普通の魔法士と同じように考えるなよ。元々基礎体力はそこらの傭兵と同じくらいはあるんだ。加えて砂漠をわたった経験もあるから、体力の消耗を抑える術も心得ている。あと・・・この外套もあるしな。」

そう言って手渡されたのは砂漠を渡るには不適切な厚手の外套。訝しげにしながらも、試しにエイギルはそれをはおってみる。そして、驚いた。

身に凍しみるような冷気を遮るのはもちろんのこと。それどころか体を温もりが包んでいるのが感じられる。

「“冷気”と“暖気”が付与されている。暑い時は涼しいぞ？それ以外にも色々加えられているから、物理防御・魔法防御共にそこらの皮鎧よりある。」

荷物を置きながら、なんでもないように言われた言葉にエイギルは驚きの目を向ける。それ程のものなら計り知れない価値があるはずだ。

視線の意味を読み取り、ジークは説明を加える。

「こういった物の研究はセリスの趣味の一つだ。他にも作品は色々あるぞ。例えばこの袋はいくらでも物を入れることが出来る。旅人には垂涎の品だろうな。後は最近作っていた・・・これだな。」

取り出された物は天幕のミニチュア模型。一瞥でもそうと分かるほど、かなり精巧に作られている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここらでいいか。」

砂の上に置き、数歩下がる。

「レギス」

鍵言葉^{キーワード}によって定められていた術式が作動する。

「うおっっ?!」

手のひらに乗るほどの大きさだったはずのそれは一瞬で大きくなり、普通の天幕と何一つ変わらない様子で存在していた。

13話 第一夜 2 (前書き)

いつのまにやら7000PV突破!!!
ありがとうございます!!!

13話 第一夜 2

「セリスちゃん、セリスちゃん!!! ジークをやめて俺と組まない? んで、これ売りだそーよ!!! いっぱい作ってさ!!! 俺、いい伝手^{って}持ってんだ! 絶対これ売れるって!!! あ、儲けは出来れば折半でよろしく!!!」

ミニチュアール・テント
模型天幕に興奮したエイギルは、製作者^{セリス}にそう詰め寄った。

そのあまりの勢いに、思わずセリスはジークの背に隠れる。
ジークは彼女を庇うように立ち、さらに近寄るエイギルを首根っこを掴んで引き剥がす。

「落ち着け馬鹿。そんなに上手くいく訳あるか。」

「ええっ?!」

おそろおそろジークの後ろから顔を出し、説明する。

「小さい物を大きくすることも、その反対も、それ自体は難しくないの。でも、その状態を維持するとなると難易度ははね上がる。それ相応の魔力や技術が必要となるのよ。まして、魔力の少ない人も使えるように術式を刻もうとすれば、術式を刻む素材も高価なものになる。とてもじゃないけど大量生産なんて出来ないわ。」

そもそも売るつもりは無いし。

「そんなあ〜」

がつくりと肩を落とすエイギル。

それを無視してセリスは天幕に入る。

じっくりと中を見まわし、おかしな所はないか、一つ一つ確かめていく。

不備が無いことを確認してから、天幕の外にいるジークに声をかけた。

それを待っていたジークは袋から出しておいた道具を使い、頼りない砂の上に天幕を固定した。

作業が終わると、さっさと外に置いてあった2人分の荷物を持って中に入っていく。

無駄が無く、流れるような一連の作業は、彼が何度も繰り返したことを見る者に悟らせる。

その一人であるエイギルは、啞然として呟いた。

「まさかと思ってたけど・・・本当に同じ天幕で寝るのか・・・
」

やはりそういう仲なのか。脳裏をよぎる考えはひとまず横に置き、改めて今朝知り合ったばかりの少女のことに思いを馳せる。

傭兵としての実力は実際に見た訳ではないが、『砂漠の薔薇』の紹介もあるし、なによりこういう事に関してジークが偽りを言うとは思えない。何より、足手纏いになるならばジークは彼女のことを

相棒とは呼ばないだろう。

魔法に關しても同様だが、先程の『作品』から考えても、並大抵の腕前ではないだろう。不安要素は何も無い。

それでも引つかかるのは、時折彼女から滲み出る《何か》だ。

儂げな花のような少女の内に存在する得体の知れないそれ。

人形のような外見には似つかわしくない、凄みのような、だがもつと底が無いような印象の、それ。

傭兵の心得として、他人の秘密を暴くようなことはやるうとは思わない。だが、妙に気にかかるのだ。

しばらく考えて、思い至った。思い至って

鳥肌が立った。

かつて、一度だけ見たジークの力。

朝のあれは本気きりあいではあったが真剣ではなかった。ましてや全力でもない。

だが、あの圧倒的な力。何もかもを飲み込んでしまうかのような力。

あの時、血と闇、死と絶望が満ちていたあの場でなければ、きっと受け入れることさえ拒絶し、結果今の様にじゃれあうことは出来な

かっただろう。それ程に絶対的だった。

「・・・・・・・・・・面白い。」

栗だった肌を自覚し、それでもエイギルは口端を上げる。

彼らが隠しているものには興味は無い。だが、あの少女の内に潜むものの正体は知りたい。

矛盾は自覚している。だけど、どちらも抑える気はない。

結論

「訊いて答えてくれることだけで満足できるかな・・・・・・・・」

真実を言うのはジークだろう。だが、そもそも答えてくれるか。

朝の出来事を思い出し、ぶるりと身震いする。

「特にセリスちゃんのことに触れたら切り捨てられそうだな・・・」

「

さすがに命の危険を冒してまで知りたいわけではない。

だったらやはり、セリスのほうが無難だろう。

「セリスちゃん彼女も一筋縄ではいかなそうだけど・・・・・・・・」

まあ、何とかなるでしょ。

「今日は一日中《風耳》を使っていたんだろう。魔力は大丈夫なのか。」

天幕の仲で荷物の整理をしながら、思い出したようにジークはつぶやいた。荷解きはしない。中身を確かめるだけだ。

「ええ、あと二日で満月だもの。これ位なんでもないわ。」

満月が近くてよかったわ。

比較的消費の少ない術とはいえ一日中術を行使し続け、並みの魔法士ならば底を尽きてもおかしくは無い魔力を消費しながら、そう微笑む華はなの顔かんほせに陰りは見られない。

「……………そうか。」

それを確認して気づかれぬよう、小さく息を吐く。

その吐息は安堵と、僅かな落胆を帯びていた。

気づいて慌てて吐息を引っ込め、セリスの様子をうかがう。幸い気づかれなかったようだ。それから、思い出したことを尋ねてみる。

「なあ、」

「？」

「オウルとは連絡を取っていたのか？」

一瞬動きを止めたセリスは何のことかと思いを巡らせ、朝のことを思い出す。

「ええ、あの子も今では王太子でしょう？私との連絡手段は代々の王位継承者と、いざという時のために、王が信頼を置く臣下の中で、本当に一握りの者に伝えられる大事な口伝だから。でもあの子ったら、本来緊急時用なはずのそれを世間話にばかり使って。しようがないから、ワザワザ別の《花伝》を新しく作ったのよ。」

困った子よねえ。

呆れたような物言いだが愛想をつかしたという風ではなく、むしろ微笑ましそうな響きがある。

彼女は何時でも、誰であっても突き放すことはしない。

いや、一度だけ。

「……俺との連絡は断ち切ったのにか。」

思わずこぼれ出た呟き。しまったと思ったが、出てしまったものは戻せない。

案の定、セリスは顔を歪め、それから困ったように微笑った。

「それとこれとは別だと分かっているでしょう？それに、オウルですら直接会うことは無かったわ。忙しいのか、訪ねて来ることも無かったし。」

いや、あいつなら会いたいと思えば何が何でも会いに行っただろう。

幼い頃の喧嘩友達の顔を思い出しながら、心の中で断言する。だが、それをしなかったということは

(あいつも少しは気を遣ったのか・・・)

「でも、話は毎日してたわね。内容はジークの仕事の成否とか、日頃の行いばかりで、会話というより報告みたいだったけど。独り立ちしたジークのこと、心配だらうって。」
「!!!!!!!!!!!!!!」

(あんの野郎・・・・・・・・・・)

訂正

ただの嫌がらせだ。

昔からの恋敵の腹黒い笑みを思い浮かべ、ジークはひそかに青筋を立てて拳を握り締めた。

14話 第一夜 3 (前書き)

PV9000アクセス突破です!!!
これからもがんばります!!

14話 第一夜 3

夕食も終わり、静まり返る夜半。

「セリス。」

優しく揺り起こされて、パチリと目を開いたセリスは、クンと伸びをした。

一度目をこすってから、闇の中でも恐れることなく目の前の長身の影を見上げる。

常人ならば目と鼻の先さえ見えぬ闇でも、強大な魔力を持ち、精霊の寵愛を受ける彼女の目は確かにジークの顔を捉えていた。

今の今まで眠っていたにもかかわらず、その名残すら見あたらず様子で首をかしげる。

「見張り？」

「ああ。」

役に立つかすら疑問視されているとしても、護衛として参加しているからにはセリスにも夜営時の見張りの義務はある。夜営は本来は2人一組で1人当たり二刻で交代するが、セリスは体力の劣る魔法士であること、傭兵として日が浅いこと、何より年若い（幼いといってもいい）少女であること等から、見張りの時間を一刻に免除されていた。

相方にしても、天幕を空にする訳にはいけないのでジークと共に行うわけにはいかない。また、信用が無いセリスと赤の他人では見張りに支障が出る恐れがある。そこで、顔見知りであること、実力・人格共に定評があること、何よりも「子供に欲情する趣味は無い。」という台詞から、エイギルが相方として選ばれた。

これ程の気配りをされていてもなお、セリスの前に立つジークの漆黒の瞳から心配そうな光は消えない。

その唯一にして最大ともいえる不安要素は、頭上に存在していた。

「満月まであと僅かだというのに、人前に出て大丈夫なのか。」

「月が満ちていないのなら、直接光を浴びなければ平気よ。外套もかぶるし。」

それに、とジークの目の前で握っていた右手を広げる。手のひらの上には

「破璃玉・・・？いや、水晶か。」

透明度が高すぎて硝子玉のように見えるそれは、小粒の水晶玉だった。三つ並んだそれには穴が開いていて、細い銀鎖が通してある。

「ええ、見ていて。」

そういつて一粒をぎゅっと握り締める。すると、透き通り、無色だった水晶は微かに、金色を帯びた真珠色　　月色を帯びていた。鎖を首にかけながら説明する。

「水晶に魔力を溜める働きがあることは知っているわよね。これは、それをさらに改良して魔力の貯蔵量を増やしてみたものなの。いざとなったらこれに魔力を注げば問題ないわ。」

「……………いざとなったら必ず『呼べ』よ。」

返事をしないまま外へ出る。途端、満天の星と、月光がセリスの目を射た。

「
っ！」

「セリス?!」

「来ないで!!」

突如としてあたりに満ち溢れる膨大な魔力に、ジークは思わず天幕を出て駆け寄ろうとした。しかし、滅多に無い強い拒絶に動きを止める。

咄嗟にジークを押しとどめたセリスは、意識的に呼吸を繰り返すことで体の奥底から急激に湧き出る魔力を抑えようとする。右手は無意識に水晶を握り締め、身体から溢れ出ようとする魔力を流し込む。

しばらくそのままだったが、やがてふうと息を吐いて知らず丸めていた背を伸ばす。

「セリス・・・？」

渦巻いていた魔力が静まるのを感じ取り、恐る恐るジークが声をかけると、「大丈夫」としっかりとした返事が返ってきた。

「じゃ、留守番よろしく。」

あえてジークに軽く声をかける。ぱさり、と外套を翻してセリスは向かった。

砂漠の夜はことさら神経が研ぎ澄まされる。

火を見つめながらそんなことを考える。事実、冷えきり、澄み切った空気にさらされて、五感だけでなく思考までも鋭敏になるかのようだ。

それは砂漠の夜特有の張りつめるような空気が、普段よりも微かな音でも届けるからかもしれない。

背後で砂が擦れ、軋む音がし、セリスがやってきたことを知らせた。

どこで調達してきたのか、湯気の立つカップを両手に1つずつ持っている。

「お疲れ。はい、どうぞ。」

礼を言って受け取り、一口すすると口の中に甘く爽やかな香りと味が満ちた。

これは眠気覚ましにも効きそうだ。

横目でセリスのほうを窺うと、警戒心の欠片もないようにすぐ隣でカップを両手で包み、手を温めていた。寒いのか、外套の頭巾を

すっぱり被っている。

顔が見えないせいか、なんとなく話のきっかけが掴めずちらちらと盗み見ていると「何？」と向こうから問いかけられてしまった。

「あー、えーと・・・」

なんと話を切り出そうか迷う。だが、相手は別な意味に取っただしい。

「このお茶については気にしなくていいわよ。茶葉も水も私の自前だから。」

言われて、生命線ともいえる水を振舞われているのだと気づく。どうやら自分は思った以上に緊張していたらしい。

苦笑して、彼女の言葉を否定した。

「や、別に盗んだなんて思ってないよ。そうじゃなくて、どう話を切り出そうかな、と。聞きたいことがあったからさ。」

一呼吸置いて。

「ジークとは恋人同士なの？」

14話 第一夜 3 (後書き)

遅くなつてすみません

授業の合間に書いてたルーズリーフを紛失してしまつて・・・!!!
整理はちゃんとやろうと思います

15話 第一夜 4 (前書き)

PV10000アクセス、ユニーク30000アクセス突破!!
もう何とお礼を言ってよいやら・・・

15話 第一夜 4

「いいえ。」

清々しいほどの即答だった。

「は？」

「だから、恋人じゃあないって言ってるの。」

あの、ジークの溺愛（過保護）ぶりを見て、その台詞を信じると？
そんな気持ちが顔に出ていたのだろう。なんだか意外そうな顔をされた。

なんとというか、エイギルにとっては色々な意味で予想外な反応だ。

「じゃあ、どういう関係なのさ。」

「んーと……家族、かな。」

怪訝な顔を見ると、「ジークについてはどれくらい知ってる？」と問われた。

「両親の顔を知らないこと、魔法士に拾われて育てられたこと、その人が《剣聖》と知り合いでその縁で弟子入りしたこと、弟子入りした時から育ての親に会っていないこと……それとあと一つ、魔力を持つて魔法が使えるけど使いたがらない、これ位かな。」

「ふうん？」

指を折りながら知っていることを挙げていくエイギル。セリスは最後の部分で一瞬探るような目を向けた。エイギルはそれを笑顔で

黙殺する。

とりあえず探ることをやめ、口を開く。

「……それだけ知っていれば、私もある程度は話せるわね。」

「何、俺ってそんなに信用無いのか？」

「そういう訳ではないけれど、どうしてもジークのことに触れない訳にはいかないから。いくら付き合いが長くても、言っていない事を他人が勝手に教えるわけにはいかないでしょ？」

もっともな事だったので、エイギルも納得する。

パチパチと音を立てる炎を見つめながら、セリスは口を開く。
その瞳はここではない、どこかを見つめていた。

「ジークを拾った魔法士の家には、先客がいたの。それが私。だから私はジークの姉弟子で、彼の妹ということになるのかしらね。」

だから、家族。

「ちょっと待った！！ジークが傭兵になったのが9年前だろ！？」

セリスちゃんがジークと会ったのって何年前になるんだ？」

「10年位かしら？」

「……じゃあ、セリスちゃんっていく「女性の年齢を尋ねるなんて許されると思っっている？」

「……………すみません。」

凄みのありすぎる微笑に思わず平謝りするエイギル。

「まあいいけど。」

それを見てふうと溜め息をつき、少しだけ説明する。

「魔力は生まれつき誰にも備わっているものだけど、あまりに莫大な魔力を備えていると、それが成長に影響を及ぼすことがあるの。ある一定の時から外見が変わらなくなったり成長そのものが遅くなるのよ。だから、私も貴方が思っているほど幼くはないわよ？」

「ハア……………」

思わず目の前の少女をまじまじと見る。

華奢で小柄な肢体。幼さを残す美貌。どう見ても14、5歳。大人びた言動を考慮に入れても、到底17歳以上には見えない。

「ジークもかなり強い魔力を持つてるわよ？」

「マジ?! てことはあいつも見かけ通りじゃないってことか!？」

頭を抱えて唸り始めたエイギルにくすりと笑うセリス。

「私の知る限り、ジークは普通に成長してたわよ。魔力の影響には

個人差があるしね。」

「そ、そうか。」

ちよつとほつとしたようすを見せるエイギル。

「話を戻すわよ。師匠に拾われた後、ジークも一緒に魔法の勉強をしていたんだけど、彼は何でかあまり使いたがらなかったわ。むしろ、魔力の抑制と制御のほうに熱心だった。

それで、師匠は彼に剣を勧めたの。幸い、ザリアスさんが訪ねて来たときに『筋がいい』って言われてね。それから訊ねて来るたびに彼に稽古をつけてもらってたわ。」

少し懐かしそうに語るセリス。だが、かの《剣聖》をさん付けとはいえ名前で呼んでいるのは驚きだ。

「まあ、後はエイギルも知つての通り、九年前にジークはザリアスさんと旅に出て、それっきり連絡を取ってなかった、と。」

こんな所かとエイギルを窺^{うかが}う。

「セリスちゃん、いくつか質問が。」

「なに?」

「9年間連絡を取り合っていなかった?家族?と、どうして今旅をしているの?」

やっぱりきたか。

それは当然の疑問で、むしろ訊いてこない方がおかしいと分かってはいるのだが。

……. やっぱり本当のことは言えないわね。

「師匠が居なくなつたのよ。数日だったら何とも思わないけれど、数ヶ月も居ないととなると、やっぱりおかしいじゃない。ジークが旅立つた時に師匠が渡した餞別の中に、こちらから連絡を取ることに出来る魔道具があつたの。それを使ってジークに連絡をとって・・・旅をしながら探してる。」

「ふうん？」

明らかな誤魔化し。だが、エイギルが其処に触れてくることは無かつた。

察しているのかいないのか。知り合つたばかりのセリスにはいまいち彼の反応が掴めない。

だから、少しこちらから仕掛けてみた。

「他には？」

「他にはって・・・訊いていいの？」

「何をいまさら。」

思わず呆れてセリスは言う。そもそも話を振ってきたのはエイギルの方なのだから。

それに応じたのはセリスなのだが。

「いや、そうなんだけど。これでも傭兵稼業長いし、^{ルール}暗黙の了解は分かっているからさ。正直、答えてくれないかもと思つてたから、これ以上訊くのもどうかなあ・・・と。」

^{ルール}暗黙の了解。それはいつからか傭兵達の間で交わされていたものだ。

傭兵という職業はハイリスク、ハイリターンが基本だ。だからこそ傭兵には一攫千金を目指す者が集う。よって、自然と訳有りの者たちが増えてしまうのだ。

自らが抱えている事情を掘り返されて、気分がいい者はいない。その事情が公に出来ないものならなおさらだ。

相手について詮索しない

それが傭兵としての第一条件なのだ。

が、しかしこの場合、それこそ今さらだと言っしかない。いや、白々しいと言っても過言ではない。尋ねたのはエイギルなのだから。

それをわかっていて言っているのならば、たいした狸ぶりと言えよう。

やっぱり一筋縄ではいかない、

か。

相手はAランクではなくとも、長く傭兵稼業を経験してきた者だ。わかっていた事だが、なんだか悔しい。それを押し隠すように長い睫毛をおろし、考えているかのように伏し目になる。

「じゃあ、代わりに私からも質問して良い？」

まぶたを上げて、まっすぐ相手を見つめる。

偽りは許さないというように。

「貴方は『サラテイルドの大侵攻』を経験しているわね？」

断定に、エイギルは答えを返さない。セリスも求めていない。本当に訊きたいのはその後。

「ならばジークの力を、彼の

『闇』を見た？」

答えの代わりに、エイギルは唇の端を歪め、笑ってみせた。

16話 襲撃 1

砂漠越えを始めて数日後。
初めて「人」による襲撃が起こった。

砂漠は人の領域ではない。

人が生きるために必要な水が乏しく、昼間は灼熱、夜は極寒の地となる環境。

それに加えて、外敵である生物も多く存在する。猛毒を持つ砂蠍、巨大な体躯と旺盛な食欲を持つ砂龍（本物の龍^{ドラゴン}ではない。）、流砂の奥に潜む砂虫などだ。

この数日間でセリスたちは、度々それらを目撃し、時には交戦した。

そして砂漠を渡る旅人にとっての脅威はもうひとつ。

そう、『盗賊』だ。

最初に気づいたのはセリスだった。

今日もジークと共にルースの背に乗り、彼女は瞳を閉じていた。彼女の周囲にのみ砂漠には似つかわしくない涼やかな風が吹き、まるで微睡まどろみんでいるかのようだ。ジークのほうはそれを咎めず、静かに前進を続ける。

彼らの周りだけ穏やかな空気が漂っていた。
しかし、それはセリスが突如とつじょ目を開けたことで破られる。

「ジーク。」

囁くような呼びかけに視線を下ろすと、真剣な顔でセリスが見上げていた。それを見たジークの表情かおも瞬時に引き締まる。

「敵か？」

「ええ。」

「………龍か、人か？」

「人。大体、40人ぐらい。」

それを聞き、ジークは思わず舌打ちする。セリスの言葉を疑う様子は一片ひとかけらもない。

「どうした、ジーク。」

突然立ち止まったジークに後ろからエイグルが陽気な声をかけた。

「盗賊だ。」

その一言でたちまちエイグルも顔を引き締める。

「規模は。」

「40人程度。北東の方角から近づいて来てる。全員馬に乗っているから……30分位で追いつかれるわね。」

滔々と返された答えに、エイグルはセリスに目を向ける。なぜそこまで分かるのか疑問には思えど、そんな場合ではない。当の少女は、相棒と何やら相談している。

とりあえず皆に知らせようとすると、セリスに呼び止められた。

「ラダムスさんのところに行くなら、連れて行ってくれない？」

「ジークと一緒にいないの？」

驚いて尋ねる。

「さすがに数が多いし、弓矢を持ってるみたいだから結界張ろうと思っただけ。」

「ひとりで？」

魔法士たちが乗る荷馬車は別にある。そこに寄らないということ、彼らの力を借りずに結界を張ろうとしていることを示す。

それは、尋常ではない負担を彼女にかけることになる。

「ちょっと裏技使うから、平気。結界といっても《風の守護》

つまり、飛んでくる矢を防いで、向かって来る相手をちょっと足止めする程度だし。」

それでも躊躇っていると、おもむろにジークがルースを近づけて

きた。それからセリスを抱き上げると、ひよい、と問答無用でエイギルの馬に乗せた。

それからさっさと賊がやって来るらしい方へ向かう。そこから襲撃を知らせるつもりだろう。

呆然と見送っていると、ちよいちよい、と外套の裾を引かれた。

「私たちも行きましょう。」

「あ、ああ。」

信頼されていると思うべきだろうか。なんとなく釈然としない気持ちを抱えながら、エイギルも隊商の中心へ向かった。

雇い主ラダムスにエイギルが事態を説明し、対応を相談している間、セリスはエイギルの馬に1人で乗っていた。

普段はジークと共に乗っているため誤解されがちだが、セリスは乗馬は苦手ではない。むしろ動物に好かれるので、はつきり得意と言っている。今も、手綱は持っているが握っているだけで何もしていない。彼が勝手に進んでくれるのだ。

その背に揺られながら、セリスは目を閉じて集中する。自分の奥底に存在する魔力に神経を向けつつ、意識は外側に広がり風に溶けていく。そのまま目を開けると、蒼く透き通った体で舞い踊る女性達

シルフ
風霊の姿が見えた。

【どうしたの】 【何か用】

唄うように、口々に尋ねる彼女たちに笑いかけ、かれら精霊達の言葉、つまり念話で『お願い』をする。

【ここにいる人や物全てに《風の護り》をお願いしたいの。だめかしら？】

【いいえ】 【いいえ】 【他でもない貴方の頼み】 【断ることなんて絶対しない】 【護ればいいのね】 【お安い御用】

【ありがとう。】

まさに輝くようなセリスの笑顔に風霊シルフたちは嬉しげに飛び交う。

「それじゃあ……」

再び目を閉じ、集中するセリス。先程とは異なり、意識を一点に絞っていく。

セリスの両手の間で濃密な魔力が渦巻いていく。見るものが見れば、砂金のような淡い金色の魔力が眩しいほどに集っているのが見えただろう。

『我は加護を願い、聖別す。』

声に魔力を込めて言葉を紡ぐ。詠唱チャントと呼ばれるそれは、本来は精霊に呼びかけるためのもの。それからさらに精霊と契約し、意思を伝え使役する形式のものだ。自分の力に精霊の力が上乘せられるために少ない負担で魔法を行使できるが、条件がある上に長大な詠唱チャントを必要とするため、手間と時間がかかるため、実戦で利用するものは少ない。

だがセリスは精霊達と念話で通じるため、それを一般的な魔法と同じ位、またはそれ以上の速さで行使することができる。制約はあるものの、はつきり言って反則だ。

だが、緊急の場合で無い限りセリスは詠唱チャントの短縮はしても破棄はしない。

『自由なる者よ、流れ行く者よ祝福を。守れ、阻め、わが名において。』

向かい合わせた両手の間から、集めた魔力がサラサラとこぼれ落ち、消えていく。精霊は魔力を対価に術者の願いを叶えるのだ。

『今此処に、《月》の名のもとに****が命じる』

最後の言葉を紡ぐと同時にセリスを中心にブワリと風が巻き起る。

強く、しかし決して激しくも荒々しくもない風が隊商全体を包み、すぐに消えた。

その風に気付いた唯一の存在は、風に混じる魔力の気配にそっと漆黒の瞳を細めた。

16話 襲撃 1 (後書き)

セリスの扱う魔法は、普通とはちょっと違ってきます。
魔法についてはもう少し後で説明するので、もうちょっと待っていてください。

17話 襲撃 2 (前書き)

気付いたら総合評価が100ptを越えてました。

お気に入り登録してくれた方もたくさんいて、もう感謝感激です！

17話 襲撃 2

セリスの言葉通り、しばらくして盗賊達が襲撃してきた。

砂漠の彼方から忽然と現れた彼らは躊躇いもせず、休憩をしている獲物に襲いかかろうとした。

しかし、挨拶代わりに打ち込んだ矢は突然吹いた風に流されて届かず、ならばと近づけば見えない空気の壁によって一定以上近づけない。

勝手の違う様子に戸惑った瞬間、突然突風が吹きつけ、彼らは落馬した。

それを予測していたかのように、傭兵達が攻撃してきた。その先頭は黒髪をなびかせて走る青年だ。

傭兵たちもそれ程余裕があった訳ではない。なにせ相手はこちらの2倍近くいるのだ。

だが、あらかじめ襲撃を知っていた事、それに備えて休憩を装い態勢を整えて待ち伏せていた事が心理的余裕となっていた。

そして何より

Aランク傭兵《闇夜》の存在が、その戦いぶりが傭兵達を鼓舞していた。

「ハッ!!!」

剣を振るう度に苦鳴が起る。

横合いから切りつけてくる剣を受け止め、腹を蹴り飛ばす。背後から突き出される槍の穂先を切り飛ばし、返す刃で袈裟がけに切り裂く。

繰り出される威力と速さのある、しかし、決して力任せではない斬撃。計算された体捌き^{たいさば}。その動きのすべてに無駄がなく、周囲を敵に囲まれていながら突出しすぎた味方をフォローする余裕すらある。

まさに、一流。

傭兵達の憧憬の視線にも、盗賊達の畏怖の視線にも、ジークはなんの反応も示さない。

ただ容赦なく敵を倒していく。

相手はこれまでに幾度も旅人から命綱ともいえる荷物を奪ってきた盗賊であり、情をかける必要はない。ましてや、後ろには何よりも大切な存在がいるのだ。

辺りには血の匂いが漂い始めていた。

戦鬪の空気は守られている者達の元へも届いていた。
隊商には護衛だけでなく、旅人も加わっている。非戦闘員はいくつかの馬車の中にいた。
守られているとはいえ、すぐ傍で行われている戦いに不安を抱かない者などいない。

そんな緊迫した空気が漂う空間で、1人だけ異質な存在しんごうがいた。

(凄い……………)

思わず胸の中で咳いてしまう。

きつとここにいる誰も気づいていないだろう。そこに佇む少女が隊商全体を囲む結界を、一人で維持していることに。

彼女こそが結界の、ひいては隊商の防御の“要”であることに。

未熟とはいえ、まがりなりにも治癒士ヒーラーの卵であるトウワーリトウワーリには感

じられたのだ。

彼女を取り巻く膨大な魔力が。そして突如現れた強固な風の結界が。

治療士ヒーラーとは治療術を専門とする者たちを指す。

治療といっても傷を治すだけではない。靈病れいびょうはもちろん、熟練した者は魔法障害や呪詛の解呪なども手がけるのだ。よって治療士には治療術の素質だけでなく、感知能力の高さも重要となる。

まだまだ半人前なトゥーリだが、感知能力については先生からも太鼓判を押されているのだ。

それでも信じきれず、もう一度確認する。その年頃に不釣り合いな技量、その外見に不釣り合いな力量。けれど、どれも現実だ。

何かと話題になっている少女だった。なにせ彼女の相棒は、『英雄』とまで呼ばれる存在なのだから。

今でも覚えている。世界が彼を賞賛した時のことを。

全ての人間が彼に憧れた

全ての傭兵が彼と共に戦うことを夢見た

全ての女性が彼の傍らに寄り添い立つことを願った

誰もが望み、けれど叶わなかった場所。

今、そこに立つ少女に注目しない訳がないのだ。

だが、彼女の相棒のガードが固すぎて誰も接触到に成功できていない。会話から名前だけがかろうじて知られているだけだ。

そのせいか、お飾りだとすら言われていた。

守られるしかない無力な少女？

とんでもない。彼女は今、誰よりも大きな力をもってこの隊商全体を護っているのだ。

いったい何者なのだろう。

トゥーリはじっとセリスを観察していた。

セリスもその視線に気づかなかった訳ではない。

結界を維持するため、風霊を使役

セリスに言わせれ

ば同調

しているのだ。今の自分にとって風は目であ

り、耳であり、手でもある。周囲の様子など手に取るように分かっている。

だが今、彼女はその感覚のほとんどを外へ向けていた。

最も戦闘が激しい箇所

さらに言うならジークへ。

彼のいる場所には最も血の匂いが濃くたちこめている。大気の情報
が直接伝わる状況で、それでも風を操り、衝撃波を放ち、敵を阻み
続ける。

『セリス、無理はするな。』

風を通して、ジークが自分を案じる声が届く。

自身の力を制限している今の状態では、結界の維持に専念するこ
とが最善であることはセリスも理解している。

それでもセリスは援護を止めない。

既に一度後悔しているのだ。同じことを繰り返したりしない。

過敏になりすぎている自覚はある。それでも譲れないことがある。

もう、大切なものを失いたくないから

傭兵達の活躍により、見る間に敵の数は減っていった。
盗賊の頭が僅かな仲間を連れて逃走し、戦闘は終わった。

最初から有利な立場だったとはいえ2倍近い戦力差に被害は少なくなかったが、それもセリスと治癒見習いだという少年によって事なきを得た。

そして隊商は何事も無かったかのように移動を再開する。

周囲の評価が変化したことは、セリス 当人だけが気付いてい
なかつた

17話 襲撃 2 (後書き)

突発的に新キャラを出してしまいました(汗)

彼はジークのライバルと成りうるのか?お楽しみに。

ところで、実は初めて感想をいただきました!!

もうすっごく嬉しいです!!

感想をくださった方には、ちょっとしたお礼を企画しています。

詳しくは 5/18 の活動報告をご覧ください。

感想待ってます!!

18話 セリスちゃんの魔法講座

盗賊の襲撃があつたので、今日は警戒も兼ねて早めに野営をすることになった。

暇を持て余し、散策していたエイギルは今日の功労者達を見つけた。

「や、セリスちゃん。」

「エイギル。」

ルースの世話をしていたらしいセリスは、振り返って微笑んだ。

「今日はお疲れ様。」

「セリスちゃんこそ、大変だったろ？ 結界を張るだけじゃなく、それを維持したまま俺達の援護までしてたんだから。」

「気づいてたの？」

「勘の良い奴は気づいてると思うよ。誰がやったかは別としてもね。そういえば、ジークは？」

「今日の立役者だもの。いろんな所でつかまっては声掛けられるんで、天幕の中で剣の手入れしてるわ。幸運なことに私は表に出ていない分、そういうのはないのよ。」

『勘の良い奴』が向ける視線の色の変化に気付いていないのだから、この少女は。

思わず苦笑したが、そこで1人の少年を思い出す。

「そんなこと言って、すっごい懐かれてた子がいたじゃないか。えーっと、トゥーリ、だっけ。」

今度はセリスが苦笑する。

「ああ、あの子ね。まあ、魔力とか色々気付かれちゃったみたいだから。見習いとはいえさすが治癒士^{ヒーラー}、って所かしら。」

「？職業が関係するのか？」

「治癒士は何よりも感知能力が重要となるの。何を治すのかわからなければ、手の出しようが無いでしょう？」

「なるほど。魔法士にも色々あるんだ。」

感心していると何やら意外そうな顔をされた。

「なに？」

「えっと、魔法について知らないことが驚きで。魔物の中には魔法を使うものもいるし、たとえ使えなくても傭兵は魔法について結構知ってるイメージがあったから。」

「……ジークが過保護になる理由がわかった気がする。あのね、魔法についての知識は魔法士か、貴族でもない限りきっちり学ぶことはまず無いよ。」

これを聞いてセリスは思わず呟く。

「知ってた方が色々便利なのに。」

「そりゃそうだけどさ。簡単な魔法なら金を払えば教えてくれるけど、知識のほうは知りたがる奴も少ないから金持ちの教養みたくなってるんだ。」

納得できるような出来ないような。

でも納得できずに唸っていると、ふと思いついた。

「教えてあげようか？」

「は？」

「簡単にで良いなら教えるよ？今日はこの後時間もあるし、夕食食べながらなんてどう？」

「マジ?!よろしくお願いするよ!」

「じゃあ、また後でね。」

そして夕食時。

周りの人間よりやや食の細いセリスは一足先に食べ終え、自分で用意した食後の茶を飲んでいた。

他の面子も食事を終えて、思い思いにくつろいでいる。

「じゃあ、はじめましょうか。」

「ちよつと待った!!」

いきなり立ち上がったエイギルは、自分の向かいを指さす。

「何でお前もいるんだ?!」

その先にはセリスからのお裾分けの茶を飲むトウーリがいた。

「駄目ですか？」

少年の方はいたって冷静に、柔らかそうな栗色の短髪を揺らして訊ねる。

そう言われてしまえばそれ以上詰問することは出来ず、思わず言葉を飲み込んだエイギルにセリスは笑って取り成す。

「別に良いじゃない。それに私が知っている理論はあくまで師匠から教わったものだから、既存のものとは違つかもしれないし。せつかくだから、確認もかねて、ね？」

そう言われてしまえば何も言えない。再び座り込んだエイギルを見てセリスは口を開いた。

「魔法について話す前に、魔力について説明するわね。」

魔力とは『魔素^{マナ}』と『気』が体内で混合したものを呼び、全ての人間が持っているわ。『魔素』とは周囲に漂う不可視のもの。魔力の元とも考えて。『気』のほうは、生命力、精神力と呼ばれることもあるわね。

また、魔力についてはたいいてい、3つの要素から考えられているわ。それぞれ『器』、『密度』、『属性』というの。

『器』とは魔力の量のこと。言わば『魔素』と『気』の総量ね。

『密度』は魔力の総量に含まれる『魔素』の量。これが大きい程、少ない魔力でも効率よく魔法を使うことができるわ。

そして最後の『属性』。さっき魔力は『魔素』と『気』の混合物だと言ったよね。2つが混ざる時、その人の『気』によって魔力の質が変わるの。その種類によって区別されたものをそう呼ぶのよ。これは魔法を行使する時の得意不得意に関係してくるわ。」

ここまで一気に話してから、周囲の面々を見回して理解しているかを確認する。

「属性は、『基本』と『派生』があるわ。

『基本』とは、地、水、風、火の4種類。それぞれに特性や相性があるけれど、特に相性はあんまり重視されないわね。ちなみに、これ1種類のみって人は滅多にいないわ。ほとんどの人が2種類か3種類保持していて、その組み合わせや割合で『派生』が決まる。例えば水と風で雷、火と地で金とかね。水から氷、火から炎、なんてのもあるわ。

『派生』はそれこそ星の数ほど存在するから、それを専門に研究している人もいるらしいわよ。」

また、そのどれにも当てはまらないものがあるわ。それが光と闇。かなり珍しくて、ほとんど確認されていないから、どんな性質なのか詳しくは不明なままね。分かっているのは光属性と闇属性は相反すること、光属性には《陽》と《月》の2種類があって闇属性への影響が異なること、ぐらいかしら。」

「その2つはどう影響が違うの？」

息継ぎの間を見計らってエイギルが訊く。

「数少ない言い伝えでは『《陽》は闇の力を打ち消し、《月》は闇の力を中和する』と言われてるわね。だからと言って、闇より光が強いという訳では無いようだけど。」

「へえ。」

そう言いながら、エイギルはジークの方をチラリと見やる。だがジークには欠片も動揺は無く、いつも通り、と言うしかない。

「じゃあ、魔力についてはこれ位にして、魔法について、ね

一口に『魔法』と呼ばれているけれど、大体3つに分けることができるわ。

まず、『共通魔法』^{コモン・マジック}。通称『魔法』。

『器』^{フォース}を重視した魔法よ。『明かり』^{ライト}の様な汎用性の高いものから『魔力弾』の様な攻撃魔法まで、学べば誰でも使うことができるわね。ただ、個人の『器』によってその威力は変わるわ。

次が『密度』を重視したもの。『詠唱魔道』^{スベル・ルン}、または『魔道』。主に魔法士が使うものよ。呪文を鍵として発動するんだけど、『魔法』よりも威力も消費する魔力というより『魔素』の量が段違いなの。ただ、『魔法』と違って『属性』があるから、全てマスタースタするのには難しいそうね。

上級、中級、下級と難易度が分かれているのも特徴かしら。

最後が一番特殊ね。エレメンタル・チャント《精霊魔術》、または単純に『魔術』と呼ば

れたりするものよ。精霊に呼び掛けて力を貸してもらう形のものだから、精霊の加護が必要な。加護は『属性』が関係したりするらしいけれど、そもそも『加護持ち』が少ないからはつきりしないのよね。

普通は決まった精霊と契約して力を借りるの。だから複数の属性を扱える人は珍しいわね。契約していない精霊の力を借りようとすると、魔法陣やら呪文やらが必要となるし。

利点は『魔道』と違って自分1人に負担がかからないから、大規模なものが使えることかしら。

私が昼間使ったのもこの系統よ。

普通、魔法と指すのは《共通魔法》コモン・マジックと《詠唱魔道》スペル・ルーンね。こ

の2つには共通点があるの。それは『熟練すれば詠唱を短縮、または放棄できること』よ。エレメンタル・チャント《精霊魔術》はその形式上、『呼びかけ』

は外せないから。まあ、理論上は短縮なら出来るらしいけど。」「理論上はってことは実際にするのはかなり難しいのですか？」

そう訊いてきたのはトウーリ。

エレメンタル・チャント《精霊魔術》は使えるものが滅多にいないので、魔法士でも上位の者以外にはあまり知られていなかったりする。

だからトウーリにとってもセリスの説明は好奇心を呼び起こさせるものだった。

「難しいというより、今までに精霊との？がりを、詠唱が必要ない位に強く持った人間がいなくて言ったほうが正しいわね。」

それまでどこかつまらなそうに聞いていたジークが、突然何かに気づいたように身動きした。そのままジークがセリスへと視線を据えたことに、気付いたのはエイギルのみだった。視線に探るような、それでいて気遣わしげな色が含まれていることにも。

「エレメンタル・チャント《精霊魔術》で最も重要なのは、精霊とのシンクロ《同調》。抑えつけても精霊は離れていくだけだから。逆に、心を開けばそれだけ進んで力を貸してくれる。呪文はあくまで補助なのよ。」

もつとも、無くすことは出来ないけれど。

「……まあ、基本的なことはこれで全部かな。」

「これで基本?!」

「そうよ。気付かなかった? 『魔法』、 『魔道』、 『魔術』 については説明したけれど、治療術については触れなかつたでしょう?」

「今説明されたのは、『攻撃魔法として』 基本的なものです。治療以外にも、召喚、無属性など、色々あるんですよ。」

「はぁ……。」

トウーリの補足に、思わず溜め息をつくエイギル。それを見て、トウーリと一緒にクスクス笑っていたセリスだが、突然グラリと体が傾いだ。

「あ、あれ…….?」

そのまま砂の上に倒れ込むかと思われた細い体は、鍛え上げられた腕によって支えられた。

「はしやぎ過ぎだ。」

見上げると、感情の読み取れない表情の青年が覗き込んでいた。一見淡々として見えるジーク。しかし、セリスには解る。

思わず体が強張る。確実に、今の彼は怒っている。それも、静かに。

それ程怒りが深くないのが救いか。しかし、セリスには何に怒っているのかは見当がつかない。

「ジ、ジーク？」

「魔力の使い過ぎだ。昼間あれだけ派手に魔力を消費したんだ。倒れるのも当然だろ。」

「ちょ、降ろしてって。」

「大人しくしてろ。」

有無を言わず、そのままセリスを抱き上げて天幕へと運んでいくジーク。

エイギルとトゥーリは遠ざかる二人の姿をぼんやりと眺めていた。

風になびく黒髪は華奢な肢体に絡みつき、そのまま夜の世界に溶け込むかのようだった。ゆっくりと倒れ込む少女を支えるのは、野生の獣のように美しい、夜の化身のような青年。

一幅の絵の様な光景に、思わず見惚れていた。

呆然自失から戻ったエイギルは、少し離れたところで顔を歪める
アンジェリカを見つけた。

視線に物質化するならば、向けられたものは確実に射殺されそうな
目で睨みつけている。

その視線の先にはもちろん、ジークと、彼に抱き上げられた少女。

「やれやれ……………」

いまだ夢見心地なトゥーリには聞こえないように、エイギルは溜め
息をついた。

18話 セリスちゃんの魔法講座（後書き）

今までで最長です！！

内容が内容なので、説明ばかりですが。

そして結局イチャついてますね（笑）誰かは言わなくても分かるでしょう。

19話 襲撃の夜①

自覚して気が抜けたのか、体に力が入らない。

どうやら魔力だけでなく、体力もずいぶん削られていたようだ。

力無い身体をジークにゆだね、セリスはまぶたを下ろす。布越しに感じるジークの体温が心地良かった。

少し意識を失っていたらしい。

セリスが目を開くと、天幕の天井が視界に入った。

「気づいたか？」

起き上がらないままで声の方向に視線を移すと、脱いだ外套を持ってジークが傍らにやって来た。

ゆっくりと上体を起こすセリスの背を支え、楽な姿勢をとれるように丸めた外套を置く。

「脱がせるぞ。」

声をかけてから、セリスのブーツの紐を解いていく。

今の状態からだになって間もない頃、勝手がわからず無茶をしてはダウンしていた時があった。その時に抱き上げて運ばれることには慣れ

だが、これともう1つは何度経験しても慣れない。

今も出来れば止めて欲しいのだが、力の入らない身体では自分で解くことは難しい。

シュルリ、と微かな音を立てながら解かれる様子を見詰めながら、気恥ずかしさを誤魔化すために口を開く。

「……どのくらい気を失っていた？」

ジークは手を止めぬまま答える。

「それ程長くない。今夜は満月だ。皆が眠るまでは大人しくしている。」

両足のブーツの紐を解き、ブーツを脱がせる。

スラリとした白い素足があらわになった。薄暗い天幕の中でも目を射る眩しさ。

思わず惹きつけられる視線を無理やりを外し、セリスの顔へと向ける。

恥らうセリスの表情を見て、再び理性を総動員させながら、気分を尋ねる。

「まだちょっと身体に力が入らないわね。予想以上に体力を消耗してみたい。まあ、魔力の消耗も影響しているんでしょうけれど。」

セリス程魔力が大きいと、体力の半分ぐらいが魔力で構成されている。基礎体力が劣るセリスにとっては魔力で補えるということは

幸運なのだが、加減を間違えると今回のようになるのだ。

「まあ、体力に関しては眠れば何とかなるでしょう。残るは魔力だけど……今夜が満月で助かったわね。」

「そう言うが、実はきっちり計算してただる。」

その辺、セリスは抜け目無い。それを知っているジークは思わず突っ込むが、笑ってかわされてしまった。

思わずため息を吐き、そこで話を逸らされたことに気づいて、顔を険しくした。

先程は誤魔化していたが、セリスは《月》属性だ。月の光を浴びれば魔力は容易く回復する。満月ならばなおさらだ。だが、今の力を抑えた状態では月光を浴びても回復はたかが知れている。だから、心置きなく力を解放できる場所に移動するために、魔法を使って人目を避けなければならぬのだ。しかし、魔力が枯渇寸前の今の状態ではそれは無理。

つまり、今のうちに多少なりとも魔力を回復する必要があるのだ。

だが、セリスからそれを言い出すことは無いだろう。理由はわかっている。それを尊重したいとも思う。

しかしこの時、優先するべきはセリスの体だった。

後々の抗議を覚悟して、そつとセリスに近づく。

そのまま

唇を重ねた。

「?!」

驚きに目を見開くセリス。しかし、力でジークに敵^{かな}うはずもなく、抵抗はアツサリと抑えこまれてしまう。

セリスの儂い抵抗を気にすることも無く、ジークは重なった唇を通して自分の魔力を流し込む。彼女から香る花の香りや、甘い感触を内心確かめながら。

本来、自分の魔力を他者に分け与えることなど考えられない。なぜなら、まったく同じ属性の魔力を持つ人間が存在する確率など、果てしなく低いからだ。ましてやセリスは希少といわれる月属性なのだ。

それを可能とさせているのは、ジーク自身の属性とセリスの属性の相性。そして2人の間で交わされた『契約』の効果だった。

ただし、本来の力を封じている今のセリスでは『契約』の恩恵を十分に得られない。だからこそ、こうしてセリスと直接『繋^{つな}がる』必要がある。

封じている力を解放すれば何もせずとも魔力の共有は行われるが、どこに人目があるかわからないこの場ではそれはマズイ。

ジークはちらりと、天幕の入り口に視線だけを向ける。そこにいるのが誰なのか、推理というよりは勘でわかっていた。

その人物に見せ付けるように、セリスを抱きしめる。暴れようとしたセリスを抑えるためでもあったが。

抱きしめたのは自分なのに、腕の中から立ち上る甘い香りに包まれているようだった。

甘い唇の味に、花のような香りに、そのまま貪りたくなる欲求を何とか振りほどく。ある程度の魔力を渡して、触れるだけの長い口付けを終える。

ジークが解放した瞬間にセリスは、それまでの力無い様子はどこへやら、バツと距離をとる。

「ジークツツツ！！！！」

紅潮した顔で思い切り叫ぶ。その後は言いたいことがあり過ぎてか、はたまた混乱して何も思い浮かばないのか、口をパクパクと開

閉させるだけだ。

「……………」

自分よりもはるかに長い年月を生きているくせに、彼女はこういう事にはいつまで経っても初心ウツなのだ。

滅多に見られないセリスの姿に浮かぶ笑みを何とか押し止める。

「ある程度の魔力の供給が必要なことは自分で分かっていただろうが。それよりも今は寝てる。」

「わ、わかってたけど！でも、こんな、いきなり！！！！！」

「言えば逃げるだろうが。いいから体力の回復に専念しろ。明日も進むんだぞ。」

「うつ……………」

ジークの言うことが正論である以上、セリスは黙るしかない。まだ赤い顔を毛布で隠し、せめてもの抗議とジークから離れて寝転がる。

その外見相応な行動に、ジークはクツクツと笑うが、セリスは無視した。

だから、そつと唇に触れたジークの表情を、セリスは知らない。
声なき声で紡がれた、自らの名のこと。

天幕の外では、はしばみ色の瞳をつり上げ、唇を噛み、拳を握り
締めて立ち尽くすアンジェリカの姿があった。

19話 襲撃の夜①（後書き）

ジーク、役得（笑）。

20話 襲撃の夜 2

初めて会った時、条件の良いカモを見つけたとしか思わなかった。

全く思い通りにならない彼に苛立った。

いつもと違う様子に、チャンス好機だと思った。

からだ肉体を重ねて、捕らえたと確信したのに。

朝になって今までと変わらないどころか、それまで以上にこちらを見なくなった気がした。

しばらくして、それが気のせいではない事を確信して、あたしは初めて気付いた。

彼の視線が決してアンジェリカあたしを見ていないことに。

それでもまだ、我慢が出来た。

自分と同じように彼に惹かれ、近づく者達おんなの誰もが、彼の瞳に映ること叶わなかったから。

なのに

「盗み見とはいい趣味だねアンジェリカ。」

振り向けば、自分が最も惹かれている人物の近くに立つ、大嫌いな男が居た。

かつてジークとは異なる意味で自分を拒んだ男。あのときの屈辱は忘れられない。

今だって気配を消して近づき、ワザと自分に向けて殺気を放ったくせに、自分は何もしていないと言いたげにヘラヘラと笑っている。その目だけは冷たい光を宿して。

「君も懲りないねえ。あんだけ2人の惚気というか溺愛というか、とにかくイチヤイチャぶりを見せられていて。いや、それ以前にあれだけジークに拒否されていてまだ諦めないなんて、というべきか。」

ニコニコ笑いながら痛い所ばかり突いてくる。だからこの男は嫌いなのだ。

初対面時の第一声が甦る。

容姿を誇る寄生虫って響きからして滑稽だよ
ね。知ってる？寄生虫って自分の力が無いから寄生するんだ。それに、俺は虫が嫌いだしね

どこまで毒だらけなのだろうか、と言いたくなる台詞。

「ね、ちょっと向こうで話そうか。」

了承を得るかのようであり、相手に全く選択の自由を与えない言い方。

憤りをこらえて出来るだけ冷ややかな声を発する。

「いったい何を話すというの………エイギル？」

「わかんない？そこまで愚かな訳じゃないよね……？」

薄く笑うと、踵を返して歩いていく。無視しても良かったが、ここに立ち尽くしている訳にはいかない。何より後で『あの時素直について来れば良かったのに』等と言われる事が悔しい。過去、それで痛い目を見たことも幾度かあった。掌を爪が食い込む程に強く、握り締めて後を追った。

「ジークが君を見ることは、いやセリス以外を見ることはありえないよ。」

野営場所から少し離れた場所。砂丘の影で待っていたエイギルは、開口一番にそう言い放った。

「つつそんな、こと……」
「彼の目を見れば分かっているだろ。誰も見ていなかったジークが、1度一人に決めればそう容易く他の誰かに乗り換えることなんてそれこそ有り得ない。ずっとジークを見てきたと言っのなら、その位理解してるよね？」

反論できず、アンジェリカは俯く。

「それに、セリスはジークの周りにいたどんな人間とも違う点がある。」

「それが、ジークがあの子を選んだ理由……？そんなに価値があると言っの？」

やっとのことで絞り出された声に、エイギルは呆れた顔をした。

「価値が有るとか無いとかいう次元じゃないんだけど……まあ、アンジェリカに理解しろというほうが無理か。

俺としては正直ジークが無茶苦茶うらやましいよ。何かと引き換えに得られるものではないしね。」

ただ、と言い置き、エイギルは声に圧力をかける。

「君に、少なくとも今のアンジェリカじゃあ、逆立ちしたって身につけられるものじゃない。潔く身を引くんだね。」

容赦の無い宣言に、沈黙が落ちる。

「……………いまさらだけど、ひとつだけ聞かせて。」
ポツリ、と零れ出た言葉。アンジェリカは気付いていない。始めの、エイグルに対する強烈な嫌悪感が薄れていることに。

「どうして口を出したの？」

そう、個人的な争いに介入することは、傭兵として誉められたことではない。

「ジークの友人として、かな。」

「それだけ？」

「そう。《サラテイルドの大侵攻》という地獄を行きぬいた戦友として、ね。」

そして、彼が背負う『闇』の深さを垣間見た者として。彼の『光』を潰したくないと思うのだ。

先程のセリスの話进行を思い出す。

彼女は言わなかったが、ジークは間違いなく《闇》の属性を持っている。

おそらく、ジーク自身もそれを疎んじているのだろう。あのひたすら巨大な力は、畏怖さえ呼び起こすものだったのだから。人の身には重過ぎる力だと思っ。

そして、《闇》を疎み、恐れるジークにとってセリスは、間違いなく『光』だ。

ジークにとってこの上ない安心をもたらす存在。

ジークのように、その『強さ』を認められてしまった者は、『護る』ことだけを期待される。

誰だって自分より強い存在を『護ろう』とは考え難いだろう。特に、アンジェリカのように自分以外の者を利用しようとする者は。だが、それではジークの重荷は増すだけだ。

セリスは、ジークがその強さを認められてから、エイギルが初めて出会ったジークを『護ろう』とする人間だった。だからこそ、ジークの相棒として認めたのだ。

「友人には、幸せになってもらいたいものだろう？」

そう笑いかけたエイギルに、アンジェリカはため息を吐いた。その拍子に、雫が一粒、零れ落ちる。耐え切れず、俯いた。

「……私だって、大切な人には幸せになってもらいたい。」

慰めるでもなく、黙って聴いているエイギル。

それまでのアンジェリカなら、その姿に自分勝手な憤りを感じただろう。ただ見ているだけなのか、と。
でも、今彼女の胸の内に満ちるのは安心感だった。

自分の変化を、アンジェリカは自覚していない。
だから、互いに嫌悪していると思っていた青年が、優しいまなざしで彼女を見ているなんて、思ってもいなかった。

20話 襲撃の夜 2 (後書き)

エイギルがものすごく黒いですね(笑)

半分はアンジェリカ視点のためですが、もう半分はエイギルの確信犯です。

上位ランク傭兵は、曲者が多いよ!!という話です。

エイギルがアンジェリカを嫌っていたのは、他人の力に頼るだけの者が大嫌いだっただからです。昔は青かった、と本人は言うかもしれないですね。

「……………月が昇る」

浅い眠りの中にいたジークは、その声で覚醒した。

声の主は上体を起こし、熱に浮かされたようにこちらに顔を向けていた。

普段黒に見えるその瞳は今内側から光を放ち、アメジスト紫水晶のようにキラキラと輝いている。

ジークが近付けば自分から腕を伸ばし、抱き上げられてもそれが当然と言うようにジークの首に腕を絡めている。

今のセリスは、セリスであってセリスでない。

月の魔力に酔っているため、普段は奥底に沈めている『彼女』が表に出ているのだろう。

いや、普段のセリスが『彼女』であって『彼女』でない以上、本来の状態に戻ろうとしていると言っべきか。その姿だけでなく、心算精神も。

セリスを抱え上げてそつと外に出ると、ルースが静かに擦り寄って来た。

「頼んだぞ。」

心配そうにセリスの顔を覗き込む愛馬に声をかけると、心得たと言つように一度頭を下げられた。ルースはそのまま、天幕の傍に移動する。

人間よりも感覚の鋭いルースにジークは、これまでも度々見張りを頼んでいた。

ルースに天幕を任せると、ジークは夜営地から離れていく。

人目を避ける術を使っているとはいえ、今のセリスの頼りない様子を目の当たりにしてはどうしてもその効果に疑問を抱いてしまう。周囲に人の気配がないことを確認しつつ、ジークは夜営地から見えないところを探して足を進めた。

夜営地の明かりも届かない程離れた場所。砂丘の陰でジークは足を止めた。

セリスを正気付かせるように、軽く揺さぶる。

「ん……………」

微かな声を上げ、ゆっくりと瞼を上げるセリス。

星を内包しているかのように輝く瞳に変化は無いが、その視線はしっかりとジークを捕らえている。

下に降ろせば、多少ふらついたがそれでも自力で立った。

「ごめん、迷惑かけたわね。」

「いつものことだ。わざとでない事も分かっているしな。」

気まずげに謝る彼女にそう返す。満月の夜に彼女が魔力酔いを起

こすのは、彼女の本来の魔力を封印しているためで。そもそもセリスが魔力を封印しなければならなくなったのは自分の所為なのだ。

沈んでいく思考を振り払い、ジークは剣を抜く。

普段戦闘に使用している大剣ではない。鞘にも、柄にも美しい装飾が施された剣。スラリと抜き放てば、鋼とは異なる真珠色の輝きが目射る。

施された装飾もあいまって、貴族がよく身につけるお飾りの剣のように見えるが、これはれっきとした実戦用の剣。柄に施された装飾は計算されていてよく手に馴染み、滑り止めにもなる。また、金属ではないとひと目でわかる真珠色の剣身は魔力を帯びており、切れ味鋭いだけでなく魔法すら切り裂き、消し去ることができる代物なのだ。

だがその価値以上に、この剣はジークにとって大切なものだった。

ザリアスから一人前の認定を受けた時、セリスから贈られた品。直接会ったのではなく師を通じてだったが、その先ザリアスの支援なく1人で戦うジークを思いやった故の品だった。ジークの矜持プライドをおもんばかってか、込められているのは戦闘補助の効果ではない。魔法を、いや、魔力を使うことを躊躇ためらい、暴走を恐れるジークのための安全装置。

剣と一緒に渡された伝言を、今でも覚えている。

あなたの大切なものを守れるように

だから、ジークが何かを傷つけるためだけにこの剣を抜くことはない。

抜き身の剣を下げてセリスを見やる。

コクリと頷かれたのを確かめ、おもむろにジークは剣を砂に突き立てた。

そのまま意識を集中させると、足元に光り輝く陣が浮かび上がった。陣に不備が無いことを確かめ、セリスも足を踏み入れる。人二人が中に入っても、まだ余裕があるほどに陣は大きい。

ジークが陣を『閉じた』のを見届けると、セリスは服の下に隠しておいたペンダントを取り出した。

手のひらに載せたまま、目を閉じて精神を集中させる。

その口から『歌』が流れ出した。

メロディを口ずさんでいるだけのようであり、じっと聞いていると言葉として聞こえそうな気もする。

そしてそれは間違っていない。彼女の奏でる音の連なり自体が、ある一つの意志を表しているのだから。

その歌が紡ぐのは《解放》。

セリスの歌声が空間をを満たすのにつれて、ペンダントの石が輝きを増していく。

直視できないほどに光が強まったその瞬間、一気に光が爆発した
！！！！

突如上がった光の柱は、結界によって人々に気付かれることはなかった。

目が眩むほどの光の嵐が収まった時、陣の中には双黒の少女はいなかった。

光の嵐をやり過ごすために顔を伏せていたジークが見たのは、一人の美女。

女性としては長身な姿態は柔らかな曲線を描き、その輪郭を月の光を反射して輝く銀系の髪が飾っている。

同じく銀系で縁取られた白皙の美貌、白磁の肌、しなやかな手足、全てが溜息をもらすほどに優美だ。

そして何よりも印象的な、その瞳。

神秘の力を宿すというアメジスト。それをはめ込んだような双眸からは溢れんばかりの知性が伺え、身に纏う外見不相応な落ち着きも手伝って老成した雰^な囲気がある。

しかし、そんな永い時^{なが}を生き続ける者特有の空気は彼女の慈愛に満ちた眼差しによって、どこか懐かしい静けさとなっていた。

静かに立つ清艶な美しさの女性。

高まる鼓動を自覚しつつ、ジークは声をかけた。

「お久しぶりです、セリス、いえ……………」
「…《セレスティア》。」

「以前に会ってから、久しぶりと言うほどの時は流れていませんよ、《ジーク》フリード。」

先程までセリスと呼ばれていた少女であつた女性、《月の魔女
セレスティア》は、束の間取り戻した本来の姿で自らの守護者に微
笑みかけた。

21話 襲撃の夜 3 (後書き)

いつの間にかPVアクセスが20000を超えていました!!
喜ぶより先に、いつの間に!?!という感じです。

さて、次話は本編から外れて過去編となります。

現時点でどれくらい書こうか迷っているんですけど、話が進むにつれて、少しずつUPする形でいこうと思っています。

これからもよろしくお願いします。あと、どうか感想ください!

〈過去〉 1

《月の魔女 セレスティア》

俺がその伝説の存在に出会ってから、もう20年になる
うとしていた

ジーク＝フリードには、5歳以前の記憶が無い。いや、当時自分
が5歳であったかどうかすら、定かではない。

ただ、自分の名がジーク＝フリードであるということだけが、知
識としてあるだけだ。

だから、彼の記憶は銀色の光から始まる。

熱い。

全身の傷がジリジリと熱を持ち、彼を苛む^{さいな}。
だがそれ以上に自分の体が動かないということが不安だった。

武器はどこだ

あの自分の身を守ってきたモノは、どこだ

熱のせいでハッキリしない思考の中で、それだけが確かな重みを
持って浮かび上がる。

手探りで求めるものを見つけようとしていると、ひんやりとして柔
らかいものが自分の手を包んだ。

「大丈夫。ここにはあなたに危害を与えるものは無い。だから、今
は眠りなさい。」

そう言った女の声が、なぜだかハッキリと分かった。

薄く^{まぶた}瞼を上げると、ぼやけた視界の中で銀の光が眼にはいった。

それは彼にとって何よりも安心を与える色。何度も彼の心を慰め
てくれた色。

ああ、ここにあった

『何』があるのか分からないまま、それでも安堵のままに目を閉
じて
彼の意識は再び眠りに落ちた。

目を開くと、見覚えのない天井が見えた。どうやら自分は寝ているらしい。

ゆっくりと体を起こす。全身がピリピリと痛んだ。その痛みを無視しながら、慎重に体を動かして動かない所がないか確かめる。

体中に刻まれた傷は痛むが、きちんと動いた。そのことにホツとして、唐突に疑問が浮かぶ。

なぜ全身に傷を負っているのだろう

しばらく考えても答えは見えない。

考え込んでいると、音が聞こえた。

そちらを見やると、扉があった。ノックの音だったらしい。

「起きてる。」

スルリと口から言葉が出た。

少し間が空いて、ガチャリと扉が開く。「良かった、目が覚めたのね。」

そう言いながら入って来たのは、見事な銀髪の女だった。寝台の上に起き上がっている少年を見て、顔をしかめる。

「まだ動かない方が良いわ。傷は完全に治った訳ではないし、熱だつて完璧にひいていない。何より、疲労が体に負担をかけているの。気を付けないと、また寝たきりに戻っちゃうわよ？」

軽やかな物言い。

しかし、少年はそんな言葉も耳に入っていないのか、ポカンとして相手の顔を見つめていた。

若い少年の瞳を、心を奪うほどに女は美しかった。

しかし、そんな事は思いもよらない女は、惚けたままの少年に首をかしげた。

そつと少年に手を伸ばす。

パシッ

『主！？』『嬢！？』

自分に触れようとした手を咄嗟とつぱに払いのけた少年の瞳には、野生の獣のような、強い警戒心が映っていた。

そのまま声が聞こえた扉の方を一瞥する少年に苦笑して、いったん手を引き戻す。

「熱があるか診るだけよ。何もしないわ。」

それから、部屋の外に居る存在を宥めるために声をかける。

「いい音はしたけれど、それだけよ。大した事ではないわ。」

だからそんなに殺気立たないで頂戴。

言外に告げられた言葉に、姿を見せない存在はくい下がる。

『しかし……。』
「くどい。」

穏やかだった女の雰囲気が一変する。

まだ幼い少年は表現する術を持たなかったが、それは確かに感じられた。

この後、成長した彼は断言する。

あれは威圧でも威嚇でもない。

ただ存在しているだけで他者を圧倒する、神々しいまでの威厳であった、と。

打って変わった重々しい口調で、彼女は問う。

「お前たちの主である私が誰であるか、お前たちは理解しているな
」？」

「……………」

無言を肯定ととり、彼女は続ける。

「ならばこの程度で私がどうなるはずも無いこと、わかっている筈
だ。一々つるたえるな。」

そう言い放つと、少年のほうに向き直った。

すでに元の穏やかな空気を取り戻している。

警戒をむき出しにした少年の瞳を見据え、言葉を紡ぐ。

「あなたは熱を出して丸三日寝ていたの。ずっと意識も戻らずにね。もしあなたに何かするならその間にしているわ、そのほうが簡単だから。」

少し、揺らいだ瞳に笑いかける。

「それに、例え私があなたに何か企んでいたとしても、今の状態では抵抗もできないでしょう？傷が癒えるまでは大人しくしていて、隙を見て逃げ出すほうがむやみやたらと疑って何もしないより効率的よ。」

何^{なん}とも身も蓋もない言い方だが、これが功を奏したらしい。

刺激しないようにゆっくりと伸ばされた手は、拒絶されなかった。

「だいぶ引いたけど、やっぱり微熱は続いているわね。最優先はやっぱり体力の回復かしら。ああ、大丈夫よ。若いだけあって傷の治りも早いし、ちゃんと食べて眠れば、体力だつてすぐ戻るわ。」

少年の全身にまかれた包帯を変えながら、明るく女はそう言った。

熱がないか確かめられた後、なんやかんやと言いくるめられて包

帯を変えることを了承させられたのだ。

釈然としない顔で、それでも少年は大人しく包帯を巻かれている。最初は抵抗したのだ。なにせ、包帯は全身に巻かれている。幼いとはいえ少年にも羞恥心はある訳で。

だが、アツサリ言いくるめられてしまった。

「これで終わり。で、君、食欲はある？」

食べ物

思い浮かべた途端、条件反射のように腹が鳴った。それも、立て続けに。

思わず顔を赤らめ、手で押さえる少年を、女は微笑ましげに見つめる。

「少なくとも三日は確実に何も食べてないんだから、当然か。ちょっと待ってて。何か消化に良い物を用意するから。」

そう言って部屋から出て行く女をなんとなく見送る。

少しして、女が戻ってきた。

「内臓が弱っていると思うから、とりあえずこれ飲んで。効き目が出るころには出来上がるわよ。」

そう言って差し出されたのは、黄緑色をした薬湯だった。

少年は受け取って無言で相手の顔を見上げる。

「まだ疑ってるの？しょうがないわねえ。」

少年の手から薬湯を受け取ると、躊躇いも無く一口、二口と飲み

込む。

「これで良い？あ、言い忘れてたけど、ゆっくり飲んでね。」

その様子をじっと見ていた少年は、再び受け取ると今度は言われた通りにちびちびと飲み始めた。

「食べ終わったら色々和讯くから、待ってる間にまとめておいてね。」

なんで傷だらけだったのか、とか、帰る場所はあるのか、とか。

「まあ、言いたくないことは無理には訊かないけれど。」

それだけ言うと、女はさっさと部屋を出て行く。

残された少年はまだちびちびと薬湯を飲んでいたが、やがてそれも無くなった。

部屋を見まわし、やることも無いので言われた通りに自分について考えを巡らす。

そこで初めて『ある事』に気付き、思わず愕然とした。

なぜ今まで気付かなかったのか。

「ぼくは……誰だ？」

少年は全ての記憶を失っていた。

〈過去〉 1 (後書き)

二人の名前は次回に持ち越しです。

もう少し先まで進めるか迷ったんですけど・・・結局こうなりました。

次話はまた、本編に戻ります。

22話 目覚めの朝 1

「ジーク、起きて。」

・・・・・・・・・・セリスの声

「ちょっと、もう時間よ。起きなさい。」

・・・・・・・・・・もう少し

「ほら、いい加減に目を覚まして。置いてかれるわよっ！」

・・・・・・・・・・うるさい

「ジーク？ちょっと・・・きやつ。」

折れそうな程に華奢で柔らかな肢体を引き寄せ、抱き込む。

そうすれば、甘い花の香りが鼻をくすぐった。

湧き上がる安堵のままに、再び心地よいまどろみに落ちようとした時、

「うわー、もしかしてジーク、寝ぼけてるの？めっずらしい・・・。」

「本当に驚きですけど・・・それ以前に、なんて言うか、ものすごくお邪魔じゃないですか？僕ら。」

「確かにねえ・・・。目のやり場に困ると言うか。」

「エイギル！トウーリ！呑気のんきに見てないで助けて頂戴ちやうだい！！」

賑やかな会話。特に最後の台詞は間近で聞こえたため、再び眠ることは叶わなかった。
眉間に皺を寄せ、うっすらと瞼まぶたを上げる。

まず、黒銀が目を射った。

さらに目を開けば真っ赤になったセリスの顔が見えた。
わたたと自分の腕から抜け出そうとしているようだが、非力な彼女では無理だろう。

さらに彼女を捕らえる腕に力を込めれば、こちらが目を覚ましたことに気付いたらしい。

赤く染まった顔でこちらを睨む。目は潤んでいるし、見上げる様な形なので上目遣いぎみ。そんな風に睨まれても迫力がない。
ぼつつと見つめっていると、スウツと深く息を吸い込んだ。

「つつつつ離しなさ

い!!!!!!!!!!!!!!」

「まだ耳がいてえ……。」

「ああ、凄かったものなあ。セリスちゃんの大絶叫。」

片耳を押さえてぼやくジークに、エイギルはご愁傷さまと苦笑した。他の皆が何事かと血相を変えて集まってきたぐらいだ。

誰もが憧れるAランク傭兵が寝ぼけ、相棒の少女に怒られたなどは言えないので、何とか誤魔化した。

「でも、本当に珍しいよな。お前が寝坊しそうになって、なおかつ寝ぼけるなんて。そんなにイイ夢みてたのか？」

からかいを交えて笑いながら言うと、ジークはほろ苦い笑みを返す。

「良い夢、か……。そうだな、確かに良い夢だったよ。」

何かを追い求めるように視線を彷徨ウロウロわせながら、ぼんやりと呟く。

「昔の……そうだな、一番幸せだったころの記憶、かな。」

「ジーク？」

先程から様子のおかしい友人に、エイギルは探るような目を向ける。

しかし、ジークは何も答えず。

「……………」

気まずい雰囲気吹き飛ばしたのは、二人の名を呼ぶ声だった。振り向けば、少女と少年が歩いてくる。

「こんな所にいたんですか。もうすぐ出発だそうですね。」
「これ以上、他の皆さんに迷惑をかけられないしね。」

そう言って笑いあう（見ため）年少者の2人。

当事者の1人でありながら他人事のような物言いに、伊達に砂漠越えを選んだのではないなと思わず感心してしまう。

旅というものは、多かれ少なかれ凶太くなければやっていられないのだ。

そういう意味では、眼前の少女はいい意味で見た目を裏切っている。

今も、少女を目にして仏頂面の青年に平気で話しかけている。

たかが仏頂面と侮るなかれ。元々整った顔立ちのジークは、無表情なだけでも威圧感がかなり増すのだ。

ましてや不機嫌だと表に出している時の迫力たるや、慣れない者ならば竦み上がるだろう。

そんなジークに恐れ気も無く話しかけ、仏頂面を消してしまうのだから、相当肝が座っているというべきか。

もちろん、彼女だからこそできる芸当だろうが。

「ほら、そろそろ行こう。」

それだけの信頼関係を築いている友人を内心羨みつつ、表に出さないように声をかけた。

「何か気にかかることでもあるの?」

相も変わらずルースの背に乗る二人。

「いいや。朝のことか?」

唐突なセリスの疑問に、ジークは戸惑うこと無く答えを返す。

「うん。何かあったのかな、て……」

少し躊躇ためらいがちな返答に、ジークはちらりとセリスを見やる。

こちらを窺うような視線に、顔を逸らす。

セリスの心配の源は、昨夜のことだろう。

確かに関係はあるが、それはセリスが心配するような意味ではない。

「昔の夢を見てただけだ。」

「昔?」

「ああ、俺が貴女に会った時の、な。」

はっとジークの顔を見上げるセリス。

だが、今日はセリスはジークの後ろに座っているため、前方を見つ

めるジークの表情を読み取ることは出来ない。

「思い、出した……?」

少し震える声。でも、その理由は自分にも分からない。セリス

いいえ、分からないフリをしているだけかもしれない。

押し込め、嘘の上塗りをしてきたココロの真実は、もう本人にも分かっていないから。ホントウ

「いいや。」

短い返答にホツとし、次いで、そんな自分に嫌気がさす。

それを振り切るように声をかけようとしたが、先を越された。

「あの頃が、一番幸せだったのかもしれないな。」

「……………そうね。」

今は?

飲み込んだ問いに苦しさを感じながら、セリスはジークの体に回した腕にギュッと力を込め、密着した体勢で、ジークにだけ聞こえるようにそう呟いた。

23話 目覚めの朝 2

「セリスこそ、体は大丈夫なのか？」

自らの背に密着したまま動かないセリスに、ジークは気にかかっていたことを尋ねた。

昨夜行われた『儀式』はジークよりもセリスに負担をかけるものであったから。

『儀式』

それは、成長するに従い、ますます強大になったジークの魔力を解放するためのものだった。

誤解されがちだが、闇の魔力は本来、害のあるものではない。

魔物や魔族は闇に分類されがちだが、あれらは《魔》であって《闇》ではない。

光だけでは眩しすぎるように、闇だけでは暗すぎるように、光と闇どちらも世界にとって必要なものなのだ。

そして闇は夜を眷属けんぞくとし、夜は眠りをも司つかさどる。そして、眠りは生きとし生けるもの全てを包み込み、癒すことができる。

死ですら次の生ままでの休息なのだ。

だが、大きすぎる力は周囲を巻き込み、狂わせる。魔力という異質で、だが極めて自然に近い不可視の（神秘の）力ならば尚更だ。

そして、全てのものがそうであるように、闇もまた二面性を持つ。全てを癒す闇と、全てを呑みこむ闇。

ここで問題となるのは、影響を受ける側だ。

闇の魔力にも正の影響と負の影響がある。

さらに、人間という種は得てして負への誘惑に傾きがちだ。もちろん、そうでない人間もいるが。

ジークは普段剣を扱うためにその魔力量に比べて、魔力の消費量が圧倒的に少ない。

それゆえ、その身の内にたまる魔力も膨大なものになっていく。

この状態は非常によろしくない。
周囲への影響もさることながら、ジーク自身の心身へも負担をかけるのだ。

そこで、セリスはある方法を考え出した。

それは、魔力そのものを無害化させること。

闇属性の魔力は月属性のそれによって中和させることが出来る。

正確に言うならば、闇の《気》を月の《気》で打ち消し、魔力をその源である《魔素》に返すのだ。

ただ、この方法には問題がひとつある。

自らの内に溜まっている魔力を解放するだけのジークと。

その魔力を中和するために魔力を放出するセリス。

言葉にすれば大した差異は感じないが、ただ解き放つだけの前者^{ジーク}と目的を持って放つ後者^{セリス}。その負担は明らかだ。

それゆえ、この方法はセリスが魔力の余裕のある満月にしか行うことはできない。

さらに、変換し終えた膨大な《魔素^{マナ}》をそのままにしておく、周囲の魔力バランスが異常^{おかしく}になるので、物理的な手段では動かせないそれを、無理やり散らさなくてはならない。

まさにセリスにしか出来ない荒業だった。

だが、一緒に旅をするのと同時期に始め、幾度となく繰り返してきた《儀式》。

正直、慣れたものだ。

そのため、心配性なジークに应じるセリスの声は多分に呆れを含んだものとなる。

「あのねえ、今まで何度同じ事を訊いて、同じ言葉を返されたと思っ
ているの。第一、私の体が本当に酷い状態だったら、あなたに分
からない訳が無いでしょう？魔力だけでなく、生命力^{オト}だって連結^{リンク}
繋がっているのだから。」

「だが、今の状態ではそれは十分な効果を期待できない。」

「それは」

ぼそり、と返された言葉に、セリスは反論しようとする。

しかし、それを遮るようにジークの言葉は続く。

「俺の所為^{せい}でそんな風になって、魔力を封じなければならなくなっ
て、友人も、何もかもを置いて、長い間生活し、慣れ親しんできた

場所から離れて旅をするハメになって……。」
「ジーク……。」

宥めるようなセリスの声。しかし、それもジークを止めることは出来ない。

「守護の契約だって、セリスの意思を無視して半ば無理やりに結んだもので、守る、って言うっておきながら負担ばかりで……。」
「はい、そこまで。」

パンツと手を叩き、ジークの言葉を無理やりに遮る。

こちらを見たジークの瞳には普段の、黒曜石で出来た刃のような光は見えず、どんよりとした澱おりが澱よどんでいた。

風霊シルフの力を借りて、ジークの後ろから前へと素早く移動する。

セリスの移動に反応し切れていないジークの顔をグイッと引っ張ってこちらに向けさせ、目を合わせた。

「ジークあなたは勘違いをしています。」

黒紫の視線は強い強制力を持ち、ジークを縛る。

「確かに今の状態の原因の一端はあなたにあります。」

断言した。

それを聞いてジークの瞳にさざ波が立った。しかしそれを無視する。

「けれど、私のせいでもありません。」

少しだけ、視線を和らげる。

「今の状態は私の油断が招いたことです。魔力の封印についても、私が生き延びるために選んだこと。守護の契約は確かに無理矢理でしたけど、それだって私を助けるためでしょう？あの場でもしも悠長に意思確認なんてしていたら、今ここで私は生きていません。旅だって、ずっとあの地から出なかった私にとって真新しいものばかりで、楽しいです。」

世界に勝手に飽きて、勝手に見限って、自分で作った箱庭に閉じこもっていた私に世界は美しいのだと思わせしてくれた。それも、ジークがいてくれたからこそだけれど。だけど、それを口にはいけない。

「それと」

なぜなら、今の彼に必要なのは優しさではないから。

「あなたは自分のせいだといいましたが。」

今必要なこと、それは……

「私の行動の全ての原因が自分だと言うつもりですか？」

それまで以上に強い視線を、ジークに叩きつける。

少しだけ、本来の自分を見せればいい。それはとても簡単なことで……自分と言う存在がどれほど人間ヒトからかけ離れているかを知らしめる。

「私がどんな存在モノなのか、あなたは知っているはず。それでもなお、あなたは私が選んだ上での結果全てを自分の所為だと言うのですか？」

「それは……」

「それは、私にとって侮辱以外の何物でもありません。」

ここまで言えば、ジークも引き下がる。それを分かっている、ジークの台詞を遮さえぎってまで言い切った。

ずるい、と言われるかもしれない。それでも、ここは譲れない。

セリスは守られるだけのお姫様ではないから。

自分は魔女。

人間ヒトと同じ姿をし、人間ヒトをはるかに超える力と、寿命を持つ人間ヒトでない存在モノ。

だからこそ、いつまでもジークが自分セリスに囚こわれていてはいけない。

罪悪感

彼を私に縛り付ける鎖のひとつ。

鎖を消すためなら、セリスは何でもする。だからこそ、彼を傷つけることさえも。

全ては自分と言う存在からジークを自由にするために。

23話 目覚めの朝 2（後書き）

セリスはなかなか一筋縄ではいかない性格なので、心理描写が難しいです。

逆に一番楽なのがジーク。セリスしか見ていないので（笑）

24話 ずれた歯車

最も日が高くなる時刻。

砂漠の生き物は皆活動を控える。

あるものは僅かな日陰に隠れ、あるものは砂の奥深くに潜み、じつと時が過ぎるまで耐える。

それは、旅人たちも例外ではない。

今も、岩陰で休む隊商があった。

「ふう……」

ラダムスの馬車から降り、セリスは一息ついた。

目的地まであと一日と言うところで気が緩んだのか、同行していたラダムスの娘が倒れてしまったのだ。

そこで、治癒を使えるトゥーリとセリスが呼ばれた。

診察したセリスは、軽度の熱中症と診断。付近の岩陰での休憩をラダムスに提案した。

セリスが医术を修めていることは予め知らされていたようであり、また時間も丁度良いので、この提案はあっさりと受け入れられた。

そして今、セリスは処置を終えて馬車から出てきたところだった。

「どうかね？」

邪魔になるだろうと外で待っていたラダムスが、真っ先に尋ねてく

る。

彼が家族思いであることを、一度でも共に旅をしたことがある人間ならば必ず知っており、好感を抱いている。

セリスもその1人であり、ラダムスを安心させようと微笑みながら伝える。

「意識ははっきりしていますし、水分も取りました。身体を冷やす薬湯と湿布をしましたので、あと1、2時間もすれば大丈夫でしょう。ただ、体力の低下が気がりなので、出発前にトゥーリに《活力》の術をかけてもらったほうが良いかもしれません。念のため、1時間後にまた様子を見ようと思っています。」

「生命に障りは無いのだね？」

「ええ、しっかりと休憩をとれば。」

「わかった。1時間休憩を取ろう。その後は娘の体調次第。それでいいかね？」

「ええ。ここで無理をしても後に響くだけですからね。」

そう答えたのは案内者。

砂漠越えに慣れているということで、一行のスケジュールを管理している。

「では、一時間後に。」

一礼して、その場を離れる。さて、何をしようかと辺りを見回すと、ジークと目が合った。

フィと目をそらすジークを気にした様子も無く、けれどもセリスはジークの方へ足を向けること無く別方向へ歩みを進める。

セリスがジークに言葉をぶつけてから、2日が経った。

その間、周囲の人間は特に2人の間に齟齬そごを感じられなかった。ただ、ほんの僅かな、それこそ噛み合う二つの歯車が歯一本分だけずれたという程の微小な違和感。それは、2人の間に確かに存在していた。

原因ははっきりしている。ジークの心の整理がつかないのだ。セリスの言葉が本心からのものであることをジークは知っている。セリスは自身に関して誤魔化すことは出来ても、偽りを口にする事が出来ないことを、知っているから。だが、同時にその言葉が自分を氣遣つてのことであることも理解している。

だからこそ、葛藤かつとうが生まれる。自分のためにセリスが払った、そして今も払い続けている代償は大きい。だからこそ、素直にセリスの優しさに甘えることはしたくない。しかし、セリスを貶めたい訳ではない。どちらにも踏み切れない心が、セリスへの後ろめたさとなっているのだ。

当のセリスはこの事態を予測していたのか、動揺は見られない。セリスにとっては、どんな結果であろうとも構わないのだ。それがジークの意志である限り。セリスにとって、ジークの生命いのちは失いたくない物ではあるが、『一番』ではない。セリスにとって、最も重視すべきものは『意志の自由』。そして、『魂の自由』。

そのためには、ジークはセリスと共に居てはいけない。この先も一緒にいるならば、世界の神子シノギである自分はいつか必ず、ジークの自由を阻むだけでなく、彼の魂までも歪ませてしまうのだ。

う。

そして、ジークはますますセリスに縛り付けられる。

それに、セリスのそばにいる限り、命の危険もはね上がる。

矛盾しているようだが、セリスにとってジークの命が絶たれるということは絶対にあつて欲しくないことなのだ。

ただ、ジークの『意志』と『命』のどちらを優先するかと言われれば、『意志』と答えるというだけ。

本当に？

不意に、心の奥底から響いてきた声に、眉をしかめる。

「偽りなんて無い。」

周囲に聞こえないように呟く。

そう、偽りは無い。ただ誤魔化している

だけ。見ないフリをしているだけ。

「違う。」

あなたは恐れている。彼を縛り付けてし

まう自分を。

「違う。」

今度は裏切られないよう、縛り付けてしまつかもしれない自分を恐れている。

「違う。」

彼を失うことに恐怖を感じている。

「違う。」

まだ否定するの？でも彼が離れるはずがない。気付いているのでしょうか？彼の気持ちに。

「イライラ煩い。」

それなら、あなた自身の気持ちに気づいている？あなたがジークを「黙れ!!」

とつとつ、小さいながらも声を荒げるセリス。そのまま浮かび上がってくる『声』を沈めようとする。

フッフ、凶星を突かれたからってそんなに怒らないで。

「.....」

セリスは答えず、全神経を『声』を封じることに向けている。

あら、無視？.....まあ、お客さんも来ることだし、今回は大人しく戻りましょうか。

トプンッ

そして、『声』は奥底に戻っていった。

「こんなところで何をしているの。」

突然かけられた声に、セリスは驚いた。

『声』を奥底に沈めることに全神経を向けていたため、近づいてくる気配に気づかなかつたのだ。

同時に、去り際の『お客さん』という言葉の意味を知り、セリスは悔しげに唇を噛む。

だが、すぐに動揺を押し隠して振り返ると、そこにはアンジェリカが立っていた。

彼女とは、初日以降全く話をした覚えがない。

それは、今までジークがアンジェリカを警戒し、セリスから離していたからだ。

だが、今はジークは自分のことで手一杯。アンジェリカにまで考

えが及ぶ余裕は無いらしい。

思った以上にジークは思い詰めているようだと言つたと冷静に分析するセリス。

見た目は戸惑ったように小首をかしげるセリスが、実はそんなことを考えているなどとは知らないアンジェリカは、高飛車とも言える態度で言い放つ。

「まあいいわ。それよりあなた、ちょっと話がしたいのだけれど。」

そう言つて踵を返して歩いていく。ついて来い、ということらしい。

今度は本当に戸惑うセリスだったが、アンジェリカとは一度話をしたいと思つていたこともあり、大人しく彼女について行った。

自分の記憶がないことに、どうやら思った以上にショックを受け
たらしい。

目の前で揺れる白い手に、記憶を失った少年はようやく意識を取り
戻した。

「あ、気付いた？」

途端に、自分の顔を覗き込むようにしている女に気が付き、のけ反
る。

のけ反って……寝台に倒れこんだ。

衝撃が傷ついた体に響き、思わず息を詰まらせる。

呻き声すら出せず、横たわる少年に慌てて女は持っていたトレイを
置き、近寄って声をかけた。

「だ、大丈夫……。」

何とか声を絞り出して返事をし、少年はゆっくりと起き上がる。

女の手助けを今度は素直に借りる。借りた腕の細さに、なぜかドキ
リと鼓動がはねた。

そんな少年の動揺を知らない女は、呆れた様子で話しかける。

「声をかけても反応しないから、どうしたのかと思ったのに……。
いったい何をそんなに考え込んで……。」

そこで少年の表情^{かお}から何を読み取ったのか、突然口をつぐんだ。
それを誤魔化すように、声のトーンを上げる。

「まあ、まずは食事ね。空腹でいても考えが暗くなるだけだし。うん、さっきの薬湯は全部飲んだのね。飲んでから吐き気などは感じない?」

「平気、大丈夫。」

少年が短く返事をすると、女は近くにあつた椅子を少年がいる寝台の傍まで引き寄せた。

それからさっきのトレイを持って、その椅子に座る。

スプーンで皿の中身をすくうと、一連の動作をじっと見つめている少年の前に差し出し、にっこり笑った。

「はい、どうぞ。」

ピシリ、と音が聞こえそうな勢いで少年が固まった。

しばらく経つても、女が訝しげな顔をしていても、少年の硬直は解けない。

「なあに?また毒を疑っているの?」

しばらく待ってもなかなか食べようとしない少年に、とつとつ焦れて女は声をかけた。

「い、いや……。」

「嫌いなものでもあるの?」

「いや、そうじゃなくて……。」

「じゃあ、何?」

「えーと……。」

スープに好き嫌いがあるのだろうか。

脳裏をよぎった疑問を振り払い、なんとか説得を試みる少年。しかし、肝心なところで口ごもってしまう。そんな少年に女はたたみ掛けるように疑問をぶつけるが、少年に言える訳がない。

食べさせてもらうのが恥ずかしい、なんて。

少年が躊躇っている間も、女の顔はどんどん曇っていく。それだけでも少年の心に罪悪感が積もっていくのに。さらに、部屋の外からピリピリした空気が流れてくるのが感じ取れた。

「あ、あの……。」

「何？」

「……いえ。」

とうとう少年のほうに先に諦めた。なんだか、どうやっても自分の希望は聞き入れてもらえない予感がしたのだ。

じつと眼の前で輝く銀色のスプーンを見つめる。

目の前の女性の髪と同じ色のはずなのに、向こうのほうかみの色がきれいだな、と頭の隅で思った。

食欲をそそる香りに後押しされ、パクリと口にくわえた。

塩と胡椒でととのえられた素朴な、しかし深い味わいが口いっぱいに広がっていく。

おいしい、と感じると同時に、思わずこくりと飲み込んでしまった。もう少し味わいたかったと後悔した。

そのまま無言で（おそらく作り主であろう）女の顔を見やると、なぜか不安そうな顔で「おいしい？」と尋ねられた。

こくん、と素直に頷く。

「よかった。久しぶりに作ったから不安だったの。」

女はまず寂しげな微笑を、次いで心の底から嬉しげな笑みを見せると、また少年へスプーンを差し出す。

少年も今度は躊躇わずに食いつく。よく煮込んで柔らかくなった野菜だった。

「ああ、よく噛んでね。」

言われた通りにゆっくり咀嚼すると、野菜独特のほのかな甘みが口の中を満たす。

よく味わってから飲み込んで、また一口。

三日間絶食していた自分を氣遣ってか、一口分の量は少なめだったけれど、それも気にならなかった。

むしろ、味わって食べられることが幸せだと感じられた。だから、カツン、と小さな音を立ててスプーンが置かれた時、とても残念だった。

「はい、おしまい。」

女は1度、食器を持って部屋を出て行く。

これから色々と尋ねられるのだろうと少年は緊張で身を強ばらせる。適当に誤魔化すべきか、それとも正直に記憶がないと明かすべきか、一瞬だけ悩んで答えは出た。

しばらくして戻ってくると、女は今度は2人分の茶を持って来ていた。

手渡され、2人とも無言で一口啜る。

互いの出方を窺うような沈黙を、先に破ったのは女の声だった。

「では、始めましょうか。」

その前に、簡単に自己紹介をしておくわね。

私はセリス。当然だけど、真名は内緒。

魔法士だけど、もっぱらこの家で研究をしているわね。」

これ以上は、まだ言えないわね。

意味深に微笑むセリス。無意識なのか、髪をひと房、指に絡めながらのその笑みは、十分蠱惑的だった。その笑みに吞まれ、少年は言葉を失う。

「さてと、次はあなたの番よ。」

そう促され、重い口を開く。

「覚えていないんだ。」

「え？」

目を見開いて驚きを表すセリスに、少年は言いつのる。

「本当。呼び名も、怪我の理由も、それどころか真名さえ記憶にない。」

真名はその人の本質を表すという。魂に刻まれた名は、本人から告げられない限り、例えば生みの親であろうとも知ることは出来ない。知るのおのは、己のみ。

少年は真剣な表情でセリスを見上げる。

「信じられないかもしれない。けれど、本当のことだ。僕が誰なのか、一番知りたいと思っているのは、たぶん……僕自身だ。」

無意識に胸元の首飾りを弄びながら、セリスは考え込んでいる。

「やっぱり、信じられないか……?」

窺うように言い、そんな自分に驚く。

目覚めた時には確かに存在していた警戒心が、今は跡形もない。それどころか、信じてほしいと思っているなんて。

ふいに、セリスは立ち上がる。

部屋の隅に置かれた棚の上から短剣を取り上げ、ジークの前に置く。

「我が子、ジークフリードに幸いあれ」

「え?」

「その短剣に刻まれた言葉よ。それは私があなたを見つけた時、服以外に唯一身につけていたもの。」

恐る恐る、短剣を手取る。

精緻な彫刻が施された鞘。それと対照的に实用重視の柄を握ると、しっくりと手になじんだ。

そのまま抜き放てば、銀色の光が目を射った。

その刃は、セリスと同じ銀色をしていた。

「元々、怪我が治るまでは面倒をみるつもりだったし。」

短剣を鞘に納めると同時に言われた言葉。

セリスを見上げると、穏やかな眼差しとともに言葉が続く。

「記憶が戻るまで、ここに居ていいわよ。」

その間、私はあなたのこと、ジークフリード……いいえ、ジークと呼ぶことにしましょう。」

「ジーク……。」

「そう、いや？」

慌てて少年

ジークは首を横に振る。

「ありがとう。」

助けてくれて。信じてくれて。名前をくれて。

さまざまな想いが詰まった『ありがとう』に、気付いているのかいないのか、セリスは笑って返した。

「どういたしました。これからよろしく。」

〈過去〉 2 (後書き)

今回は、後書き代わりに小話をひとつ。
上話直後です。

「そういえば、どうして僕が記憶喪失だったこと、すぐに信じてくれたの？」

「ん？それはねえ、これよ。」

そう言つてセリスが手渡したのは、首飾り。

鎖に石を通しただけの、簡素なもの。そして、その石は。

「水晶？でも、いろんな色に見えて綺麗だね。」

「それは《虹水晶》。真実だけに耐える、脆くて、儂い石。

もしもジークが偽りを口にしていたら、その瞬間に曇り、ひび割れていたでしょうね。」

「……………つまり、それを嘘発見器にしていたと。」

(僕の不安と感動を返せ……………)

25話 糾弾と叫び

「ジークに何を言ったの？」

歩みを止めて振り返り、開口一番にアンジェリカは問い詰めた。

「何、とは？」

対するセリスは、小首を傾げて問い返す。

その平然とした態度が気に障ったのか、ギツと目を吊り上げるアンジェリカ。

それでもセリスは動じない。

ただ、その黒紫の瞳でじつと見返すだけだ。

その瞳に気圧されながらも、アンジェリカは食い下がる。

「とぼけるつもり？」

とぼけるも何も、セリスには話が見えてこない。

「ジークの様子がおかしいの、あなたが原因でしょう？」

「なぜ、そう思うのですか？」

そうセリスが問うと、ひとつ、深呼吸してアンジェリカは口を開いた。

「あたしはあなたのことを全く知らない。でも、ジークのことなら別。

たとえ計算から生まれた好意でも、ずっと彼を見てきたから。

私は今までにジークが誰かのために揺らぐ所を見たことが無かった

わ。彼の根源が何かまでは分からなかったけど、それがそう簡単に
変化するものとは思えなかった。

実際、彼は様々な人と関わっても、どれだけ環境が変わっても、本
質は変わっていなかった。」

思わず苦い笑みを浮かべる。もしもジークがこれ程までに不変で
いなかったら、自分は彼にここまで執着しなかっただろう。

浮かんだ考えを振り払う。今はそんなことを考えている場合では
ない。

「でも、ここ2日間のジークは違う。

今の彼はその本質にさざ波が立っている、そんな感じに見えるわ。
そして、今まで全く変わる気配を見せなかったジークの本質、いい
え、この場合は信念、と言ったほうが近いわね。それを揺らがすほ
どの人物、と言ったら……。悔しいけれど、あなたしか思い浮
かばない。」

セリスは微笑む。

「それは買い被り過ぎですよ。とは言え、今回に関しては正解です
けどね。」

それにしても、素晴らしい観察眼と分析力ですね。特に分析が見
事に私情が皆無ですけれど……。何か吹っ切れましたか？」

その途端、アンジェリカはカアツと頬を紅潮させた。

なぜか、翡翠の瞳の、大嫌いな男の顔が浮かんだ。しかし、慌てて
振り払う。

「関係無いでしょう?!それより、質問を誤魔化さないで!」

「はぁ……。まあ、それこそ私には関係無いことですね。それ

で、何でしたっけ？」

「ジークに・何を・言ったのか・よ!!！」

ああそうでしたねと空々しく言うセリス。その顔は完全に笑っていた。

そしてそのまま、アンジェリカにとって信じられない答えを返す。

「……………何ですって？」

「聞こえませんでした？」

私のことを……………気にするなと言ったんですよ、ジークに。

「

アンジェリカは自分の耳が信じられない様子でいる。

彼女も今ではジークにとって目の前の少女がどれ程重要な存在か、多少は理解している。

だからこそ、天使を思わせる笑みでそんなことを言い放つ少女が信じられないでいた。

「質問には答えました。もういいですか？」

言ってしまったからにはこれ以上話を続けることは無理だろう。

本当はもう少し話してみたかったけれど。

例え彼女の言葉通り、損得勘定から生まれた好意でも、それに本人が気付き、それでもジークを好きだと言えるのなら、彼女の想いは本物だ。

強くて、でも脆いジーク。彼が甘えられる人物は、もう数えるほどしかないだろう。

友人としてはエイギルが。

父親代わりにはザリアスが。

自分が離れていた数年でもう少し増えているかもしれないが、自分から離れられるほどでは無いだろう。

他人が聞けば傲慢と言われるかもしれないが、事実なのだから仕方が無い。

だからこそ、自分がいなくなった時、今度こそジークが自分を追わないと言う確かな保険が欲しいのだ。

「な………んで………」

セリスがそんなことをつらつらと考えていると、小さな問いかけが聞こえた。

視線を向けると、俯いたアンジェリカがいる。

初対面の印象から言っ、もっと激昂して怒鳴り散らされるかと思っただのだ。

そんなことを考えていたセリスだが、それもアンジェリカの問いかけで吹き飛んだ。

「なんで………ジークにあれだけ想われていて、どうしてそんなことが言えるの?! 彼が大切でないの?!」

この2日間、セリスが懸命に抑え込み、表に出さないようにと努力してきた罪悪感。それがアンジェリカの言葉で一気に膨れ上がった。

この後、セリスは何度もこの時のことを思い返すが、どうしても納得できる説明が思い浮かばなかった。

なぜ、感情を制御することに長けたセリスが、この時に限ってあんな風に感情をそのまま口に出したのか。

それは、神々の悪戯キマクレだったのかもしれない。

「大切であるからですよ。」

スルリと出た言葉は、わずかに震えていた。それに気付き、息を吐く。再び流れ出す声は、もう震えていなかった。

紡ぎだす言葉は静かなまま、瞳だけは強い光を湛える。

「私の年齢、いくつだと思います?」

「え……………」

セリスの瞳に吞まれていたアンジェリカは、唐突な問いに戸惑う。次いで、眼前の少女を観察する。

あらためて見ると、まず、思ったよりも小さいことに驚く。

大きく見えたのは身長と比較して手足が長く、均整の取れた体格であることと、彼女自身が持つ不思議な威圧感のせいだろう。

華奢な肢体はまだ完全に成熟しきっておらず、青く硬い果実を思わせる。

大人びた言動を考えに入れても、どう見ても……………

「16,7……………」

「具体的な数字は言えませんが、少なくとも、ジークやあなたよりはるかに年上です。」

きっぱりと断言するセリス。

思いもかけぬ返答に、驚くアンジェリカに説明する。

「私は、他人より魔力が大きいんです。その影響で寿命も長くなっています。」

「これが何を示すかわかりますか?」

首を横に振るアンジェリカ。

「大抵の人は私より早く死ぬ、ということですよ。」

それが、寿命だと諦めることもできません。たとえば、そう簡単に割り切ることが出来なくとも。私は昔から他人と接触することを避けてきました。置いていかれる悲しみを出来るだけ減らすために。

そうしていれば、静かな生活の中でいつかは受け入れることができます。

「……いいえ、受け入れることができませんでした、これまでならば。」

でも、ジークは違うんです。あの子はまだ幼い時に傷だらけで倒れている所を私が拾い、育てました。

だから、あの子は私にとって『特別』です。

『特別』だからこそ、あの子に私の目の前で置いていかれたら……きつと私は耐え切れない。

ましてや、それ以上の想いを持ったなら、正気すら失ってしまうかもしれない。私には、それが何よりも恐ろしい。

お分かりですか？私は誰も愛してはいけません。

だったら、せめてあの子には満足な生を送って欲しい。私が納得できるだけの幸せを得て欲しい。

こう考えるのはおかしい事でしょうか。」

語りながら、自らを恐れるように、拘束するようにセリスは自身の身体をかき抱く。

「あの子が背負うものは暗く、大きく、重い。受け入れてしまえば楽になれるのに、それも出来ない。」

そして見つけてしまった。私と言う逃げ道を。」

セリスは泣き笑いの顔をアンジェリカへ向ける。

「縋るのに、私ほど条件のいい存在はそうそういないでしょう。寿命は長いから先に逝くことはない。大抵の荒事は魔法で片付けることが出来るから、死への不安も薄い。

でも私だって人間……です。たとえ平気そうに見えていたとしても、人一人に寄りかかれたら……やっぱり重いんです。

だから私が重みに耐え切れなくなる前に……重みに潰される前に、私はジークから離れなければいけない。

『終わり』が来る前に、今の関係を断ち切らなければならないんですよ！……！」

最後はまさに、血を吐くような叫びだった。

全てを吐き出し、セリスは打って変わって不安に揺れる眼で愕然としているアンジェリカを見つめる。

「貴女は……ジークを支えてくれますか……？」

アンジェリカはその問いに答えられない。

ひどく小さく感じるセリスを抱きしめることしか、彼女には出来なかった。

「それでも、あなたにはジークが、ジークにはあなたが必要だと思うわ……。」

アンジェリカの咳きはセリスに届くことなく風に攫われていった。

2人の様子を窺っていた人物はセリスの叫びを聞き、俯いていた。

26話 決意

魔女は泣けない。

『泣かない』のではなく『泣けない』。

だから、私は涙を流せる人間ヒトが羨ましかった。

悲しいことを吐き出して、再び前を向けるその姿が眩しかった。

でも、アンジェリカに抱きしめられたとき、私は泣けたのかもしれない。

たとえ、涙は流せなくても。

ようやく顔を上げたセリスの顔に、アンジェリカは虚を突かれた。

慰めたい、と感情のままに抱きしめてしまった相手。震える肩から、泣いているのだとばかり思い込んでいた相手の顔には、涙の跡さえない。

けれども、どこか吹っ切れたような、晴れやかな表情は泣き明かした後特有のものとしか見えなくて。

そのちぐはぐさに、アンジェリカの咽喉のどから言葉が滑り出ていた。

「泣いて、いたんじゃないの……?」

責めているかのような言葉に、ハッと手で口を押さえるアンジェリカ。

セリスは、気にしないと伝えたかったが、自分の表情かおにほる苦さが加わることを隠せなかった。

「魔女私の一族には、涙を流すことが許存在しされていません。だから、泣かないんです。」

(正確には、涙を流せないから、泣けないんですけどね。)

自嘲を隠せず、そんな顔をアンジェリカから隠すためにつつむく。それでもアンジェリカがうるたえている気配を感じて、微笑が浮かぶ。

目を閉じて、気持ちを切り替える。仮面偽りで装う訳ではないから、簡単だ。

よし、と顔を上げるその表情はうつむく前の晴れやかなもの。アンジェリカのホツとした表情に、思考の隅で、可愛い人だな、なんて思ってしまった。

「泣かないけれど……なんだか吹っ切れました。ありがとうございます、アンジェリカ。」

「……どういたしまして。」

思わぬ謝礼に戸惑って、晴れやかな笑顔に照れて、色々複雑な思いを抱えつつも、その笑顔の無邪気さに、アンジェリカは気付けばそう返していた。

今日はよくよく、人に呼び出される日らしい。

雲ひとつない空（砂漠なので当たり前と言えば当たり前だが）を見上げながら、セリスはぼんやりとそう思った。

そうして気まずい空気からの逃避を行いながらも、握られた手を引かれれば、大人しく無言で足を進める。

ぼんやりしていると、砂に足をとられて転びそうになる。そのたびに、気付かれないようにバランスを取り戻す。

何度かそんなことを繰り返して、現実逃避を諦め、前を歩くジークの背に目を向けた。

………やっぱり気まずいので、改めてジークの観察を試みることにした。

背は、伸びた。自分が縮んでいるせいでもあるだろうが、もう元の姿でも見上げていないことは出来ないだろう。

それに合わせて、出会ったばかりの頃は子供の面影を存分に残して

いた細い体は、鍛えられ、引き締まった『男』の体として完成されている。

一週間近い旅の間に、少々長めだった黒髪はさらに伸び、今は邪魔にならないように首の後ろで適当に紐で括つてある。砂埃のためか艶のない髪は、手入れさえすれば、いや、旅塵を落としさえすれば女顔負けの美しさであることを知っている。(かといってセリスも日頃から最低限の手入れしかしていないのだが。)

セリスと異なり、砂に足をとられることの無い乱れの無い足取りは、バランスよく鍛えられた肉体と卓越したバランス感覚によるものだ。しかし、そのゆるぎない足取りは経験に裏打ちされた自信を感じさせる。

(格好良く育つたんだなあ。)

セリスはなんだか感慨深く思った。失ってしまった自分過去に、不安を抱いていた少年はそこにはいない。

いるのは、自分の足で力強く前に進む、一人の剣士。

(の、はずなんだけれど……。どうして親離れできないのかしら……?)

つらつらとそんなことを考えていると、ジークの歩みが止まった。

「貴女は、自分の代わりに探していたのか。」

背を向けたまま、ジークは背後のセリスにだけ聞こえる声量で尋ねた。

その内容に、思わずセリスは動揺する。

どうして、ジークが知っている？

「また、俺から離れる気なのか。」

どうやってそのことを知った？

「ふたたび、一人でいる気なのか？」

答えはひとつしかない。

「……悪い子ですね。盗み聞きなんて。」

はぁ、と息を吐く。

とたん、ジークは振り返る。その顔には、気まずい、ばつが悪いと
しっかり描いてある。

「すまない。けれど、これだけは言いたい。」

キツとこちらを見据える視線。

そして、次の言葉にセリスは息を呑んだ。

「私の幸せをあなたが決めないで」……昔、貴女が俺
に言った言葉だ。今、貴女にそのまま返そう。」

それは、ジークが旅立つ数日前。

子供の浅知恵から出た言葉に、彼女はそう返した。

そして、彼女はジークに師として、親として、最後の課題を出した。

『幸せとは何なのか、世界を見て答えを見つけないさい。』

「あの課題の答えを、俺はまだ見つけていない。ただ、その答えがひとつではない事は、今の俺でもわかる。」

セリスは目を伏せた。

「あなたに勝手なことを言っているのは理解しています。子離れできな親の戯言と思ったっていいですよ。」

「貴女にとって、俺は今でも『子供』なのか？」

思わず、ジークはそう溢こぼしていた。

「え？」

「俺は、貴女を恩人と思いはしても、『母親』として見たことは、一度として無い。」

漆黒の視線がセリスへと真っ直ぐに向けられる。

ジークにとっても予想外だが、口から飛び出た言葉は戻らない。ならば、いつそ言いたいことを言うだけだ。

「貴女の傍にいたいと思っていた。貴女を支えたいとも。それは、貴女が俺を育ててくれたからでも、助けてくれたからでもない。」

互いの視線がぶつかる。

だが、こればかりはジークも譲れない。ここで引いたら、自分の思いを否定することになると理解しているから。

だけど、続きを言うのが早すぎることも理解していた。

だから、本当に言いたかった言葉を飲み込んで、当たり障りの無い、けれど本心からの言葉で締めくくる。

「それだけはわかって欲しい。そして、少なくとも、『現いま在』貴女

の傍にいる事を、認めてくれ……。」

切ない声音を、セリスは拒否することができなかった。

そうして、セリスとジークは今まで通りに振舞った。
僅かに生まれた波紋を、見ないようにしながら……。

記憶が戻らない

ページをめくる手を止めて、ジークは溜め息をついた。

目覚めてから何日が過ぎたのだろうか。

寝たきりであった体は少しずつ体力を取り戻し、先日ベッドから離れることを許された。もっとも無理は禁物らしいが。

何日が過ぎすうちに気付いたのだが、この家は時間の経過がわかりにくい。時計は存在するが暦は無く、窓からの景色を見ても青々とした木々が見えるのみだ。変わり映えのしない毎日もあいまって、数日かいないはずなのに数年も経っているような、またはその逆のような錯覚を起こさせて。

セリス曰く、半月ほどしか経っていないらしいが。

そういう訳で持て余している時間を使い、ジークは読み書きを習っていた。

記憶喪失がどの程度影響しているのか調べたところ、日常生活に必要な知識以外はサッパリだったのだ。

で、「教養はないよりあるほうがいい」という方針らしいセリスに

より、学ばされているのである。

まあ、字が読めるようになったことで読書という暇つぶしの時間が増えたことは、ジークにとって悪くなかったが。

知識を得ていけば記憶を取り戻す鍵が見つかるかと思ったジークだが、今のところ、手がかりは全く無かった。

そして最近になって、彼に悩み事がもう一つできた。

セリスの様子がおかしいのだ。

読書をしているとき、食事をしているとき、ちょっとしたときにふと、視線を感じることもあるのだ。

視線を辿ると、セリスが何か言いたげにこちらを見ているのだ。そして、こちらが気付いたのを知るとたいてい、慌てて誤魔化す。

これで気にならないはずが無い。

何度か聞いただそうとしたのだが、そのたびに何かしら邪魔が入り、上手くいかなかった。

今日こそは、聞き出してやる、と改めて決意し、ジークはもう一度本に意識を戻した。

一緒に食事をすることは、セリスとジークの暗黙の決まりごととなっていた。

その間の会話は、ジークの食事のマナーに対する注意だったり、その日ジークが読んだ本についてだったりする。

セリスの知識に悔しい思いをすることもあるが、料理も美味しいし、ジークにとってそれはとても楽しい時間だった。

「砂漠を防壁としている町はけっこうあるけどさ、そこから街に発展するところって滅多に無いんだね。」

「やっぱり水の確保が問題なのかな。」

「そうね。オアシスだと一定量しか供給されないから人数が増えて

も困るし。例外はサラテイルドかしら。あそこは精霊に愛されているから。」

「サラテイルドって東にある大国の首都だっけ？そういうえば本でも取り上げられてたな。でも、それには地下水が豊富だからって書いてあったよ？」

無意識にか首をかしげるジーク。君、初対面の警戒っぷりはどこに行ったのか、可愛いけれど、と思うセリス。

「あー、『選地論』かしら。」

それ書いた人、シュレーナー派っていつてね。精霊の加護とか恩寵とか、そういう『目に見えないもの』を理由にすることを否定しているのよ。精霊の存在自体は認めているらしいけどね。

でも、あれ結構難しいんだけど・・・内容、わかった？」

「確かに難しかったけど、まあ、なんとなく？」

内心舌を巻くセリス。『選地論』は精霊や魔法といったものを極力根拠として用いないようにしているので『なんとなく』とか『そんな感じ』で理解することができないのだ。よって、専門家はともかく一般の人には難易度が高い。

だが、それをジークに伝えることはしなかった。・・・というか、できなかった。

なぜなら、先にジークが爆弾を落としてきたのだ。にっこり笑顔つきで。

「で、しばらく前から何を悩んでいるの？それも、当人である僕を除け者にして。」

ピタリ、とセリスの動きが止まる。

それから誤魔化すようにぎこちなく料理（今晚の夕食は川魚ときのこの蒸し焼き、野菜のクリームスープ、フルーツサラダ、香草入りオムレツ）をパクリ、と食べる。
モグモグモグ……………

そんなセリスを見、ジークは必死に笑いをこらえる。
時々この女性は、妙に可愛らしくなると思う。

「言つとくけど、今回は誤魔化されないよ？ちゃんと教えてくれるまで、諦めないから。」

ピタリ……………コクン

再び停止してから、口の中のものを飲み込み、はぁ、と溜め息をついた。

彼は聡い。それにとても賢い。それに、いつまでも隠しておけることでもない。

「降参です。きちんと話します。ただ、あまり楽しい話ではないから、食事の後にしましょう。」
「わかった。」

丁寧な言葉遣いはジークの保護者としての言葉。

それに、セリスはこういつた時の約束を破ることは無い。

半月一緒にすごしただけでも、それがわかったジークは、大人しく食事を続けた。

「単刀直入に言うとな、あなたには魔力があるの。」

食後のお茶を飲みながら、セリスはあっさりと言った。

「それも、とても強い魔力。今のままでは危険なほどに。」

静かなまなざしでジークを見つめる。ジークもセリスから目を逸らさない。

ただ、ひとつだけ気になった。

「危険？」

「そう、魔力についてはわかる？」

「たぶん、この前本に書いてあった。魔素マナと気だっけ。」

「そう。なら説明は要らないわね。」

危険というのはね、魔力は感情に引きずられやすいからなの。強い魔力ほど、感情に影響を受けて暴走しやすい。

さらに、魔力が強いと暴走した時の身体の負担も大きいから、周りにだけでなく自分の命さえ危うくなるわ。」

思わずじつと自分の手を見る。自分にそこまでの力があるとは、到底信じられない。

「僕、魔力なんて感じないけれど……」

「それはそうでしょうね。」

忘れているかもしれないけれど、あなたはこの前、死に掛けていたのよ？そう簡単に生命力が回復する訳ないじゃない。やっと肉体が元気になって、余裕ができたって言うのに。」

指を振って言うセリス。行儀が悪いはずなのに、様になっているのはどういうことか。

「問題は、そんな状態でもはっきりわかる程にあなたの魔力が強いこと。」

本当はもう少し、落ち着いてからのつもりだったけれど……。

ふっ、と息を吐いて言葉を切る。

本当に重要なのはここからだ。全ては、ジークの選択次第。

「何度も言うけれど、あなたの魔力は強い。放置しておけない程にだから、わたしにできるのはあなたに選択肢を用意してあげるこ
とだけ。」

ひとつは、その魔力を封印すること。目覚めていない今の状態なら、可能。

ただ、どんなきっかけて目覚めてしまうかわからない上に、そう
なってしまうは恐らく、再封印は不可能。つまり、いつ目覚めるか
わからない爆弾を抱えていくことになる。

ふたつめは一切、外界との接触を断ち、一人で暮らすこと。とい
うか、完璧な隠居よね、これ。

実際には、生きている限りそんなこと無理だから、現実性の無い
理想論だけ。

みつめは、魔力の制御コントロールを学ぶこと。あなたの魔力は大きいから、
師匠せんせいはわたしになるわね。目標は制御だけど、魔法もその意志が
あれば教えてもいいわ。

「さあ、どうする?」

意味深に笑うセリス。それはまるで、契約を迫る悪魔のような微
笑。

だが、ジークにはそれよりも気になることがあった。

「三番目を選ばせよう」という意志がひしひしと感じられるんだけど。
」

「ばれた? まあ、そのほうが色々楽しね。ただ、選ぶのはあな
たよ。」

「わかってる。僕がどれを選ぼうと、あなたはそれを受け入れるだ
けなんでしょう?」

「うん、その通り。」

にっこり笑って肯定されれば、ジークはもう何も言えない。

「まあ、すぐに結論を出す必要もないし、しばらく考えて・・・」
三番目を選ぶ「・・・え?」

即断したジークにセリスは驚く。けれど、ジークの瞳に迷いは無
い。

「いいの?」

ジークははっきりと頷く。

「選択肢が三つに限られているなら、僕はその中で一番自由なものを選ぶ。」

「……いいでしょう。なら、あなたはわたしの弟子ね。」

「よろしく、師匠。」

「セリスでいいわ。ただ、ひとつだけ。」

クスリと笑った次の瞬間、幻のように笑みは消え失せ、真剣な眼差しが注がれる。

「わたしは唯人ではない。それだけは覚えていて。」

わたしは……『魔女』よ。」

「魔女……?」

ぼんやりと復唱するジーク。この時の彼には、それがどんな意味なのか、わからなかった。

27話 太陽の都

その後の行程は平穏なものだった。

盗賊と会うことも無く、何度か砂蠍による騒ぎがあったが、被害者はいてもセリスのおかげで死者はいなかった。

セリスもアンジェリカと一緒に見張りをしたりと交流を深め、今では仲のいい友人となっていた。

ジークは複雑な顔をしていたが。

元々セリスは人が嫌いではない。積極的に関わることはないが、邪険にすることも無い。

なので旅の終わりには

「セリスちゃんくん。」

「はいはい、なんですか？」

「ちよつと薬もらえる？」

「はい、どうぞ。・・・50エクです。」

「金とんの?!」

「何やってるんだセリス?!」

「夕飯作りですけど、何か？」

「そつ、それ猛毒の砂蠍だろ?!」

「はい。美味しいですよ？毒抜きもばっちりです。あ、一口いかがです?」

「うわああああああ!!」

・・・すっかり(?) 馴染んでいた。

サラティルドは大國ラティルドの首都である。

砂漠と海という天然の防壁を持ち、貿易で栄える都。

様々な人種、国籍、宗教、文化が入り混じる、極彩色の都。

数多あまたの詩人により、数多あまたの名で讃えられ、謳うたわれるその地は、魔による侵攻を受けた後もなお、《太陽の都》の名に恥じぬ繁栄を見せていた。

サラティルドに到着したことで護衛を終了し、残りの報酬を受け取ったセリス、ジーク、エイギル、トゥーリの4人は、人がひしめく市場を歩いていった。

「思っていたよりも賑にぎやかなね。」

賑わう市場を歩きながら、その麗貌をフードによって隠したセリスの呟きを、その横を歩くトゥーリが敏感に拾った。

「これ位、いつもの事ですよ。セリスさんはサラティルドは初めてですか？」

「何度か訪れたことはあるわ。その時と変わらぬ賑わいよ。ただ、《大侵攻》からまだ3年でしよう？それにしても随分復興が早いと思ってる。」

それに答えたのはエイギルだった。

「城壁内への侵入は最小限で食い止められたからね。その分外の戦闘は大変だったけど。」

後はやっぱり、『英雄』の尽力のおかげかなあ。なあ、ジーク？」「黙れ。名で呼ぶな。」

邪険にされたエイギルは、ジークがそれ以上強く出られないことを知っているから、落ち込むことも無くニンマリと笑う。

強い日差しを避けるため、他の多くの旅人と同じくフードをすっぽり被っているの、今の所気付かれることはないが、一度彼がここにいる事がバレれば、大騒ぎは間違いない。

セリスとトゥーリが他愛無い会話をし、それを元に時々エイギルがジークをからかう。

4人は、そうやってしばらく市場を歩いていた。

セリスも女性らしく買い物を楽しんでいたが、ふとこれからの予定をジークに尋ねた。

「まず、依頼人のところだな。」

それに、てつきり宿場に行くと思っていたエイギルとトゥーリは顔を見合わせる。

「ちなみに？」

好奇心、と顔いっぱい書いてあるエイギル。

傭兵の守秘義務やら何やらを忘れ去っている（無視しているともいえる）友人に、溜め息をこらえつつも、これぐらいはいいかとある場所を指差した。

その先に佇む建築物を見、エイギルは目を見開き、タワーに至っては、顎を落として絶句した。

ジークが指さしたものだ。それは

ラティルド国民が敬愛する、王家の象徴。

《太陽の都》の中心、《黄金宮》だった。

「黄金宮って、成金っぽい響きよね。」

結局エイギルとタワーとは途中で別れ、巨大な城へ向かいながら、セリスはラティルド国民十人中十人が猛抗議しそうな感想を口にする。

対してジークの感想はあっさりしたものだった。

「まあな、実際は金ピカってわけじゃあないがな。たしか、由来はシルヴィオ・フリーー だったか？」

「ええ、

“ 太陽の恵み溢れし黄金の都

されど真の黄金は

その中心

内に陽の雫を隠し

煌めくはまさに黄金

の宮なり”

「

どちらも知識をひけらかす訳でもなく、当然の知識の様に話をしているが、貴族や学者でもなければここまでスラスラとは出ないだろう。

だが、さらにセリスは悪戯っぽく続ける。

「昔からこの地は太陽に例えられ、謳われてきたわ。それは、シルヴィオの陽の雫と同じく、ラティルド建国時からの伝説が元になっているの。」

その伝説を知っている？」

ジークは首を横に振る。そんな彼に、セリスは目を煌めかせて言った。

「サラティルドには黄金の魔女がいる

だそうよ。」

「いったい誰が言い出したのかしらね。
楽しげに、セリスはそう囁いた。」

「さすが、交易で栄える都。いい茶葉を使っているわね。」

城に入り、通された部屋でセリスは出された茶を楽しみながら言う。

カップを口に運ぶ仕草は優雅で、作法の手本を見ているようだ。しかし、その隣に座るジークは、ムスツとした顔を崩さない。

ジークの不機嫌の理由は、この部屋に通されるまでの過程にあった。

門番に顔を見せれば城門はパス。セリスについても同様で、ジークが一言、「連れだ。」と言えば身体検査もなし。

通された部屋も無駄に広いわけではないが、調度は落ち着いた雰囲気、趣味の良いもので傭兵への待遇としては破格のものだ。

茶の香りを楽しみながら、クスリとセリスは笑う。

「英雄の名はまだ効力があるみたいね。予想はしていたけれど。それにしても、そんなに気に入らないの？」

わかっていながら、セリスはジークに問う。

そんな彼女を横目で見下ろし、顔だけは正面へ向けたままジークは低い声で苛立ちを吐き出す。

「俺は英雄じゃあない。本当にそう讃えられるべき人たちはもうこの世にいない。」

俺は、ただ殺しただけだ。」

吐き捨てられた言葉に、セリスは何か言いたげに顔をしかめたが、何も言うことはなかった。

室内の沈黙を破ったのは、勢いよく開かれた扉だった。近づいてくる気配に気付いていた2人は、特に驚いた様子を見せない。しかし、そこから現れた人物にジークはギョツとする。

なぜなら飛び込んできた人物はジークを認めるや、そのままの勢いで彼に駆け寄り、

「ジーク!!!!!!」

力いっぱい抱きついたので。

「ひっさしぶり!!!!よく来たなあ!!!」

いや、ぜんっぜん変わっていなくて嬉しいよ!!!!!!」
「放せ!!!!!!」

そもそも、たかが2、3年で劇的に変化するわけ無いだろうが!!!!!!

ここに来たのも、お前に、仕事で、呼ばれたからであって、遊びに来たわけじゃあない!!!!!!」

いい加減放せ!と叫ぶジーク。全く話を聞いていない相手。

「.....カオス混沌ね。」

小さく呟くと、セリスは我関せずといった態度で、傍にいたメイドにお茶のお代わりを頼んだ。

28話 王太子

気力を使い果たし、ぐったりとしているジークを気にせず、原因である闖入者はセリスに向き直った。

「いや、見苦しいところを見せてしまったね。友人との久々の再会に、喜びが抑えきれなかったようだ。」

「いいえ、むしろ面白いものが見れたと思っていますから。」

「それは良かった。」

何が良いのかと聞いていたジークは思ったが、にこやかに交わされる会話に突っ込む気力はなかった。

その間にも話はどんどんと進んでゆく。

「それでは改めて、私の名はランデイスⅡアインスⅡフルストⅡサ
ンⅡラティルド。」

「どうかランディと呼んでくれ、美しいお嬢さん。」

「丁寧なご紹介、ありがとうございます。」

わたしはセリスⅡアーゼント。セリスとお呼びくださいませ、
ランデイス王太子殿下。」

とたん、周りの空気が冷えた。

ジークはチラリと周囲を一瞥。冷気の発生源は部屋にいた使用人や護衛達。セリスが彼の正体を看破したことに驚き、警戒している。見破られた本人は、ほう、と感心しているのか驚いているのか、微妙な声を上げただけ。

セリスは感情の読み取れない微笑をたたえて沈黙している。

部屋の空気を戻したのは、ランデイスだった。

片手を挙げて使用人や護衛を制する。

「慕われていますね、王太子殿下。」

「ありがとうございます。」

それで、何時から気づいていたのかい？」

「そうとわかったのは名乗られたときに。」

まあ、当たりをつけたのは王太子殿下が入室された時からですが。

無言で先を促され、お茶を一口飲んでからセリスは説明を始めた。

「わたしはともかく、ジークはこの地を救った《英雄》。その名の効力が未だ健在であることはこの部屋に通されるまでに嫌という程わかりました。」

そんな彼がいる部屋にあんな態度で入り、あまつさえ抱きつくなんて、気心の知れた人間か、高い地位にいる者だけです。他の人も見てみぬフリで、止めようとしませんでしたし。

名に関したって、“王”^{フルスト}と“サン”^{アインス}ラティルド”からこの国の王族であることがわかりますし、“一”^{アインス}は継承権第一位を示すもの。これだけ揃えば相手が誰だか特定できないほうがおかしいでしょう。

「こんな所か、と思いながらセリスはもう一口茶を飲む。彼がラティルド王家の者と判断した理由はそれだけでは無いが、そこまで明かす必要はない。」

これはただのデモンストレーション。自分がジークの相棒であることを、納得させるのが目的なのだ。

そして、それは相手の目的でもある。

セリスはそのことを確信していた。

「ハハハハハ！恐れ入ったよ。」

なるほど認めよう、貴女はジークの相棒だ。」

「別にお前にワザワザ認めてもらう必要はない。」

不機嫌になるジーク。

「ありがとうございます、ランデイス王太子殿下。」

にこ、と笑うセリス。

「ランディでいいと言ったろう？君はジークの相棒なのだから。」

それにしても、^{アーシエント}銀か。その黒銀の髪にはさぞかし映えるだろうね。」

「妙に含みを持たせた声。」

「偽名だろう？」という副音声^{アーシエント}が聞こえた気がした。

「頭の固い貴族や、煩い貴族令嬢を敵に回すつもりは無いので。」

わたしはジークの相棒に過ぎません。わたし個人はこの国に何の貢献もしていないのですから。」

それを無視し、セリスは言う。元より偽名なのは事実だ。

「なかなか辛辣だね。その敬語も要らないのに。」

普通に敬称とかじゃだめなのかい？」

「わたしの一族はどんなに高貴であろうと、家柄や地位に膝をつくことはしないんです。」

まあ、多少は融通がききますので、今回はランディ殿下、またはランデイス殿下で勘弁してください。依頼主ですし。」

「まあいいよ。まだるっこしいのは嫌いだから。」

「ここでやっとジークが口を挟んだ。

「………終わったんなら仕事の話に移っていいか。」

少しだるそうな様子は色っぽい。

セリスが見回すと、幾人かのメイドがほほを染めていた。

なんとなく悔しいので手を伸ばして、ぺし、とジークの額を叩く。

「おい？」

驚いたジークの声を無視し、口の中で呪文を唱える。

頭がスツキリとしたのを感じ、ジークはセリスに目をやる。

「何かやったのか？」

「ちよつとね。」

初歩である邪気払いの術で精神面の回復ができることを発見したのは、いったい何年前だったのだろうか。

確か、治癒と間違えて使っちゃったのよねー、と思い出しながら、自分を慕う養い子にそんなことを言えず、誤魔化した。

「仲がいいねえ。」

そんな二人の様子に、しみじみと感想を述べるランデイス。他の人間も、微笑ましそうだったり羨ましそうだったりと反応は様々だが、皆二人を見ていた。

「それより、仕事だ仕事。」

気恥ずかしくなったか、ジークは話を強引に戻す。

「まあ、そうだな。」

ランデイスも気を使って話に乗る、かと思いきや、いきなり話を変えた。

「ところで二人はもう食事は済ませたか？」

「いや、ここに来た時はまだ昼には早かったからな。」

面くらいなながらも答えるジーク。ちなみに、今は正午をやや過ぎたほどだが、待たされたことについての怒りはない。

「そうか、それなら昼餐ちゆうばんに招こう。仕事の話はそのあとでいいか？」

「構わない。国王たちも一緒か？」

「ああ。厳密に言えば、今回の依頼主は私と父上の両方だしな。」

そう言って歩き出すランデイスに、二人は黙って従った。

29話 昼餐

奇妙な光景だった。その光景に違和感を感じないことが、特に。談笑をしながら食事をしている6人。

4人は大国ラティルド王家の者。王と王妃、その子供である王子と双子の姉である降嫁した元第一王女にして現ファミルス侯爵夫人。

現王ガイオスⅡウルクリフⅡフルストⅡサンⅡラティルドは生粋のラティルド人の特徴である褐色の肌と、王家特有の金の髪、琥珀の瞳をしている。

その隣に座る王妃シェライナⅡフルストⅡサンⅡラティルドは異国の出身らしく、白い肌と藍色の髪、雨上がりの森のような鮮やかな翠の瞳。

2人の血を受け継いだ双子の姉弟は、容姿も等分したかのようだ。元第一王女ジルヴァーナⅡカイザリーⅡファミルスは褐色の肌に藍色の髪。王族の証である琥珀の瞳は強い光を放ち、しなやかで美しい、野生の黒豹を連想させる。実際なかなかのお転婆らしく、弓の腕前は国でも随一らしい。対照的に白い肌のランデイス王太子は、王よりも濃い目の金髪。琥珀の瞳に宿る光は姉姫よりも穏やかに見えるが、その底には冷酷な、為政者の意志が感じられる。

ちなみに、ジルヴァーナの名字がサンⅡラティルドでは無くファミルスなのは、彼女が幼馴染の臣下に降嫁しているからだったりする。つまり、彼女は既婚者だ。

（ただし、王族の血を引いているのは確かなので、彼女に限りカイ

ザーリを名乗ることが許されている。」

残りの2人は、薄汚れた旅装の青年と少女。セリスとジークだ。注目すべきは、流れの傭兵である2人が王族と遜色無いほどに洗練された作法を身につけている事。そしてそれが、ごくごく自然であることだ。

それは、2人が付け焼き刃でなく、礼儀作法についてきちんとした教育を受けたことを示している。

流れの傭兵に不似合いなほどの教養について、同席する4人は疑問は持つてもそれを口に出すことはしない。

代わりに話題に上るのは、ここにはいない他の王族のことだった。

「久しぶりにジークやジルと食事をするわねえ。それに可愛い女の子ともお近づきになれたし。」

料理は口にあっただかしら、セリス？」

「はい、とても美味しいです。特にこの、スープの味付けがシンプルなのに絶妙で。」

「ふふ、後で料理長に伝えておくわ。それにしても、残念ねえ。他の子たちにはいつセリスを紹介しようかしら。」

第二王子アストファルは他国へ留学中。第二王女ミュリエルと第三王子ルディールは、王立学院に通っているため、欠席していた。

その隣のジークはジルヴァーナに捕まっている。

「ああジーク、二年前に行方不明だったそうだけど、腕は衰えていないね？後で付き合いなさい。」

「相変わらずだなあんたは。まあ、師匠にも顔を見せるつもりだし、そのときでいいだろ。」

好戦的な第一王女に呆れつつ、ジークは了承する。どうせ毎日のように近衛の訓練にでも飛び入り参加しているのだろう。彼女の夫に少しだけ同情した。

「師匠って、ザリアスさん？あの人ここに居るの？」

驚いたのはセリス。彼女の知るザリアスは、こんな城シティアに滞在するのは性に合わないはずだ。

セリスの疑問に答えたのはランデイスだった。

「《大侵攻》以降、彼は傭兵を引退してね。今ではここで將軍の地位に就いてもらっている。

復興のドサクサに、貴族の整理をしてね。余った土地や浮いた地位を、復興に力を貸してくれた人達にあげたんだ。ほとんどが傭兵や商人などの平民だったけど、信用のできる人たちばかりだったから。

まあ、うまく逃げられてしまった人もいるけれど。ねえ、ジーク？」

セリスが隣のジークを振り仰ぐと、淡々と食事をしているだけで、惜しいと思っている様子は無い。

『サラティルドの宝石のお姫様はジークにご執心でね。それを知ってた王は地位と一緒に、お姫様も授けるつもりだったらしいよ。』

ジークはルースをとったけど。

いつかに聞いた、エイギルの言葉が甦よみがえる。

「ちなみに位は？」

「侯爵だね。」

「大盤振る舞いですね。」

王家の血を引かない貴族の中では最も高い。傭兵に授けるには高すぎるだろう。

冷静にそう判断したセリスに、ランディスとジルヴァーナの視線が突き刺さる。

「なんですか？」

「いや、なにかリアクションが無いかなー、と。勿体無い！って叫ぶとか。ねえジル。」

「そうそう、実際当時は大騒ぎだったのよ？英雄って呼ばれていたとは言え、まだ残ってた目障りなのが『傭兵風情に！』って大暴言で、ジークがそれを辞退したらまた、『傭兵風情が！』って。ほんど語彙少ないわよね、ああいう手合いつて。」

「で、その暴言を理由に位下げたり没収したりして、最後の掃除をしたんだよなあんたら。」

似てないくせに、楽しげに話す表情がそっくりな双子にジークが水を差す。

だが、それをきれいに無視して2人はセリスに迫る。

「で、なにか無いの？感想とか。」

「え？だから、大盤振る舞いだな、と。」

「ああもつそうじゃなくてー、こつ、なんと言つか。」

曖昧な言葉から言いたいことを読み取り、ああ、とセリスは納得する。

「地位とルースを天秤にかけてルースを選んだのも、その結果貴族という特権を捨てたことも、全てはジークの考えですから。過去のことにわたしは口出ししませんよ。」

まあ、だからと言ってジークが魑魅魍魎跋扈し、権謀術数渦巻く世界に飛び込むようなことを、諸手を挙げて賛成することはありませんが。」

こつこり

言い換えれば、セリスからジークに仕官を勧めるようなことはしない、ということだ。

……………ずいぶん言い方だが。

さすがに頬を引きつらせた双子だったが、王妃の「今は食事中よ？」という台詞と、迫力の笑顔によって退いた。

サラテイルド王家における力関係を、セリスは知ったのだった。

30話 商談

食事が終わると、用事があると王妃とジルヴァーナは去っていった。

これから仕事の話に入るとわかっていたジークは、隣のセリスに「どうする？」と問いかけた。

「んー、このデザート美味しいし、もうちょっと楽しみたいな。」

とぼけた言い方だが、つまりは残る、ということ。

普段は侮あなづられるだけで居ても利点は無いと席を外すことが多いのに、珍しいことだ。

「では、場を変えるか。」

「あら、その必要はありませんわ。」

ガイオス王が言うと、セリスはにっこりと笑った。

それから、懐から取り出した手のひらほどの大きさの水晶玉をテーブルの上に置く。

スツとそれに指を乗せ、魔力を流した。

フワリ

その場に居た三人は僅かな風を感じた。しかし、変化は無い。当人以外に、理解していたのは一人だけ。

「さすが。見事だな。」

「ありがとう。」

ジークの目には、糸のように細い魔力で編みこまれた結界が見えていた。しかも、感知されないように偽装まで施してある。

状況を把握できない2人に防音の結界を張ったことを説明し、セリスはにこやかに宣言した。

「それでは、お仕事の話をしましょうか。」

「私が王太子ということはずでに言ったと思う。だが、それは正式なものではない。」

真剣な顔でランデイスは話を切り出した。

ここは正餐用の広間ではなく、あくまで内輪での食事会を想定した部屋らしく、それ程広いわけではない。なので、相手の表情がよく見える。

そこにあつたのは、紛れも無い君主の顔。

自らが背負うものの重みを知り、それでも背負う覚悟を持っている。

そして、本物の覚悟を持っている人物がセリスは嫌いではなかった。

このとき、セリスはジークの相棒としてではなく、義理でもなく、自らの意志でこの依頼を完遂することを決めた。思わず笑みが零れる。やっぱり人間は興味深い。

「存じています。確か、宣言を出そうとしましたが、肝心の儀式の準備が大侵攻によって中止になってしまったのでしたよね。建前上は延期ということになっていたはずですが。」

そこまで知っているのかと王と王太子（仮）の視線がセリスに集中するが、セリスはその反応が理解できず、首を傾げるばかり。

そのフォローにまわったのは、やはりというべきか、苦い顔をしたジークだった。

「セリス、ランデイスが王太子になること、儀式が三年前に行われるはずだったことは誰に聞いた？」

「もちろん、オウルよ？」

きょとんとした表情での返事に、ジークは脱力した。

片手で顔を覆い、しばらく動かない。

どうしたのかとサラテイルドの高貴な2人が顔を見合わせる中、溜め息交じりの呟きだけが零れ落ちる。

「その情報源だけで、おかしいと思えよ……。」

幼い頃に戻ったかのような口調に、セリスはジークの顔を覗き込んだ。

もう一度息を吐き出し、ジークは顔を上げる。

その表情は脱力する前と変わっていないかった。

そう、見えた。セリス以外には。

「あのな、世間から見れば、ランデイスはまだ、最有力王太子候補なんだよ。まだその地位に就くことが確定していないって事になっているんだ。まあ、王太子の地位は確実と見なされているから、そ

う接する人間のほうが多いけどな。

だが、こいつが王太子確定だと知っているのはサラティルドの王族と重鎮、大侵攻で彼らに接することが多かった俺たち傭兵。あらかじめ儀式への招待状を送っていた国の上層。それにオウルみたいに独自に情報を集めている奴くらいだろう。

つまり、ラティルド王家の王太子継承について明確に知っているということは、只者ではないって言うことと同義なんだ。」

納得したセリスは、元の席に着いた。

ジークの説明を聞き、王族2人は件の『オウル』という人物は情報屋か何かなのだろうと推測した。

情報売り買いする職業はさほど珍しくない。特に傭兵にとっては各国の情勢を知る最も確実な手段といえるので、ジークやセリスが知っていてもおかしく無い。

ジークは2人にそうとられる様に誘導していた。

「話を脱線させてしまってすみません。どうぞ続けてください。」

「あ、ああ……。」

セリスに促され、今度は国王が口を開いた。

「大侵攻の被害によって長らく王太子継承の儀は延期されてきた。

だが、大侵攻からもう二年が経つ。サラティルドが完全に復興したことの証明もかねて、盛大に行おうと思つてな。」

「それはおめでとうございます。」

けして間違っていないはずなのに、微妙にピントのずれたセリスの反応に、王は困惑した視線をジークに向ける。

しかし、帰ってきたのは気にするな、話を続けるという無言の催促だった。

「あー、ゴホン。それで、そなた達への依頼というのは、実は、二つある。」

1つは、儀式における警護、及び儀式への出席。

もう1つは、我が娘、ミュリエルの式典開催中の警護だ。」

王の言葉への反応はそれぞれだった。

キョトン、としているのがセリス。

一瞬であからさまに機嫌を急降下させたのがジーク。

ランデイスは予想通りというように苦笑いしている。だが、このままではまずいと説明をかってでた。

「ジーク、勘違いするな。今回のことはミュリエル自身とは関係ない。」

ただ、これを任せられる人物、というのがお前しかいなかったんだ。」

この言葉に偽りはないと判断したらしい。

刻々と増していたジークの怒りのオーラが、ひとまず収束した。ひとまず胸を撫で下ろし、話を続ける。

「実は、ミュリエルの結婚が決まった。だが、問題があつてな・・・

結婚の相手自体には問題がない。ミュリエル自身も納得しているしな。しかし、求婚を断られたとある王子　　すまないが、名は伏せさせてもらおう　　が諦められず、ミュリエルを狙っているという情報が入ったんだ。」

眉をひそめるジークとセリス。

だが、今は無言を貫くことにした。

「情報だけで尻尾は掴めていないが、式典の間を狙ってくることは大いに予想できる。その間だけは人前に出たり夜会に出ることは避けられないからな。」

「その、とある王子の名は教えてもらえませんか？」

セリスが口を挟んだ。口調が変わり、目も据わっている。

思い通りにいかないからと癩癩かんしゃくを起こし、強硬手段をとる様な輩が、セリスは大嫌いなのだ。

それを知っているジークは、今回の依頼の決定権がすでに自分に無いことを悟った。

せめて、ランデイスが計画者の名を明かさないように願う。

「まだ特定できていないんだ。ただ、名が挙がっているどの人物も、妹を嫁がせたくないと思う程度には評判が悪い。」

不機嫌そうなランデイス。ふと見れば王も同様だった。

正直、セリスもジークも気分がいいとは言えない。女性であるセリスは特に。

こみ上げてくる不快感を飲み下し、セリスは確認する。

「つまり、1つ目の依頼は表向きで、本命はもう1つ、ということ

「ですね？」

「察しが早くて助かる。」

依頼の内容は聞いた。

どうする？とジークはセリスに視線で問う。

もちろん、セリスは輝く笑顔で。

「この依頼、お受けしましょう。」

こうして、契約が交わされた。

30話 商談（後書き）

久々にセリスの「常識外」を出しました。

普段の態度が大人びているので、ついつい忘れてしまっただすよね。

総合評価も200ptを超えました。

評価してくださった方、ありがとうございます!!!

31話 セリス

「ところで、式典までは俺たちは城に居たほうがいいのか？」

報酬などの条件を詰めた後、思い出したようにジークが言い出した。

確かに、ジークが街にいたら大騒ぎは確実だろう。

「2人は、我の賓客としてこの城に滞在してもらおう。」

最初からそうするつもりだったのか、王の答えは早かった。

だが、セリスがそれに否を唱える。

「それでは目立ちすぎます。城に滞在するのはいいですけど・・・
・そうですね、できれば王太子殿下の客としてでは駄目ですか？」

「可能だが、目立つか？」

「当然でしょう？国王が英雄と名高い傭兵を呼び寄せ、客として迎え入れるなんて、何かあった、またはある、と注目されますよ。」

その点、王太子殿下でしたら大侵攻時代の戦友を呼んだだけだとか、何とでも言い繕えます。陛下と、事実は異なるといえど、表向きは王子の一人にすぎない殿下。それだけで周囲の目は大分違うでしょうから。

王女の護衛という、あまり公にいたくない仕事がある以上、注目だけ避けるべきでしょう。」

「そうか、では部屋はどうする？」

セリスの洞察力に感心しながら、さらに意見を聞いてみる。それに答えたのはジークだった。

「王族の居住スペースに近い場所に二部屋。できれば隣同士で。どうせ後で他国の王族などが来るだろうから、動かなくていいようにあまり豪華な部屋は止めてくれ。」

確か、お付きの従者用の部屋があつたよな？そこか。」

英雄を従者として遇することなどできる訳が無い。とんでもない提案をしたジークを、セリスが横からたしなめた。

「あなた相手にそんなこと出来る訳無いでしょう？相手の立場も考えなさい、ジーク。」

まあ、ジークの提案は論外としても、これだけ大きい城です。条件に合う、適当な部屋はありますよね？その中から用意してもらえればいいです。」

王が頷いたのを見、セリスはにっこりと笑う。

そうして、これでこの話は終わり、と無言で示した。

だが、まだ消音の結界を解かない。

怪訝な顔をする王族2人に、セリスは穏やかに声をかけた。

「ところで、1つお願いがあるんですが。」

「なに？」

王の眉が片方跳ね上がる。ランデイスも鋭い視線をセリスへ向けた。

ジークはチラリとセリスを見たが、何も言わずにいる。

先ほどとは異なる張りつめた雰囲気の中、セリスは変わらぬ様子で「お願い」を口にした。

「城内を歩く許可が欲しいんです。」
「は？」

少々身構えていただけに、その他愛無い「お願い」に拍子抜けしたランデイスの口から、間抜けな声が漏れた。
それを気にすることなく、セリスは言葉を重ねる。

「もちろん、宝物庫や武器庫、その他王家の秘密に関わるような所に入らせて欲しいという訳ではないです。ただ、今のわたしはジークの相棒という肩書きしかないので、自由に歩いていたらきつと咎められると思います。だからせめて、自由に歩き回っていて良い、という証が欲しいんです。」

本当に些細な願い。一言言えば、叶えられてしまう程度の。
だが、王はそれに何かを感じた。

「良いだろう。しかし、条件がある。
なぜそんな許可が欲しいのか、理由を訊きたい。」
「父上？」

何か含むものを感じたのか、訝しげなランデイスを無視し、王はセリスを見つめる。
刺すような視線の先で、セリスはゆっくりと笑みを浮かべた。

うつくしい

その場にいた誰もがまずそう思った。
いまだ幼さの残る少女を見て。

だが、それは長くは続かない。
次に訪れたのは『怖れ』だった。

見た者の心を瞬時に絡めとる笑み。
それは人が浮かべることの出来るものではなかった。

悪魔、天使、神、妖精……

そのどれにも見え、だがそのどれでも無い笑み

その笑みが引き起こすのは『畏怖』という呪縛

その場の視線を釘付けにしながら、極自然にセリスは言葉を紡ぐ。

「この地の主に会いたいですよ。」

人外の笑みを浮かべて、なんでも無いことのように。

「我ではなく……か？」

「本気で言っているのですか？」

あなたは確かにこの国の主であり、この城の主です。
だが、ことこの地に関しては主はあなたではない。

それこそ建国以前から、この地は『彼女』のものだったはずだ。

「『あの方』を知っている、そなたは……何者だ。」

つばを飲み下して干上がった喉を潤し、何とか言葉を搾り出した王の様子を知らぬふりで、セリスは答えを返した。

「ご存知でしょうか？ジークの相棒で、ただの傭兵ですよ。」

彼女とは古い知り合いで、まあ、『同属』どうぞくということになりますね。」

「な……。」

「今のわたしは『彼女』に招かれない限り、会うことができません。わたしが訪ねて来ていることも気付いているかどうか。」

だから、『裏道』を使つてこちらから会おうかと思ひまして。

ああ、彼女が本気で拒否すればどうしたって会うのは無理なので許可を出したからといって彼女の機嫌を損ねるといふことはありませんよ。」

鮮やかな笑みを崩さないセリスに、王は許可を与える他無かった。言質を取れたことで、セリスは魔女の笑みを引っ込める。

手早く結界を解いてテーブル上の水晶玉を回収すると、トン、と椅子から降り、スタスタと扉へ向かうセリス。黙つてそれに従うジーク。

無言で退出しようとする2人に、呪縛から何とか逃れたランデイスが慌てて声をかけた。

「これから何処に行くんだい？」

「会うべき人に会つて、その後は適当に城内探検でもしています。」

「そうか。ジーク、気が済んだらセリスと一緒に私の執務室へ来てくれ。部屋に案内させる。話したいこともあるしな。」

「わかった。」

悠々と出て行く二人を見送り、国王は大きく息を吐き出した。

「只者ではないだろうと思っていたが、『あの方』と同じ存在とはな……。」

「父上、その『あの方』とは？それに彼女は……？」

「今は私からは言えない。正式に王太子となるまではな。どうしても知りたければあの二人から聞き出すことだ。」

「……わかりました。」

しびしび、ランデイスは引き下がった。

「良かったのか？あんなことを言って。」

先を歩く少女に、ジークは声をかけた。

「大丈夫よ。ここの王家は繋がりが長い分、私達のことをよく理解しているから。」

それに、利用しようなんて考えれば、彼女が黙っていないし。」

そう言いながら迷い無く進んでいくセリスを見て、ふと疑問がよぎった。

「セリス、さつきからどんどん進んでいるが、この城の道順覚えているのか？」

「まさか。中に入るのも初めてよ。」
「オイ。」

慌てて現在地を確認するジーク。

この城は広い上に侵入者対策で入り組んでいるため、気を抜くとすぐに迷ってしまうのだ。

「大丈夫よ。これから訪ねる場所はここであってここで無い場所。さっきの結界で向こうもわたしが来ていることは気付いているでしょうし、今の状態も承知しているから向こうから招いてくれるわ。」

「お前の家みたいにか？」

「そうそう、ほら。」

彼女が指さす先を見ると、城のとは異なる意匠の扉が1つ、でんと佇んでいた。

不思議なことに、その扉には取っ手が無い。

ジークがいぶかしんでいると、ス、とセリスが扉に手を添えた。

彼女が触れると、扉は1度光を発してから、消え去る。

その先には、闇が渦巻いていた。

「さあ。」

促され、ジークはセリスの手をとる。

そうして2人は闇の奥に消えた。

2人の姿が消えると、扉の輪郭が揺らいだ。

そして、次の瞬間、そこには扉は無く、ただ壁のみがあった。

32話 対の魔女

「いらつしゃい」

闇を抜けると眩しい光と共に声がかげられた。

光が目を射り視界がきかないにもかかわらず、咄嗟にジークは声の主を探す。

そして、視界が回復すると同時に啞然とした。

そんなジークに構わず、瞼を降ろして視界を守っていたセリスは、この空間の主に進み寄り、抱きついた。

「本当に久しぶりね、シェイナ」

「ええ、こうして直に会うのは何十年ぶりかしら」

「仕方ないわ。お互い、おいそれと自分の地を離れられる立場では無いもの」

互いを抱き締めあいながら、親しげに話す二人。

しかし、ジークの耳にその会話は入っていなかった。呆然としている彼の視線の先にいる少女と女性。

二人は姉妹と言われれば即座に納得できる程によく似ていた。

いや、似ているという言葉では追いつかない。

ジークの良く知るセレスティアは、夜が明ける寸前の紫水晶アメジストの瞳と、月光を紡いだかのように、真直ぐな銀髪をした、一見清楚で儂げな美女だ。

対して目の前にいる女性シェイナは、晴れ渡り澄んだ蒼穹の瞳と、眩しい日差しを連想させる豪華な黄金の巻き毛も華やかな美女だ。

そんな色彩も印象も正反対の2人。

なのに、その姿かたちは……双子のように瓜二つだった。

楽しげに話していた女2人は、絶句しているジークに見分けのつかない笑みを向けた。

「そんなに驚かないでよ、ジーク。私と彼女が『対』であることは言っていたでしょう？」

「まあまあセリス、私と彼は一応初対面なんだから、まずは自己紹介をさせてよ。」

一応、その言葉が示すのは『あの時』のことだろうか。

ジークの脳裏に、自分の無力さを噛み締めた、苦い苦い記憶が甦よみがえった。

そんな彼の葛藤を気にせず、シェイナは近づく。

スツと手を差し出し、サラリと尋ねる。

「そうなってから、魔女に会うのは初めて？」

その言葉にハツと我に返り、ジークはシェイナの前に膝をつく。

作法にのっとり差し出された手を取り、頭は下げずに相手の顔を見上げる。

「我が名はジークフリード。《月の守護者》。世界の神子にご挨拶申し上げます。」

そしてシェイナの指先に口付けた。

クスリと笑ったシェイナは「よくできました」と口の形だけで伝えようと、ジークが口付けた指先を彼の額に当てた。

「我が名はシェイナ。《陽の魔女》。我が対の守護者たる汝に祝福を。」

触れられた額から、じんわりと温もりが広がる。

シェイナの指が離れると同時にスツと立ち上がると、セリスが寄って来た。

なんだか拗ねている気がする。今の幼い容姿も手伝い、思わずジークはセリスの頭をなでる。

ペイツと振り払われた。

釈然としない気持ちで振り払われた手を見下ろすジーク。

と、「クツクツクツ……」という押し殺した笑い声が耳に入った。

「……シェイナ」

怒りやら何やらを抑えつけたセリスの声が引き金になったのか、今度は爆笑し始める。

涙まで浮かべて笑う姿は、はっきり言って美女が台無しだった。

「いやっ……ごめ……だって…………プフッ」

懸命に何かを言おうとするが、笑いで切れ切れになって正直意味不明だ。

セリスはしばらく睨みつけていたが何かを諦めた様子で、はあ、と溜め息をつく、勝手にお茶をいれはじめ。

二人分いれると、ちよいちよいと手招きされた。

「ああなつたら長いから、先に頂きましょう。」

お茶菓子を探し出し食べ始める姿は、物凄く馴染んでいた。

とりあえず原因不明の不機嫌はおさまったらしいので、言われた通りに席に着く。

甘い香りは、乾燥させた果物らしい。尖った渋みが果物の甘みでまろやかになっている。シェイナの自作だろうか。

お供の焼き菓子にも果物の皮を砂糖漬けしたものが入っており、控え目な甘さの生地と良く合っている。

もしシェイナの手作りだとしたら、彼女は意外に家庭的なのだろうか。

そんなジークの思考を読んだのか、セリスは短く一言。

「これ、シェイナの使い魔作。」

「は？」

使い魔という単語に、懐かしき家で留守番をしているはずのセリスの使い魔たちを思い浮かべる。

色々と器用な奴らだと思っていたが、それでも料理はしなかったし、出来なかつたはずだ。ましてやお菓子作りなど。

「彼女は力が強いから、人型になれるの。それに好奇心が強くて凝り性でね。昔シェイナが遊びに来た時に、お茶の淹れ方やお菓子の作り方を教えたのよ。」

そうしたら自分で色々研究して、今じゃこの通り。」

今ではシェイナを訪ねる時の楽しみの一つである。

「そーそー、あの子ったら主の私よりセリスに懐いちゃって。まあ、お茶もお菓子も美味しいから許すけれど。」

やっと笑いを収めたシェイナが会話に加わった。

シェイナの分の茶を淹れながら、さりげなくセリスは訂正する。

「懐かれたのは否定しないけれど、シェイナより、は間違いね。

だってあの子は、シェイナに喜んでもらうためにがんばっていたんだから。」

「わかつているけどねー、やっぱり複雑なものがあるわよ?」

そんな風に他愛無い話をして、笑いあう。それはありふれたお茶会風景に過ぎない。

ただ、そこに集う顔ぶれゆえにただのお茶会では終われない。

「で、その身体の調子はどう?」

朗らかな笑顔から一転して、真剣な表情でシェイナはセリスに問う。

セリスも隠すことなく答える。

「これ以上の時間の逆流は抑えてる。ただ拮抗してるだけだから、魔力を使いすぎると危ういわね。」

月が満ちれば余裕ができるけど、新月なんかの危ない時はジークから魔力をもらって凌いでる。」

「やっぱり解呪は……。」

「ええ、今の私じゃ無理。だけど属性から言ってシェイナでも無理。他の魔女では力量的に無理。」

だから解呪の方法は二つ。術者である『彼』が自分で解くか……

・術者を殺すか。」

溜め息をついて首を振るセリス。

「今は彼の消息がつかめないから、情報収集をしながら呪の緩和の術を探してる。」

現状はそんなところかな。」

「そう……。」

セリスにかけられた呪はあまりに複雑で、長き時を生きる魔女といえどおいそれと手を出せる代物ではない。技量から言っても、適正から言っても解呪できるのはセリスだけだろう。

故意かどうか知らないが、そんな呪をかけた人物に怒りがつのる。それが憎しみに変化する前に、慌ててシェイナは胸の内に凝る感情を散らした。

ただ、冥い瞳だけは隠さず、セリスを見据える

「1つだけ言わせて、セリス。」

あなたは優しいから、長年の友を手にかける事は辛いかもしれない。でも、決して自分の命を捨てるようなことはしないで。

もし、どうしても手を下せないというならば、私を呼んで。」

残酷で、優しい言葉。

それに答えることはせず、セリスは切なげに微笑んだ。

ジークの体も完治し、体力も戻ってきたある日。

「ジーク、出かけるわよ。支度して。」

「は？」

いきなりなセリスの言葉に、ジークはポカンと口を開けた。

「なあに？その反応。あなた今、すっごい間抜けな顔してるわよ。」

可笑しそうに言うセリス。それでもジークは返事をしない。

ジークはセリスの言葉の意味を掴めずにいた。

ジークの反応も無理は無い。彼がセリスの家で暮らし始めて数ヶ月。その間、ジークが体験したセリスの生活は、まさに世捨て人が隠遁者のそれだったのだ。

朝起きると菜園から野菜を収穫し、それで朝食を作って食べる。

後片付けはジークの担当だ。

昼間では互いに思い思いに過ごす。ジークは読書か体力づくり。

セリスはジークと読書だったり、森で薬草を採取したり、それを加工して薬を調合したりと日によってまちまちだ。ただし、買い物など、人里に下りることは一切無い。

午後はジークの魔力の修行に付き合い、夜は外で月光を浴びながらジークと話をしたり、星を眺めていたりする。

セリスの住居は人の姿など感じられぬ、鬱蒼うつそうと茂った森の中。険しい岩場などもある、恐らく険しい山の、奥深くであろう場所。ジークがここはどこかと尋ねても、『この世であってこの世で無い場所』とはぐらかされる。

だからジークは、セリスは人間と関わりたがらないのだと思っていた。

そんなセリスが突然出かけると言い出したのだ。いつもの散策ならそう言うだろう。ということは、少なくともこの森を出ることは間違いない。

呆氣にとられているジークを尻目に、セリスはウキウキした様子で指折り用事を挙げていく。

「まずは服でしょ。食器と家具も必要だし、後は……」

「わかったわかった。で、何が必要かな？ 目的地に着くまで何日くらいかかる？」

「え？」

「ん？」

ジークは記憶は無いが、常識は残っている。

自分がどこの誰かは思い出せなくとも、野宿のやり方は覚えている。

自分が今までどのようなように過ごしてきたかは思い出せなくとも、旅のやり方は解る。

この違いがどこにあるのかはわからないが、このことによりセリスを質問攻めにする事も無く、役に立ってくれている。

ただ、セリスと生活していると、時々無性に不安を感じる。
そう、今とか。

「なに？コレ。」

「転移陣よ。」

あっけらかんとした返事。

ただし、この間読んだ本には転移陣は発動に上級魔法士が最低3人、維持にはその倍必要だと書いてあったような。

頭痛をこらえながら、ジークは話を続ける。

「……ゴメン、訊き方が悪かった。コレはどこに繋がっているの？旅って普通、徒歩やら馬やら馬車で移動するものじゃあないの？」

「何よそれ。そんなのじゃあ、一生かかったってこの空間ココから出ることなんて出来ないわよ。」

それと、行き先はムスペルの帝都リーベモント、シルヴェスト城ね。」

「って、あの『青月城』？」

飛び出したのは、サラテイルドの黄金宮と並び称賛される場所。だがそれよりもまずジークが思ったのは。

「目的地が城ってどういうことだよ……」

彼も、なかなかズレた所があるようだ。

シルヴェスト城はあえて言うなら純白の城だ。

さらに、湖の上に建っていることでその神秘性は増している。まあ、実際は湖の真ん中にある小島の上だが。

湖に太陽の光が乱反射し外壁に光の波を打つ姿も美しいが、その真価は『青月』の名の通り、夜にある。

星明りを映し出す湖面。月に照らされ浮かび上がるシルヴェスト城は、まるで夜空に浮かんでいるようだった。

優しい月光によってうつすらと青を帯びた姿は、まさに、幽玄の美、という言葉がふさわしかった。

彷徨う詩人 ルーエ

ナ 「慨歎記」より

ジークはぼんやりと、以前読んだ内容を思い出す。あの本の著者は詩人としてはヘボだがわかりやすく、旅行記としてはなかなか興味深く面白かった。

ただ、あれに書かれていたのは外側だけで内側については全く触れられていなかった。たぶん中に入ることが許されなかったんだろうが、もし入れていたら、今自分がいるのが城のどこなのか、わかったのだろうか。

「ジーク、呆けてないでお茶をいただいたら？王室御用達だけあって、美味しいわよ。」

ジークの懸命な現実逃避は、セリスの無邪気な一言で台無しになった。

少しだけ、彼女の無神経さに苛立ちを感じたが、ジークがキツと睨んだ先でニコニコと笑っているセリスを見るとそれも萎んでしまった。

しぶしぶ目の前に置かれたカップを見つめる。優美な曲線と眩しい白さ、繊細な絵柄はそれがまぎれも無く高級品であることを悟らせた。

恐る恐るそれを手に取り、そっと口をつける

「あ……美味しい。」

一口味わった途端、思わず声が出た。渋みのある香りと、爽やかな味わいが絶妙だ。

茶葉と、これを淹れた人の腕が良いのだろう。茶道楽なセリスが誉めるだけあると納得した。

「本当、今年は当たりね 後でお土産に包んでもらおう」と

よほど気に入ったのか、浮かれているセリス。
そんな彼女の姿に苦笑するジークは、先程まで感じていた緊張がすっかりほぐれている事には気付かなかった。

「セリスツツ！！！！！！！！！！」

突然響いた声と同時にボタン！！と勢い良く扉が開け放たれ、何かが部屋へ飛び込んだ。

そのまま駆け寄ってくるそれに、セリスは1本だけ立てた指を向ける。すると、セリスが『止めた』のか、少年が自ら足を止めたのはわからないが、それはピタリとセリスの前で立ち止まる。そして、満面の笑みを浮かべて抱きついた。

「久しぶりです、セリス！！来てくれたのなら早く言ってください！今回はどれくらいここに滞在してくれるんですか？僕との時間もとってくださいよね！？それに……」

立て続けの質問は、セリスが相手の目の前に手のひらを掲げた事で遮られた。

「オウル、歓迎してくれているのはわかったけれど、それでは駄目でしょう？」

たしな
窘められた相手はハツとし、決まり悪げな顔で笑うと打って変わった優雅な仕草で頭を下げる。

「お久しぶりです、古の魔女殿。我らが城へようこそ。貴女の訪れを建国の時より変わらず、歓迎いたします。」

そう言うつと差し出されている手をそつと取り、恭しく口付ける。

セリスの隣で目の前のやり取りを呆気に取られて見ていたジークは、ここでようやく闖入者が少年である事に気付いた。

背は座っているセリスより少し低い。ということは、ジークと同じ位、いや彼より少し高いくらいだろうか。薄い水色の髪に濃い灰色の瞳をした整った顔の少年だ。身に着けているものも、かなり上等。

位の高い貴族の子、とジークは推測した。

ジークの視線に気づいたのか、少年は彼を見て訝しげな顔をし、ジークがセリスの袖を引いて彼女の注意を惹くのを目にして顔色を変えた。

「セリス、そいつ誰？」ですか！？」

綺麗に声が重なり、2人は思わず睨み合う。セリスはというと、目を丸くしたと思ったら次の瞬間、噴出していた。

軽やかな笑い声を上げる彼女に、再び二方向から「セリス！」という抗議が向けられる。

何とか笑いを収めると、セリスは少年達に謝った。

「ごめんごめん。あんまりにも息ピッタリだったのが、可笑しくて。」

「涙を拭いながらじゃ全然説得力無いよ。それよりも、説明。」

ぞんざいなジークの言葉に、少年は声を荒げようとしたが、セリスによって止められた。

「いいのよ、オウル。」

ジーク、彼はオウル。この城に住んでいるの。

彼の一族とわたしは代々懇意にしているね。その関係で時々こうして訪問するの。」

「うん、質問が増えるだけなそれを説明と言って良いものか疑問だけど、まあ良いや。そこらへんは後で聞かせて。」

もうどうにでもなれと投げやりなジーク。だが、1つだけ確認しておかなければならない事に気付いた。

「この城に住んでいるってことは、こいつは……。」

「ええ、そうよ。お父さんはこの城の主でこの国の主。つまり、この子はこの国の王子様ってこと。」

「へえ、王子って初めて見た……のかな？物語の王子とは全然重ならないけれど。」

「何だそれは！？セリス、この無礼な奴は何なのですか！？」

「ハイハイ静かに。彼はジーク。私の家の近くで倒れている所を助けたの。それから色々あって、今は私の弟子として一緒に住んでいるわ。」

「な……！！！」

目をむいて絶句したオウルに、セリスはさらに言葉を重ねる。

「たぶん2人は同じ年頃だと思うから、仲良くしてね。」

それじゃあ、わたしはあなたのお父上に会って来るから、その間ジークにこの城の案内でもしてあげて。」

そうしてさっさと部屋を出て行くセリスを見送り、残った2人は顔を見合わせる。

「まあ、とにかくよろしくな、オウル。」

ジークはそう言って握手をしようと手を差し出したが、返ってきたのは「気安く呼ぶな!」という、非友好的な言葉と視線だった。オウルは、諦めたように手を下ろすジークを睨みつける。

「おまえ、どこの手の者だ!!オレですら許されなければ辿り着く事の出来ぬあの場所に侵入した上、住むことを許されただ!?!一体、何を企んでいる!?!」

苛烈な言葉にパチクリと瞬いたジークは、これが地か、と思いなから肩をすくめる。

「何者って言われても・・・憶えていないから答えようが無い。ついでに何も憶えていないから、何も企みようが無い。
侵入うんぬんはともかく、居候いこうの件じけんについてはセリスに訊いてくれ。」

と、言うかセリスこそ何者?王様に先触れなしで会えるなんて。「あの方を気安く呼ぶな!彼女は本来ならば、お前など一生かかっても会うこと所か、その存在すら知ることはありえない方なのだからな!」

まあ、お前がどうしても教えて欲しいと言うなら、考えないでもないぞ?」

「別に良いよ。」

腕を組んで尊大に言い放つオウルへの返答は、ひどくあっさりし

たものだった。

「自分で訊いといてアレだけど、僕にとってはセリスが何者かなんで、そんなに大事なことじゃないから。」

彼女は僕の命の恩人で、魔法の師匠。それだけ知っていれば十分だし、それ以上が知りたければ他人ひとに訊くなんてまだるっこしい事なんてせず、自分で調べるだけだよ。」

言い切つてオウルを見やる。彼は腕を組んだポーズのまま、言葉を失っていた。

「それより、城の案内、してくれるの？そつでないの？」

するのなら早く行つたほうがいい。したくないなら別に良いよ。

ここで適当に時間潰しているから。」

言われた言葉に、オウルは我にかえる。世継ぎの王子として周囲に甘やかされていたオウルにとって、自分の地位を知つてもここまです態度を変えない人間はジークが初めてだった。

普段なら「無礼者！」と怒鳴っているはずなのに、そんな怒りはどこにも感じられない。胸の内にあるのは、戸惑いと、好奇心となぜか恥ずかしさと後ろめたさ。

だから、気付いたらこう言っていた。

「セ、セリスに頼まれたんだ、やるに決まってるだろう！ついで来い、はぐれるなよ！……！」

「うん、ありがとう。」

そこから離れた一室。

元気良く歩き出す2人の少年の姿に、セリスは思わず微笑んだ。術を使って様子を見ていたが、心配なかったようだ。

「嬉しそうですね、どうしましたか？」

声をかけられ、目の前に座る人物へと意識を戻す。

「ちょっとね。子供って、機会を与えれば自分で吸収してどんどん成長してくれるから。それが嬉しくて。」

「それは、貴女の新しい子供ですか？それとも……」

「ふふ、秘密。後で自分で確かめると良いわ。」

そういうと、セリスは浮かんだ笑みを隠すようにカップを傾けた。

〈過去〉 4 (後書き)

本編で名前だけでできたオウル君、ここで出ました。(いろんな意味で)ジークのライバルです

にしても、子供らしい可愛さってどこ行った……

33話 師、再会

日が傾き、黄金宮を照らし出す。

斜めに傾いだ柱の影が横切る回廊を、二つの影が歩いていた。

「なあ、あれは一体どういう意味だったんだ？」

周囲に人の気配が無いことを確かめてからジークは隣を歩くセリスに問いかけた。

「あれって？」

「さっきの……あの人の言葉だよ。」

数刻前……

気まずい沈黙を振り払うように、セリスは席を立った。

「今日はここまででお暇させてもらっわ。また来るわね。」
「ええ。あ、そうだ。」

ポイとシェイナから投げ渡されたのは、金の指輪2つ

「それを使えば私が手を貸さなくてもここにこれるわ。念のため、ジークにも1つ、ね。」

その心遣いに感謝して、素直に受け取る。

「^{キーワード}喚起は？」

「^{ウエグ・ツイ・ソーネ・リヒト}【光へ通じる道を】」

「そう、ありがとう。悪いけれど、もう1度道を作ってくれる？」

「良いわ。座標は？」

「私は城に詳しくないし・・・ジークに任せるわ。」

セリスとシェイナに見つめられる中、ジークはしばし記憶を探った。

「・・・確か、王の間の隣に控え室として使われている部屋があったはずだが・・・」

「ああ丁度、周りに人もいないわね。大丈夫よ。」

そう言った時には既に、ここへ来た時と同じ、闇が渦巻く道があった。

魔法士に必要な、詠唱も印も必要ない。意思の力で世界に働きかける、それこそが魔女の力だった。

「それじゃあ、また。」

来た時と同じくセリスの手を取り、ジークが闇へ踏み込む寸前、
シェイナに声をかけられた。

それに込められた想いの響きに、思わずジークとセリスは振り返る。
2人の視線の先で、シェイナはふわりと微笑んだ。

「あなたには、こうして直接会ったらどうしても一言言いたかった。」

そうして次に彼女がとった行動は、ジークの度肝を抜いた。

「ありがとう。三年前、この地を守ってくれて。そして、愛しい私
の子孫こどもたちを助けてくれて。本当に、心から感謝します。」

そうして、シェイナは深々と頭を下げた。

驚いたジークが彼女へかける言葉を見つける前に、セリスはグイ
ッと彼の手を引き、漆黒の空間へ引き込んだ。

「世俗に関わることを嫌い、王にさえ同等かそれ以上の立場を貫く魔女。しかも彼女はセリスの対、つまり古の魔女なんだろう？それが頭を下げるんだ。気になるに決まっているだろう。」

「……言葉通りの意味よ。」
「なに？」

驚きに足を止めたジークより一歩前に出、振り向かず、足も止めずにセリスはただ呟いた。

「ラティルド王家は、彼女の血を引いている。」

それ以上口を開こうとしないセリスに、今はこれ以上聞き出せないと悟り、ジークは追求を諦めた。

しばし無言が続き、2人の微かな足音^{かす}だけが耳に届く。やがて、どこかの中庭に出た。

「あ………」

見覚えのある場所に、ジークの口から声が転がり出る。静かな空気の中で、それは思いのほか響いた。

先程一方的に会話を打ち切ったことを気にしてか、気付かれぬようにセリスはチラリとジークを盗み見る。

しかし、微妙な表情でこちらを見下ろすジークとばかり目が合ってしまった。

再び気まずく目を逸らす2人。それでも歩みを止めずにいると、人の声が聞こえてきた。

「……声？」

思わず呟くと、視線を感じる。ジークが再び、微妙な表情でいる

のを感じた。

近づいていくと、声がさらにはつきりと聞こえてきた。

「うおおおおおおおおおおおお!!!!」

「いえええええええええええい!!!!」

「どおりやあああああああ!!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暑苦しい雄たけびに、セリスの顔が引きつる。

こういふ汗臭さを好む女性もいるのかもしれないが、あいにくセリスはその類ではない。

「ジーク、この先って」

「察しの通り、修練場だ。」

ここで引き返すかどうか、ちょっとだけ迷う。

引き返しても構わない。構わないが・・・・・・・・

「どうする？たぶん師匠がいるが。」

そう、この城にはザリアスがいるのだ。彼の性格から考えて、訓練をしているのを知っていて、黙って見てなどいないだろう。

自分のことを知っている人物。余計なボ口を出す前に挨拶と釘は必須だろう。

「・・・・・・・・行きましょう。一度は会っておかなければならないのだから。」

はたから見れば大げさな覚悟を決めて、セリスは足を踏み出した。

角を曲がって、そつと覗き込む。

思った以上に広い場所のあちこちで、金属を打ち合わせる音が響いている。

その中央で行われている模擬試合に、自然と目が引き寄せられた。見覚えのある、大剣を持った壮年の男性が、相手を次々とのしていく。

武器の重さを感じさせない軽やかな身のこなしもさることながら、何よりも目を惹くのが……

「……楽しそうだな、師匠。」

ジークの呟きどおり、その男性　　ザリアスの全身から溢れる、心底楽しげな気配。

その年齢に似合わぬ子供のような様に、変わっていないと2人は揃って苦笑した。

ジークは二年半、セリスは三年ほど会っていない事になるが、彼が彼である所以は健在らしい。

そうして離れた場所で眺めている2人を、ザリアスのほうが先に見つけた。

「おい、そこに居るのはもしかしなくてもジークか!？」

「いいえ、違います。」

物凄く楽しそうな声に、条件反射で答えるジーク。

修行時代に散々面倒事に巻き込まれ、培われた勘が警鐘を鳴らしている。

しかし、野生動物並みの直感を持つザリアスには通じない。

「嘘つけ！そんな真つ黒な髪、お前以外にいる訳ないだろうが！」

「はあ、いますよ。ここに。」

「あ、あ？」

誤魔化すことを諦めた弟子にずかずかと歩み寄ったザリアスは、ようやくセリスに気付く。ジークの影になって見えなかったらしい。にこやかに笑うセリスをまじまじと見る。

「はー、お前とは違うが、確かに真つ黒だな。にしても、どっかで見た、よう、な・・・」

そして思い至った瞬間、ぎょっと目を見開く。

「ま・・・」

「お久しぶりです、ザリアス殿。セリスです。お忘れですか？」

すかさず驚愕の叫びをさえぎり名乗る。そんなセリスに、ザリアスはパクパクと口を開け閉めするだけだ。

これは驚きだけでなく、セリスがとっさに声を封じたせいでもあるが。

落ち着くのを待って術を解く。

「はあ・・・やっぱり、貴女なんですね、魔女殿。」

「その呼び方はこの地では当てはまりませんよ。今のわたしにもね。セリスで十分です。」

「名前でなんて呼べませんよ、俺には荷が重過ぎる。」

「ではいつかのようにお嬢ちゃんとも。あと、敬語も要りません。」
「皮肉ですか、それは。………わかりましたよ、いや、わかった、だな。」

まったく、その髪と瞳の色はまだしも、若返るなんて、相変わらず非常識だな。一瞬、誰だかわからなかったぞ。
「好きでこの姿という訳ではありませんがね。」

サラリと言われた言葉に重いものを感じて、ザリアスは思わず口をつぐむ。

思わず、それまで黙っていたジークに矛先を向けた。

「で、てめえは二年間も消息不明で何やってたんだ、不肖の弟子。」
「いきなりそれですか。相変わらず柄悪いですね。そんなんで、ちやんとこの城に馴染めてるんですか？」

「うるせえ、契約内容に『言動が無礼でも目くじら立てない』って含まれてんだ。つべこべ言わせねえよ。向こうもそれを利用して色々していたみたいだしな。というか、訊かれたことに答える。」

「黙秘権を行使します、というのは冗談ですから。そんな怖い顔しないでくださいよ。」

一年、あの家に居て、その後は旅ですね。家にいる間も、鍛錬はしてましたよ。」

「よし、なら腕は鈍ってないか、確かめてやる。」

「………師匠、俺は今日、隊商護衛の仕事を終えて、その足で王宮に行き、王族の面々と食事をし、商談までまとめてきたんですよ！？厄介な人とも会ってきたし！いい加減、疲れてるんです！」

「いまさら王族やら何やらを気にするようなか細い神経してないだろうが。」

最近ひよっ子どもの相手しかしてなくて、退屈だったんだよな！。

「それが本音でしょう！？結局自分の欲求優先ですか！？」
「おら、お前ら怪我したくなかったら場所あける」

長身のジークがさらに見上げなければならぬザリアスは、嫌がる弟子を無理やり引きずって訓練場に出て行く。

剣を振るえば周囲のことなどお構いなしな人間が「本気」を出そうとしているのを察知し、皆がさつと場所を開けていく。
ぽっかり空いた中心で、やっと開放されたジークはやれやれと体を解した。

明らかに気乗りしない風情のジークの耳に、ザリアスの声が届く。

「お前はまだ、あの人を追ってるんだな。」

恐らく互いにしか届いていないであろうそれに、知らずジークの顔が強ばる。

それでも、平然を装って言葉を交わす。

「これでも俺は一途なので。」

そうか、とだけ返される。

そして、ザリアスの空気が変わった。

「ならせめて、並び立てるほどに強くないとな。」
「違いますよ。」

ジークがまとう雰囲気も一変する。

「守り、支えられるほどに、です。」

剣を構え、向かい合う。

一拍間を置き、師弟は同時に地を蹴った。

34話 ある一兵士より(前書き)

やや第三者よりの視点です

34話 ある一兵士より

幾度も鋼が打ち合わされる音が続く。

響くそれは鋭く、あたりに漂う空気は剣呑。

その場の全ての事象が、これが『訓練』ではないと声高に訴えていた。

その気迫に吞まれて見ている人々も口数を減らし、ただ息を呑んで戦いという名の舞踏を見つめていた。

視線の先の2人、ザリアスとジークが握っているのは真剣。しかも2人とも防具は軽装だ。

紙一重で避ける、そのタイミングが少しでもずれれば大怪我は免れない。

どちらかが剣を避けるたびに、そこかしこで微かな悲鳴が漏れた。

普段ジークは攻撃力を重視し大剣を扱うが、対人、しかも今回のようにただの試合であればそれは危険すぎる。

よって、普段とは異なる長剣を使用していた。

標準よりも長めの長剣、その重量を利用し、ジークは一気に振り下ろす。

しかしそんな大振りの一撃が当たる訳も無く、あっさりとかわされる。

予想していたジークはさらに振り下ろした勢いを利用して体をひねり、鋭い蹴りを繰り出す。

なにかがギシツと軋んだ音がしたが、ザリアスには届かず、籠手をはめた腕で防がれていた。

受け止められた足に再び力を込め、ジークはザリアスから距離をとる。そのまま直感に従い、剣を横に振った。

ギインツツツと金属音が響く。

退いたジークに、間髪いれずにザリアスが追撃を仕掛けていたのだ。

競り合う2人と、ジークが突然力を抜いた。

ほんの僅か、ザリアスの態勢が崩れる。それを見逃さず、ジークは懐に跳びこんだ。

容赦なくひじを跳ね上げ、顎を狙う

しかし、ザリアスはそのいかつい外見からは思いも寄らない柔軟さでそれを避ける。

そして、お返しとばかりに伸び上がったジークの腹へこぶしを叩き込んだ

「グッ!!!」

たまらず体沈めるジーク。痛みをこらえて身体を動かし、そのまま低い体勢から足払いを駆ける。

ザリアスは後ろに飛び退くことでこれを避けた。

レベルの違いすぎる戦い（既に試合と呼ぶ域でない）に圧倒されていた兵士の1人が、微かな悲鳴にハツとした。

気付けばかなりの人が集まっていたが、とりあえずそれは後回しにし、目的の人物を探す。

彼が探しているのは、先程見かけた少女。

今剣を振るっている《闇夜》と共にいた少女は一見して儂はかなげで、風

に揺れる花を思わせた。

あんな少女にはこの激しい剣戟はきついかもしれない。
ようやく特徴的な黒髪を見つけ出し、近寄る。

「あの……」

大丈夫か、と言いかけて彼は言葉を呑み込んだ。

ビリビリと体に響く気迫、見ているだけなのに剣の切っ先に晒されているかのような戦意。この場にいる誰もが気圧されているのに、目の前にいる少女だけはにこにここと笑っていた。

回廊の手すりにちょこんと腰掛け、ほおづえをついている姿は外見に見合った子供らしい、可愛らしいものなのに、朗らかな笑みだけがその場にそぐわないひどく異質なものだった。

絶句している彼の視線に気づいたか、セリスは視線を合わせて首を傾げた。

「何か？」

「いや、あの、えーっと……」

先に声をかけられて、まだ年若い彼はうろたえる。

動揺の果てに口からこぼれ出たのは

「あの、止めないの……ですか？」

「どっやっつて？」

おっしやる通りです。というか、こんな自分よりも小さな少女に自分は何を言っているのか。

ますますヒートアップしているのを見、途方にくれた顔をする善良な彼を思いやり、セリスは安心させようとした。

「あの、大丈夫よ。あの2人、振り撒いている闘気や戦意はすごいけれど、殺気は全然感じないから。」

逆に言えば、それだけでこの場の人間全てに影響を及ぼしていることになるが。

それに、殺気は無くとも事故が起きる可能性はあるのだ。

「大丈夫」

不安を隠せない彼にかけられたのは力強い言葉。

それを発した少女は今もなお白熱する剣戟から、一瞬たりとも目を離さない。

にこやかな笑みの中で、その瞳だけは真剣な光を宿し、勝負の行方を見守っている。

「大丈夫、生きてさえいれば、どんな状態であろうと全力を尽くしてわたしが癒す。」

はつきりと断言した、幼さの残る横顔をただ呆然と見つめる。

そこに込められた決意、覚悟、そして自信。全てがまだ未熟な彼には計り知れないものだった。

そうして、どれだけ見つめていたのだろう。

今までの剣戟の音より一際高い響き。そして観客たちがどっと声を上げた。

「決着がついたみたい。」

そうして、1度彼に会釈をし、駆けて行く小さな後姿を、彼は見

送った。

後に彼は知る。

このとき言葉を交わした少女が、闇夜と呼ばれる傭兵の相棒だと一緒に話を聞いていた同僚たちが顔を見合わせる中、彼だけはあの横顔を思い出し、深く納得した。

35話 頭が上がらない

「ジーク、ザリアス殿」

「おお、まじよ・・・いや、セリスか。」

駆け寄ってきた少女に、ザリアスは破顔した。

「お見事でしたね。」

「未だ鍛錬は欠かしてないからな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気障に片目をつぶり、誇らしげに答えるザリアスと対照的に、地面に直接座り込んだジークは無言で荒い息を整えている。

「ふふ、弟子は未だ師を超えず、のようね。」

「こちらも、そう簡単に超えさせてやるつもりはないがな。」

そんな二人を恨めしげに見ながら、ジークは何とか立ち上がる並んで立った二人を改めて見、あらあらとセリスは声を上げた

二人の体には、大きな怪我こそ無いものの、擦り傷、打ち身、切り傷と、小さな傷だらけだ。

中には血がにじみ出ているものもある。

「二人とも、治癒を。」

まず比較的軽症のザリアスの傷を癒す。

ザリアスの手を取ると、呪を唱える

「^{ハイレン}癒せ」

ザリアスの全身を淡い光が包んだ
光が消えると、ザリアスは調子を確かめるように体を動かす

「どうですか？」

「完璧だな。^{ワン・スベル}簡略詠唱でこの効果、さすがだ。」

次に、ジークに取りかかる

同じように手を取り呪を唱えようとして、ふと、顔を上げた

「惜しかったわね」

それだけ言つて、治療に戻る

光が包み、消えると体の所々に感じていた、ピリピリとした痛みが消えていた

試しに体を動かしても違和感を感じない。

ジークにも治療の調子を確かめ、セリスはザリアスとの歓談に戻った

それをジークはぼんやりと見ていた

脳裏に浮かぶのは先程のセリスの言葉

『惜しかったわね』

先程の試合、武術の心得があるものであっても見極めは困難だったろうが、実はジークの負けだった

最後の一撃の時、幾度も打ち合い、このままでは確実に負けると悟ったジークは勝負に出たのだ

フエイントをかけてから突進し、勢いをつけてザリアスの剣に力一杯自分の剣を打ちつけたのだ

しかし、それを師は読んでいたのか、ジークと剣を打ち合わせるのと同時に手首をひねり、ジークの剣をはね飛ばしたのだ

さらに、それにあわせて自ら剣を手放し、引き分けに見せかけたのだった

ムスツと押し黙ったままの弟子に気付き、その師は豪快な笑い声を上げる

「まだまだ若造に負けるほど老いぼれてはおらんわ!!」

これが試合である以上、お互い、この辺で止めておくのが賢い選択だろうよ。お前もそれはわかっているだろう?

「つか、わからないとかほざいたら、もいつペン^{ハナ}最初から鍛え直す」

その言葉に、しびしび引き下がるジーク。と、鐘が鳴った

鳴り響く鐘の音を数え、唐突に、ランデイスとの約束を思い出す
正確な時間を指定された訳ではないが、あまり待たせるのも悪いだろう

セリスに声をかけると、あ、という顔をされた

彼女も同じく忘れていたらしい

「ごめんなさい、約束があるのでこれで」

「おお、そうか。さっき話していたこと、考えておいてくれ」

「まあ、機会と場があれば」

なんとも曖昧な返事を残し、二人は修練場を後にした

このとき、聞き流していた二人の会話を、しっかりと確かめておくべきだったとジークは後悔することになるが、それはまた別の話

「思ったより早かったな」

「遅く、ではなくか？」

自身の執務室で、柔和にほほ笑む人物に、ジークは揶揄するように答えた

しかしランデイスは飄々とした風を崩さない

「修練場でザリアス殿に会ったと聞いたから。

しばらくは捕まったままじゃないかと思っただよ。」

それから、昼に別れた時よりも明らかに疲れた様子を見てとり、確信する

「やっぱり一戦やらかしたみたいだな

歓声がここまで届いていたよ」

一拍置いて

「で、勝てたのか？」

「うるせえ」

見る見るうちにジークの機嫌は急降下する

相手が面白がりつつも、結果を確信していると解るからこそ、なおさらだ

「くくく、そう怒るな

父上や私が母上に頭が上がらないように、お前にも一人くらい、いつまでも勝てない相手がいたほうがいいと思うぞ」

「……………すでに一人、いるんだがな」

ぼつり、とこぼした言葉は、届かなかったらしい

「ああそうだ、二人の部屋だが、月影の間と無名の間むめいになった。後で案内するよ。」

「聞いたことがないな。というか、ずいぶん変わった名だ。」

「確かに月影なんてサラうティルド王宮にある居室の名としては外れているし、もう一つなんて、本当にそういう名なのかもわからない。」

太陽にたとえられるせい、この国の民は砂漠が近いにもかかわらず、月よりも太陽を好ましいものと思う。王家の紋章も太陽だし、太陽神の神殿もあるほどだ

その理由はシェイナにあるのだろうとジークは察している

とにかく、ラティルド国では太陽にちなんだ装飾が好まれる。王

宮も例外ではない
もともと、王宮の居室などは内装やその部屋の曰くからつけられることが多い。そのため、サラティルド王宮の居室は太陽にちなんだものが多い。

逆に、夜に関連したものは忌避されているわけではないが、少ないのだ。

「私もそんな名の部屋があるなんて初耳なんだ。
だが、条件は満たしているし、何より父上が是非にというのでね。」

その事実に関心を察し、二人は黙りこむ
ジークはシェイナの関与を、ランデイスは父の心を

それからしばし、沈黙が続いた
それを破ったのは扉をたたく音
続いて、やや間延びした声

「ランデイスさまあ、シルヴィスです。手が塞がっているので、開けてくださあい」
「ああ、すまない」

謝罪はセリスへのもの
それまでずっと黙っていたセリスはランデイスよりも早く、身軽に席を立つと、扉を開いた
セリスの視界に入ったのはまず、書類の束

「ありがとうございます、ってあれえ？」

座ったままのランデイスを見つけたのだろう、それから、その向

かにに座るジークを認め、入ってきた青年の視線がセリスに向かう
同じタイミングで、セリスも視線を上に向け、結果、二人の視線
があった

明るい茶の髪と瞳をした青年だ。成人しているのだろうが、柔和
な表情とコテンと首を傾げた姿のせいかな、幼子のように無垢な印象
を受ける

が、瞳の奥の理知的な光をセリスは見逃さなかった

なんとなく見つめあったままの二人に、ランデイスが声をかける

「シルヴィス、早く入ってこい。そうでないと、セリスがいつまで
も立ちっぱなしだぞ」

「わ、すみません」

慌てて足を動かすシルヴィス。その後ろで、セリスはそっと扉を
閉めた

「はあ、来客があるなら言ってくださいよ。お茶もお出ししないで」
「すまない、私ももう少し遅くなるかと思っていたんだ」

それで気が済んだらしい。シルヴィスの興味はセリスに移った
近寄り、まじまじと見つめる

「うーん、聞いた通り、綺麗で、小さくて、ほんとにお人形さんみ
たいだね

これで凄腕の魔法士だつて言うんだから、詐欺だよねえ」

「まあ、ありがとうございます」

少々引つかかる物言いだつたが、困惑を面に出さず、セリスはホ

ンワリと微笑む

聞きようによつては痛烈な皮肉だが、にこにこのほん、とした雰
囲気のせいか、この青年にはどうも攻撃的に出にくいのだ

そんな微妙なセリスの心情に気付いたか、ランデイスが助け舟を
出した

「シルヴィス、私はこれから2人を客室へ案内するから、それを先
に片付け始めていてくれ」

「ええええ!!!」

「さ、行こうか」

驚き半分、抗議半分のシルヴィスに構わず、セリスをエスコート
するランデイス

ジークも部屋を出たのを確認して、最後に、まだ文句を言い続け
ているシルヴィスに、一言

「じゃ、頼むよ」

ボタン、と閉じた扉に、セリスはほんの少しだけ同情した

36話 月影

城の奥、王族の生活の場である後宮のやや手前にある部屋で、ランデイスは足を止めた

「ここがセリスに用意した、月影の間だ。つきかけと言っても、私も入るのは初めてなんだが」

その場にいる誰よりもワクワクした様子で、鍵穴に鍵を差し込んだ
そこで、訝しげな顔になる

「どうした」

扉に向き合ったままガチャガチャと音を立てるランデイスに、ジークは尋ねた。と、困惑を含んだ返答が返ってきた

「鍵が開かないんだ。間違えたかな」

いやしかし、父上に渡されたものだし……呟きながら、扉と鍵を見比べるランデイスに、スツと手が差し出された

「少し、見せてくれる？」

拒む理由も見当たらないので、銀色の鍵を、差し出された手に乗せる

やや大振りな鍵をいじっていたセリスは、気取られぬように何気ない所作である部分をなぞった
すると、なぞった部分が薄く発光し、今では読める者もほとんどいないであろう、古い、古い文字が浮かび上がる

それを読み取り、彼女はそつと扉に向き直った

黒字に銀の装飾がなされた扉はこの宮城では珍しいはずなのに、違和感なく存在している

古びた扉を懐かしく見上げていたセリスは、そつと鍵穴に鍵を差し込んだ

すると、鍵を通してごくわずかだが、魔力が扉へと流れていった

そつと鍵をひねると抵抗なく回り、拍子抜けするほど簡単に鍵は開いた

そつと押せば、重そうな扉は音も立てずに滑らかに開く

こちらを見ていたジークに気づき、そつと指を口唇の前に立てる

それからセリスは、わずかに開いた隙間に身を滑り込ませた

扉に背を向け、ジークと向き合っていたランデイスはふと振りかえって驚いた

さっきまでそこにいたはずのセリスの姿が消えていたのだ

一瞬混乱したが、すぐに我に返る

セリスに何かあったのなら、ジークが目の前で悠然としているはずがない

よくよく見ると、扉が少しだけ開いていた

「ジーク、セリスはどこに？」

「先程鍵を開けて中に入っていたぞ」

「どうやってだ？」

私が試した時は開かなかったのに・・・」
「どうやったのかは本人に聞け」

自らも扉を開き、身を滑り込ませたジークを慌てて追ったランデイスは、足を踏み入れた瞬間に驚嘆した

「これは・・・見事だな」

ジークも感嘆の吐息をもらす

彼らは満天の星空にいた壁に、天井に、一体どんな仕掛けなのかはわからないが小さな光が瞬いている

そのため、カーテンを閉め切っているにも関わらず、互いの表情が窺える程にほの明るかった

しかし、セリスの姿は見当たらない

この部屋にある扉は今入って来たものを除いて3つ

「そつちだ」

ランデイスが、セリスはどこだろうと考えを巡らせるより早く、ジークがある扉を指し示した

「本当か？どうしてそう言い切れる」
「勘」

言い切られ、ランデイスは肩をすくめる

この友人の勘は、根拠のある場合とない場合、両方あるから厄介だったりする

ジークに急かされ、他に考えがある訳でもないのだからと、ジーク

の言う扉を開いた

そこは、先程の星空の間とは違い、個人的な居室のようだった
趣味の良いテーブルや椅子、ソファが置かれたそこに、セリスは
立ち尽くしていた

こちらには背を向けていて、顔は見えない

それでも、ひとつひとつ、そこにある調度を指先で丁寧に撫でる
その背は彼女の心情を何よりも雄弁に語っていた

そこにあるのは身を切られるような哀切と、胸を締め付ける様な
懐旧の念

普通の人生だとは言わないが、それでもただか二十数年生きて
だけのランデイスには、それは未知の感情だった

そのせいだろうか、ランデイスは容易くセリスの感情に呑まれてし
まう

そんなランデイスを救い、セリスを引き戻したのは、やはり、ジ
ークだった

「セリス」

セリスの感情に引きずられぬよう踏み止まりながら、平静を装い、
いつも通りの口調で呼びかける

そしてそれは、いとも容易くセリスの心を過去から引き戻した

夢から覚めたような表情でこちらを振り返ったセリスにジークは
安堵する。彼の声がセリスに届いたことに、希望を感じて

「あれ、ジーク。いつここに？」

「今だ。突然いなくなったとランデイスが慌てていたんだぞ」

「そうなの？ランデイス、ごめんなさいね」

「あ、ああ………」

こちらを見上げたセリスの様子は元通り穏やかなもので、先程の気を抜けば呑み込まれそうな、まるで濁流のような感情の片鱗すら見当たらない

困惑顔で凝視してくるランデイスに、彼の内心を知ってか知らずか、セリスはいつもの、穏やかで大人びた微笑を浮かべた

「扉の鍵ね、少し力の込め方にコツがいるみたい。たぶん、そういう作りなのだと思うわ。

壊れているわけではなさそうだし、鍵を取り換える必要はないわよ。」

「そ、そうか………」

なにも尋ねまい、と思った

セリスの誤魔化しにのったランデイスは今いる部屋を見渡した

「先程の部屋も見事だったが、こちらも素晴らしいな
夜というのは美しいのだと、教えられる」

あの部屋が星空ならば、こちらはまさに月光だった

どこからか青い光が差し、白いのであるう室内を青く染め上げる
そのまま光は部屋中に広がり、結果室内は深海を思わせる蒼い薄闇に満たされる

そんな中に浮かび上がる柔らかな光
所々に控え目に配置された照明が、効果的に室内を浮かび上がらせていた

部屋の調度も華美ではないが美しい、品の良いもので、白木の細工が光を反射し、白く浮かび上がっていた
正面には月を象かたどった銀の透かし彫り

月の女神の使者である狼と梟フクロウ、そして楽しげに踊る妖精や精霊の姿が光を反射しきらめいている

「この部屋は月を称たたえ愛でる、月のための部屋だから」

セリスは淡々と語る

「月影というのはね、月の光という意味がある

影があるからこそその光だと、闇が存在するからこそ光も存在するのだと、教えてくれるようね

闇と光、これらは相容れないように見えて、実はひどく近い

強い光を見続けければ、目が眩む

眩むは『暗む』 光は闇と近いのよ

間違えないで。光は、正義ではない。闇が悪でないように。

全ては生きとし生けるもの選択次第

太陽の加護を継ぐ者よ、それを忘れないで」

まるで巫女の神託のように、厳かにそれは下された

36話 月影（後書き）

総合評価 300pt超えました

評価してくださった方、ありがとうございます

37話 予言

「他の部屋も見てくるわね」

神がかった雰囲気は突如消え、何事もなかったかのように軽やかな足取りでセリスは部屋を出ていく

その背を見送り、ランデイスは傍らの友人に呻くように尋ねた

「ジーク、セリスは何者だ。そして今は……」

「お前の父親に訊かなかったのか」

「王太子になるまで待つか、君たちに訊けと」

「だろうな。軽々しく口に出せるものではないし、説明したところでしきれるとも思えん」

「君でも、か？」

「多少深入りはしているが、全てを知らされたわけではない。本人達に直球で尋ねるのが一番いいと思うぞ。」

「……さらっとかわされるか、丸め込まれる予感しかないんだが」「よほどうまく話を持っていかなければそうなるな」

まあ、外交手腕を試されていると思つて挑めよ、王太子さま」

「あはは……百戦錬磨の古狸を相手にするより厳しそうだ」

「あと、あの言葉は気にするな。あいつはお節介な所があるからな忘れなければ、それでいい」

それにしては妙に『重い』言葉に思えた。

だが、目を閉じて顔をそむけ、呟くように言うジークに問いたただすことはできなかった

何かを察し、それゆえ重荷を背負う彼に気付いてしまったから

だから気づかない。ジークが「本人『達』」と言つた違和感に

一方、部屋を出たセリスは

(少し、お喋りが過ぎたわね)

誰も見ていないことを確認し、顔をしかめる。あそこまで言うつもりはなかったのに

ブルブルと頭を振り、最後にパンと頬を叩いて気を引き締める

目を閉じて、今自分がいる場所、時間、立場、最後に自分という存在の状態を一つ一つ思い返していく

あれは、あの楽しかった時はすでに遠い過去なのだと、今一度自分にしっかりと言い聞かせる

言い聞かせたことで浮かんだ面影を、もう一度頭を振って払う。胸に走った痛みは、気のせいだと言い聞かせる

思考を切り替える

ランデイスへの言葉に思いを移す

「闇と光、これらは相容れないように見えて、実はひどく近い強い光を見続けければ、目が眩む

眩むは『暗む』 光は闇と近しいのよ
間違えないで。光は、正義ではない。闇が悪でないように』

何度も言うが、セリスはそこまで言うつもりはなかった。彼女が意図したのは部屋の説明だけならば、残りは

「『言わされた』わね……」

行き着いた言葉を無意識にこぼす
自らの存在理由を考えれば仕方が無いことだとは理解していても、
苛立ちは抑え切れない

とりあえず、特定はできないが、思い浮かぶ限りの相手に呪いの
『念』を送る
まさか呪いにかかることはないだろうが、自分の非難は伝わるだろう
とりあえず気が済んだところで思考を戻す

一つ一つ自分に問いかけ、答えを出していく
彼らが介入をしなければならぬ程の何かが起こるのか
否、ならば自分よりシェイナに託すべき

自分はいくまで部外者。緊急のものなら彼女を通して王に伝えたほうが余程、確實

ならばなぜ自分に託した
王ではない、特定の人物に向けられたものだから
それは、誰だ

ジークか
否、最後に私は何と言った
思い出せ、そう、確か

「……太陽の加護を継ぐ者」

それに思い至れば、様々なことが腑に落ちる

「『太陽』と『闇』の仲立ちに『月』を使うのはわざとかしら」

確かに光と闇の中でも《陽》と《闇》は特に反発が激しいし、《月》はそれを和らげることができる

あの内容を告げるには、自分は最適だろう。しかし、都合良く使われている感もある

そして、気づきたくないことにも気づいてしまった

あれは確かにランデイスに向けられた言葉。しかし、本当に『彼ら』が気にしているのは紛れもなく、ジーク

きっと、ジークとランデイスが縁を結んでいなければ、彼らは自分に託すことはしなかった。いや、あの言葉そのものがさえ存在していなかっただろう

それほどに、彼の力は強い。それは、彼にとって諸刃の剣だ

神々さえも無視できぬ力

「どうすればいいの」

慟哭と紙一重の弱音に、返る答えは無かった

ジークとランデイスが初めの星海の部屋に戻ると、あの夢のような光景は無く、すっかり様変わりしてしまっていた

カーテンは開けられ、窓からの光に晒された室内は、上品で趣味の良い、しかし普通の客間に見えた

白い木目に、金銀の装飾が美しい家具。濃紫の絨毯じゅうたんと真っ白な壁紙が美しいコントラストとなっている

藍色に染められた革のソファーだけが、あの美しい星空の名残を留めているようだった。

そんな落胆を感じ取り、ちよこんと座っていたセリスが首をかしげる

「どうしたの？」

セリスと顔を合わせることに気まずさを感じていたランデイスは、向こうから話かけてきたことにホッとする

それでも顔を合わせるのは気が進まず、なるべく不自然が無いように部屋を見回した

「いや・・最初に入った時と印象が違うから、戸惑ってしまっただけだよ

こんな部屋なんだな、と思ってね」

そう言ってからふと気付く。そう、普通の客間なのだ

来客を迎える場に相応ふさわしく、落ち着いた雰囲気の色調

セリスを見つけた部屋はもう少し明るく柔らかい印象だったが、やはり落ち着いた印象だ

そつとセリスを盗み見る。正確には彼女の着ている衣服を。

若草色のワンピースにスパッツ、こげ茶のブーツという実用重視の旅人仕様。だが、明るい緑色が少女に年相応の華やかさを与えている

この部屋も華やぎが無いわけではなかったが、セリスくらいの年代なら、もつと華やかで可愛いものを好むのではないだろうかだからこそ、一枚の絵画のように違和感なくこの部屋に溶け込んでいるセリスが、異常に感じた

「さて、そろそろ移動しましょうか」

ランデイスの思考を遮りセリスが立ち上がる

向けられたいぶかしげな視線に呆れの視線を返した

「忘れてない？ここは私に用意された部屋で、ジークの部屋まだ見
ていないでしょう」

「「あ」」

すっかり忘れていた二人の青年は顔を見合わせて、照れくさそうに笑った

37話 予言（後書き）

後書きではお久しぶりです、桜色藤です。お待たせしました。活動報告で宣言した通り、二週間以内で何とか投稿することが出来ました

実は総合PV7万、ユニークアクセス1万、評価300pt突破しました！！

読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、評価してください。皆様ありがとうございます。これからも頑張っていきたいです

38話 盾と剣とその標

「無名の間」は要望通り、月影の間の隣にあった隣といってもそれぞれ3、4室あるのですぐ隣、と言いつてもないだが、セリスとジークにとっては充分近い距離だった

その扉は、月影の間と異なり、何も特徴が無かった

ラティルド城につきものの鮮やかな色彩や派手な装飾も、何も

それは、人をもてなすべき客室として異常だが、無名の名に相応しい佇まいだった

しかし、それ以上に異常な事実があった

その『扉』には、鍵穴があるのに扉としてあるべきものドアノブが無かったのだ

戸惑っているジークとランデイスの隣で、セリスはクスクスと笑う

304

「とにかく、鍵を開けてみましょうよ」

明らかに何かを知っている風なセリスは、そう言って猫のように笑う

仕方なく、ランデイスが鍵を差し込もうとする

それをセリスが止めた

「ジークに用意された部屋だもの。ジークが最初に開けるべきじゃない？」

止めた理由は絶対にそんなことではないだろうが、何が起るのかという好奇心のほうかが勝り、ランデイスは言われるがままにジークに鍵を渡した

一方、渋々それを受け取ったジークは、軽い非難をのせて視線を送るしかし、効果は無く、セリスは目を細めて謎めいた猫の様に笑うだけ覚悟を決めて仕方なく鍵を開ける

その拍子に、僅かに魔力が動いたのを感じた

それに気を取られ、彼はその手に触れた物の正体に気づかないただ、身についた習慣から無意識に、それを握り、ひねり、押すギイ、と扉が音を立てた

「……………は？」

ジークが自分の手元を見ると、目に入ったのはわずかに開いた扉と、ノブを握る自分の手

思わず目の前に自分の手を掲げ、まじまじと観察してしまう

扉に目をやると、変化はそれだけでは無いことに気付く何も特徴の無かったはずのそれは、見事に一変していた

木目の見えるのっぺりとした表面は、黒檀に変化し、剣と盾の紋章が彫られている

ドアノブは、鋼はがねだろうか。銀とは異なる鈍い輝きを放っている

再びノブを掴み押し開くと、ギギイ…………と軋んだ音を立てて扉は完全に開いた

その不気味な音に、ジークはポツリと呟く

「……………歓迎されていないのか？」

「！！！！そんなことは無いに決まっているだろう！！」

きつと、長い間使われていないから、手入れが満足に為されていないんだ

「それはそれで問題な気が…………」

「いいから入ろう！！」

ランデイスの強引な、しかし必死の誘いに、気の毒に思ったジーク

クは黙って従う

1人残されたセリスは、開かれた扉に歩み寄り、見上げる

力強く大胆に、けれど繊細に、刻まれた剣と盾の標しるし

そこに、ある意匠を見つけた

半ば予感していて、けれど信じたくなって、何度も指先で確かめる

幻ではないと確信して、こみ上げる感情のまま、それを隠すように

手を叩きつけた

手の痛みか、それとも別の何かにか、彼女は顔を歪める

「……………つ、もう、ここが使われることは無いと思っていたのに・

……………」

手のひらの下にある月の紋章、その感触が無性に悲しかった

『月影の間は貴女のための、そしてこっちはあなたの傍に立つ者のために』

この部屋を用意したのは、シェイナだった

どんな相手かわからないからと、凝った仕掛けを施して

『守護の騎士でも、命約の相手でも、どっちでも良いから、決まったら連れてきてね

そうしたら、この部屋に泊まってもらうの……!』

楽しみだわ、と笑いあった

『あの時』から口に出されることは無かったけれど、今でもシエ
イナがそれを忘れていないことは気付いていた
でも、もうこの扉は開かないと決めていた

この城にあるのは幸せな思い出だけではない
忘れたフリをしていた心の傷は未だ癒えておらず、じくじくと痛む

一方、強引に押し込まれたジークは、強い視線でランデイスを射
抜いた

「……………で、何の話だ？」

先ほどまでは戯れ。だが、ここからはそんなものは許さない

「わざわざ下手な演技でセリスと離れたんだ。なにもないとは言っ
なよ」

偽りや誤魔化しを許さない鋭い瞳に、ランデイスは強い視線を返す

「ああ、予想はしていたが

ミュリエルの婚姻についての噂は前々からあった。ただ、我々は
あくまで、公表するまで相手の名は秘密にしたいと思っていた。

実際、特定できている人間はいないだろう
ただ、今回それが仇となった」

腹に力を入れる

これから告げる事実を、ジークはどのように受け止めるのか

「この時期にお前がこの地に、この城に来たことを勘ぐっている奴
らがいる

お前を目障りに思うやつらが動き出したらしい」

ジークは顔をしかめる

「3年前も五月蠅うるせかったが、今回はその比じゃないだろうな
あの時は奴らも自らの保身が最優先だったし、俺もミュリエルに
構ってはいられなかったからな

だが、今回は依頼が依頼だ。傍やがまにいることが多くなる……か」
「そういうことだ、さらに喧やかましくなる

セリスがいれば大丈夫かとも思ったが、あてが外れたな」

「?どうしてそこでセリスが出てくる」

「そりゃあ、異性の相棒といえば、恋人を連想するからな

恋人がいるというだけで、向けられる目はだいぶ違う

だが、実際の相棒は、美しいが、年若い少女だ。見かけは、な。お前が幼女趣味と思われるか、ただの連れ、被保護者だと見られる可能性が高い

どちらにしる、彼女はお前の弱点と見なされるだろう」

「違うない

しかし、『弱い』点で弱点か、つくづく似合わないな

下手に手を出したら返り討ちだろう」

「笑い事ではない

三日後にアストファルが帰ってくる

その時の夜会で、正式に私の客分として紹介するつもりだが、それでも危険は多い

さらに、立場を明らかにすれば下心のある連中も集まってくるだろう」

「つまり？はつきり言え」

「セリスを巻き込む覚悟はあるのかと訊いているんだ」

くつり、とジークが笑う

「俺と行動しているという時点で、今更な話だ

そもそも、良く思い出してみろ、今回の仕事を請けるといったのはセリスだぞ？

自分から飛び込んでいくのを止めることは、俺には出来ない」

そう、いくら止めようとしたって、無駄なことは身に沁みている自分には、走り続ける彼女の傍で護ることしか出来ないのだ
苦笑って続ける

「第一、解っていると思っただがな？

あれは、そう簡単に手玉には取れないぞ」

下手に手を出そうとすればむしろ、良い様に操られてしまつたろう
そこまで考えて、まさか本当に宮廷を乗っ取つたりしないよな、と
ジークはこっさり冷や汗を浮かべた

39話 真つ黒主従(前書き)

あけましておめでとつございます
今年もよろしくお願いします

39話 真つ黒主従

自分の考えに焦るジーク、ジークの言葉に考え込むランデイス
そんな妙な雰囲気は、セリスが入ってきたことで霧散した

「どうかしたのか」

様子のおかしいセリスに目ざとく気付き、ジークは言葉を投げかける

わずかに沈んだ空気を纏い、よく見れば目もかすかに赤い

「なんでもないので、気にしないで」

それにしても、この部屋はこうなったのね、ジークらしいわ」

白、灰白かいはく、銀鼠ぎんねず、鈍色にびいろ、紫黒しじく、そして漆黒

数多くの色で溢れながら、それらは全て無彩色むさいしきく

それでも重苦しい印象を受けないのは、配色たえの妙か、主の存在ゆえか
月影の間を優美とすれば、こちらは簡素で実用的と表すべきだろう

それを眺めながら、ランデイスが横道に逸れた思考でそんなことを考えていると、新たな来客があった

「ランデイス様!!! いらっしやいますよね! でなけりや怒りますよ
いても怒りますけどね 一体何時まで仕事をさぼっているつもりですかあ!!!!!!」

来客はシルヴィスだった

何があったのか、やや錯乱気味だ

「落ち着け、一体どうしたんだ

まだそんなに時間は経っていないだろう?」

「そういう言葉は、窓の外を見てから言ってください!」

見ると、やや傾いていたはずの日は、今まさに沈もうとしているところだった

「あー、……………すまない」

「本当ですよ、全く」

気まずそうに謝罪するランデイス

それを見て少しだけ気が晴れたのか、それまでよりは落ち着いた様子でシルヴィスは嘆息した

「貴方が行った後、ウエンデル様やガルドナ様、アレイシス様に樽^{たる}大臣、あと、ザリアス様も来たんです

あ、ザリアス様は何か承認が欲しいと言っていました、貴方がいないと知ると、後日また訪ねると言っすぐ行っちゃいましたけどそれはいいとして、樽はともかく他の三方を、僕一人で相手にできるわけもなし、酷い目に逢いましたよ、全く」

「それは……………悪かった、本当にすまない」

さらに真剣みの宿った声音に、そつとセリスはジークに尋ねた

「ウエンデルやガルドナ、アレイシス、それに…………樽^{トネ}?樽? ?
って誰?人?」

同じく気の毒そうにシルヴィスを見やっていたジークは、小声で
答えた

「ウエンデル、ガルドナ、アレイシスは順に、宰相、外交大臣、魔術師長だ

三人とも優秀なんだが、裏表が激しいというか、性格が歪んでいるといふか……とにかく癖が強くて扱いづらい」

つまりは、腹黒い

ふんふんと頷きながら、自分とどっちが厄介かな、などとセリス
は思う

自分が本来の姿とは正反対な中身をしている自覚はある
むしろ今の配色のほうが似つかわしいのではないだろうか

「樽は……まあ樽だな、あだ名だ、本名は知らん、覚える必要
もない

数代前の王家の血をひいていることを自慢にしている、典型的な
血統主義のオヤジ

ああ、三年前も五月蠅かったな、シルヴィスの言い方からして、
変わってないらしいな

見ればそうとわかると思うぞ、見事にそのままだ
というか、まだ王城ヨコにいたのか」

ジークの独白に、主従が顔を向けた

「そうなんだよ

爵位を降格すれば『侮辱だ!!』とか言って来なくなるかと思っ
たのに、むしろ五月蠅くすり寄ってくるようになって

しかも、縁談持ってくるんだぞ。ミュリエルと俺とアストとルデ
イ全員に

素行不良で降格されたから余計に必死なんだろうけれど、どれだ
け厚顔なんだ」

「殿下、素が出てますよ

でもまあ、僕もお断りですね

だって、子供全員そっくりなんですよ？外見も中身も

愛人とかつくりまくっているくせに、どうして相手の遺伝子が受け継がれないんでしょうね？

娘とかかわいそうだと思うべきなんでしょうが、あそこまで品性も下劣だと救いようがないです

噂では、屋敷の、自らが生活する区域にはけして、若く美しい娘は入れさせないとか

もし視界に入ってしまったら、鞭打ちらしいです。それも、体だけでなく顔にも

息子のほうも、父親に似て節操がなくて、屋敷所か領地でも女漁りだそうですね

他にもいろいろ陳情来てますよ。

そうだ、殿下、三方からの報告も揃いました」

シルヴィスの報告する口調は、軽い

だがそれでも消せない内容に顔を顰めるセリスとジーク

対して、王太子はぞっとするような笑みを浮かべた

「それはそれは、寡聞にして知らなかったな

守るべき民や家臣に対してそんな扱いとは、あそこは本当に、堕ちたものだ

いや、降格させて反省を促すなんていう生温い方法は人相手に使えるものであって、樽には理解しきれんか

・・・シルヴィス、準備しておけ」

「御意」

冷たい目で笑いあう主従は、即座に立ち上がる

「それでは、少々失礼させてもらつよ

ああ、今日中に侍女と侍従を寄こすから」
「突然お騒がせしました」

颯爽と立ち去る二人

だが、清々しいのは後姿だけで、きっと正面から見れば、真っ黒なオーラが渦巻いているのだろう

残された方は、呆気にとられていた

それでも何度か見ていたジークは、樽一家の憐れな末路に思いを馳せ、少しだけ、ほんの少しだけ同情する

そしてセリスのほうは

「あの二人でも対抗できない黒さって……」

まだ見ぬラティルド上層部の腹黒組に、期待を抱いていた

40話 侍女三人娘（前書き）

遅れました!!

楽しみにしてくださっていた方、ごめんなさい。

詳しい理由は活動報告で。

40話 侍女三人娘

ランデイス、シルヴィス主従が去った後も、セリスは無名の間
いた

ジークもそれを咎めることはせず、むしろ当然のこととして受け入
れる

思い思いに時間を潰し、時折、思い出したように言葉を交わす
そうしているうちに、ソファでうとうとと微睡まひるんでいたセリスを起
こしたのは、ノックの音だった

ジークが気付いて立ち上がり、扉へと向かう音がする

瞳を開いたが、ここからでは入口の様子を見ることはできない
セリスが身を起こすと、その上から外套が滑り落ちた

その衣擦れの音に気付いてか、ジークが姿を現す

「起きたか

今、侍従が来て、夕食の時間だと言われたんだが・・・どうする
？」

「ん・・・許されるなら、部屋で食べたい
今日はもう、疲れちゃった」

それを聞いて、ジークは扉の外へ告げる
返事とともに、誰かが去っていくのがわかった

「月影の間にも侍女が来ているだろうし、一度戻ったほうがいいだ
ろう

立てるか？」

「へーき」

まだ寝ぼけた頭でふらふらと立ち上がるセリスを、ジークはじつと見つめる

それから、さっとかがみ込んだ

「きゃあー!!」

素早く抱えあげられて、セリスは可愛らしい悲鳴を上げる

「まだ夢の中にいるような状態で、真っすぐ歩けるわけないだろう
抱えて行ったほうがまだましだ」

「おかげで眼が覚めたわよ!!
だから降ろして!!」

バタバタと暴れるセリスに、ジークは一言

「そんなに暴れると、落ちる」

同時に少しだけ腕の力を緩める

「ふわっ」

宣言通りに落ちそうになり、セリスは咄嗟にジークにしがみついた
くつくつと上から降ってくる笑い声を睨みつける

「冗談だ、俺がセリスに対してそんな事をする訳ないだろう」

それを信じているからこそ、咄嗟のことに驚いてしまったのだとは
言えず、セリスは抗議の意を込めて彼を軽く叩いた

月影の間に急遽配属された侍女、マリーエ、ミシエリア、カティアの三人はいま、目を丸くして硬直していた

彼女達はこの部屋の客人であり今日から使える主でもある人物が、この国を救った英雄の連れであることも、その人物が年若い少女であることも、城内を飛び交う噂によって知っていた

今日登城したばかりという事で、プレッシャー残念ながら人柄まではわからなかったが、その肩書きだけで精神的重圧は十分だった

彼女達は緊張しながら指示された場所、つまり月影の間を訪れたが、客人の姿は無い

見慣れぬ調度を落ち着き無く観察しているなか、やっと現れた主は、なんと抱き上げられ、運ばれていた

それも、膝と背中に腕を回される、いわゆるお姫様抱っこ

しかも、それをしているのが美麗な青年とくればもう、ただただ驚き、見惚れるしかない

一方セリスはそんな視線を気にせず、冷たい声をジークに浴びせる

「ほら、驚かれているじゃない

もう着いたのだから、さっさと下ろしてよ

「わかった、わかった、そう怒るな

じゃあ、俺は戻るが、何かあったら呼べよ

「.....」

ツンとそつぽを向いたまま、返事をしないセリスに苦笑すると、
ジークは手を伸ばした
ワシャワシャとセリスの髪を掻き回し、目を見開いた彼女の抗議が
届く前に退散した

「まったく……」

憤然としつつジークを見送り、乱れた髪を直したセリスは、クル
リと振り返るとにこり、と笑った
真正面からその笑みを見てしまった侍女3人は頬に血を昇らせなが
らも、我を取り戻した

「はじめまして、セリスといいます
これからしばらくの間、よろしく願いますね」

そういつて深々と頭を下げるセリスに、侍女3人は慌てた

「お願いですから、顔を上げてください!!!」

必死の懇願に仕方なく顔を上げたセリスに、3人はホツと息を吐いた

大切な客人というだけでなく、極上の美少女に頭を下げられるというのはなかなか居たたまれないものだと言わせた彼女たちは知った

気を取り直して、彼女たちもそれぞれ名乗る

「本日よりセリス様付きの侍女となりました、マリーエと申します」

「ミシエリアと申します」

「カティアと申します」

3人の名を順に口の中で呟き、セリスは困った顔をした

「あの、もしかして、今皆さんが名乗った名って、正式名ですか？」

「はい、侍女は例外を除いて、正式名を名乗ることを義務付けられています」

正式名とは、生まれた時に親につけられた名

真名の次に力ある名

名には力があり、詠唱魔道スエル・ルーンの中にはそれを利用して、相手を意のままにする術もあるという

それを防ぐためか、位が高くなるほど正式名が増えるという慣習がある

ただし、その大半は隠し名として秘され、限られたものにしか知ら

されないが
また、一部とはいえ正式名を名乗ることは、相手への無害や友好を示すという

正式名と位の関係としては一般的な平民であれば名前と姓名の2つ、裕福な者ならば3つ

貴族であれば、さらに家名や爵位が加わるので4つ
王族ならば爵位の代わりに継承権などがあるもので4つか5つ。ただし、国名を家名として名乗ることが多いので、間違えることはない

それはともかく、セリスにとっては正式名を名乗られても、少々困ってしまう

「あの、愛称を教えてくださいませんか？
私の一族の、特に魔法士は掟により、正式名を呼ぶことを禁じられているんです」

本当に申し訳なさそうなセリスに、3人の表情も和らぐ

「構いませんよ

掟では仕方がないですし、侍女同士では愛称で呼び合うことのほうが普通ですから

私のことは、マリーとお呼びください」

「私はミシエルと」

「カティとお呼びくださいな」

快く受け入れてくれたことに、セリスの顔も明るくなる

「ありがとうございます！」

私のことも、セリスと呼んでくれませんか？それに、敬語もいらないですよ」

「それはできません、むしろ、セリス様こそ、私共に敬語は不要ですよ」

セリス様は殿下の客人なのですから」

一番年長らしい、マリーの言葉に、セリスは表情を曇らせる

「凄いのも、偉いのも、ジークであって私じゃありません

なのに、こんな美しい部屋で、人に傳かたづかれて……正直、勘違
いしてしまいそうで、怖いんです

私は……驕おこりたくない」

だから、お願い、と見上げられ、マリーはうつと言葉に詰まる
さらにうるうるとした瞳に凝視され、思わずジリツと後ずさる
進退極まったマリーを救ったのは、カティの楽観的な言葉だった

「じゃあ、お互い敬語はナシってことでどうですか？様付けと最低
限の丁寧語、公式な場での敬語は譲れませんか？」

その位なら、セリス様のわがままってことで許されると思います

よ？」

「同感」

「本当？」

ミシエルも短く賛成の意を告げる

パアツと顔を輝かせるセリス

その表情に、マリーも白旗を上げた

「仕方ないわね

でも、それなら遠慮なくやらせてもらつたわよ、セリス様
まずは……………湯浴みね」
「え??？」

しばらくして、セリスの悲鳴が響いたという

40話 侍女三人娘（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

誤字、脱字、文法や語彙の誤り、ストーリーの矛盾、見つけたらお知らせください。

41話 確信犯

結局、強制的に服を脱がされたセリス

しかも、その後も抵抗むなく全身の隅々まで洗われ、着せ替え人形扱いされて、精も魂も尽きていた

月影の間のソファの上でグッタリとするセリスと対照的に、侍女三人は実に満足そうに笑みを交わしていた

「やっぱり元が良いから、ちょっと磨いたただけで見違えるわねえ。」

「うんうん。でも、もうちょっといじりたかったなあ。髪とか服とか化粧とか」

「三日後に期待。」

三人が何か言っているのが聞こえたが、聞き耳を立てる気力が無いセリスはただただ聞き流す

聞き流しているのに、疲労が蓄積されていくのは気のせいじゃないと思う

そうして、どれくらいの時間がたったのか

ジークの来訪が告げられた

夕食が運ばれてきたので共に食べないかという誘いを、セリスは承諾した

「通してください〜」

もはや顔を上げる気力も無く言ったセリスの元に、ジークは案内される

「……………さっぱりしたようだな」

「酷い目にあつたわ」

あえてセリスの様子には触れずにコメントしたジークに、呻くように答えを返す

セリスはその立場ゆえに他人に着替えを手伝ってもらうことも、湯殿に人がついて来ることも、今まで無い訳ではなかったが、質素な独り暮らしが長かった身。

全ては遙か遠い時の流れに呑み込まれ、そういうことが『あつた』と記憶するのみで、経験などとうの昔に忘れ去ってしまった。おかげでどうしていればいいかわからず、無駄に体力を使ってしまったのだ

一通り言葉を交わしてようやく顔を上げたセリスは、ジークの後ろに見知らぬ姿を見つけた

年の頃はセリスより1、2歳上か。少年と青年の境目辺りだ。侍従らしく動きやすいが見苦しくない服装はまだ馴染んでおらず、なんとも初々しい

新緑の髪と褐色の肌が、真っ直ぐに元気良く伸びる若木を思わせた

じつとセリスに凝視されたその少年は、顔を赤くした

「ジ、ジーク様つきになりました、ルシオンと申します

これからよろしく願いますっ」

ガチガチに固まりながら、そう言って勢いよく頭を下げる少年に、セリスはコロコロと笑い声を上げた

「はじめまして、セリスと言います。ルシオンという名は略式みたいですね

では、ルシオンさん、こちらこそよろしく願います」

にっこりと極上の笑みを浮かべたセリスを見て、再びルシオン少年は硬直した

それを見逃さず、セリスは続ける

「ジーク付きという事は、これから顔を合わせる機会が多いでしょうし、堅苦しいのは苦手なので、どうか気楽にしてください

私のほうが（外見は）年下のようなので、敬語も要りませんよ」「え……あの……」

しどろもどろに反論しようとするルシオンだったがセリスの純粹（に見せかけた）瞳に何も言えなくなる

ただでさえセリスは風呂上り。上気した頬とキラキラ輝く瞳、しつとりと艶を増した黒髪。

一心に見上げてくる美少女に抗えるはずも無く、何とか搾り出した言葉は

「自分もルシオンでいいです……」

というものだった

セリスが純情な少年一人を陥落させているのを見ていたものの反応は様々だった

こういうやり取りはもう慣れっこなジークは苦々しいというより

「またやっているのか……。」という呆れを含んだ目線
侍女三人は目を輝かせ、微笑ましい、というには問題のある光景
を見守っていた

しかし、ふとマリーエが我に返る

「私たちも同じように落とされた……。」

呟いた瞬間に悪寒に襲われ、彼女は慌てて頭からその考えを追い
出した

「じゃあ、紹介しますね、私付きの、マリーさん、カティさん、ミ
シエルさんです

ジークも、ちゃんと顔と名前を覚えてよ？」

「ああ、大丈夫だ」

セリスの最後の言葉はほとんど冗談だが、ほんの少し本気も入っ
ている

以前とある街に立ち寄ったとき、ある女性に声をかけられた。その
ときセリスが誰かと尋ねると「知らん」という答えが返ってきたのだ
その後巻き込まれた事件でその女性がジークのつかの間の恋人だ
ったことを知るのだが、正直セリスはそのことを知って呆れてしま
った

しかも、そういうことは一度や二度ではなかったりする

なので強めに念を押ししたセリスだったが、1つ、勘違いをしている
ジークは恋人たちのことを忘れたのではなく、最初から記憶する気
がなかっただけなのだ

怒られるのは目に見えているので、ジークは決して訂正する気は
ないが

「そう言えば、三日後の話は聞いたか？」

食事が終わり、出された酒を楽しみながらジークはセリスに話し
かけた

こちらは弱めの果実酒を楽しんでいたセリスは、カティ達が何か話
していたなと思いつく

だが、全く聞いていなかったため、素直に首を横に振った

「式典のためにアスト、いやアストファルが帰国する。そのための
夜会を、三日後に開くそうだ。」

ランデイスによると、そこで俺達を客分として紹介するつもりら

しい。」

「へえ、アストファルって言うと第二王子だっけ。

それってやつぱり、私も出席しないといけない？」

「まあ、当然だろうな」

「うーん、めんどくさいんだけどなあ。あんまり公の場に出たくないし……」

「こればかりは諦めるしかないだろうな」

王家主催の夜会の招待に何も感慨を抱かず、淡々と、むしろくだけた様子で交わされる会話に周りにいた人間は礼儀正しく聞こえないフリをした

「あ、でも服装どうしよう。正装じゃないといけないでしょうけれど、さすがにドレスは持って来ていないし」

「そう言えば、俺のは適当に用意すると言われたが、セリスについては聞いていないな。」

君たちは何か聞いているか？」

話を振られたカティアが慌てて答える

「今から用意するとさすがに間に合わないの、セリスに似合いそうなものをいくつか見繕うと言われました。あ、セリスは色とか、何か希望はある？」

何の気なしにカティアから出た質問に、セリスは考え込んだ
考え込み、考え込み……ついには腕まで組んで思い悩んでしまう

「せ、セリス？」

しばらく待ってもピクリとも動かず、思考に沈んでしまった彼女に恐る恐る声をかけるとハッと顔を上げた

「あ、ごめんなさい・・・希望は特に無いわ

ん、でも・・・そうね、白と黒のドレスを一着ずつ、入れておいてくれる？」

「わかったわ。ほかに無い？」

「ええ。ああ、そうだ。三人とも、今日はもう下がってくれて良いわよ。」

色々慣れていなくて、疲れたでしょ。ご苦労様。明日もよろしくね。」

何も言えず、彼女達は頷くしかなかった

41話 確信犯（後書き）

感想を書いてさった方、お気に入り登録してくださった方、そしてこの作品を読んでくださる方、本当に感謝します。

実は、銀月を書き始めてもうすぐ1年が経ちます。

1年で投稿数48話。多いんだか少ないんだか・・・。

お気に入り登録してくださる方もたくさんいて、ほんと嬉しいです。これからも、拙作を見放さず、お付き合いください。

誤字、脱字、文法上の誤りなど、ご指摘くださると嬉しいです。

42話 変化の兆し

ジークモルシオンを下がらせ、室内は二人きりになった。

「言い忘れていたが、その服、よく似合っているぞ。」

手酌で杯さかずきに酒を注ぎながら、ジーク。

セリスが今着ているのは、ドレスとワンピースの間のようなもの。目が覚めるような鮮やかな黄色に、砂漠の民独自の紋様が刺繍されたそれは、ラティルド特有のもので、ジークの目にも新鮮に映った。

しかし、そんな褒め言葉にセリスは淡く微笑するだけ。瞳はまだ、思考の海を彷徨さまよっている。

「何を考えている？」

至近距離から降りてきた声に、セリスはビクリと体を震わせた。テーブルをはさんで正面にいたはずの、彼の姿はない。そんなことにも気付かないほど、考え込んでいたのだとこの時初めて自覚した。

ゆっくりと顔を上げていくと、座っている自分に背後から覆いかぶ

さるようにしてジークがいた。腕はセリスを閉じ込めるようにテールブルにつき、覗き込んでいる。

首を反らせたセリスと、ちょうど、顔が互い違いになる状態。視線を合わせて、ジークはもう一度訪ねる。

「何をそんなに考え込んでいたんだ。」

「別に……。」

視線を避け、俯くセリス。しかし、ジークも退かない。

彼女が逃げないよう腕はそのままに、ゆっくり身をかがめる。

吐息交じりに耳元で囁いた。

「言えないようなことなのか？」

バツと耳を押さえたセリスが振り向いた。

酒の酔いにうつすらと染まった頬。潤んだ瞳にただ視線を絡める。

漆黒の瞳にセリスの視線が吸い寄せられる。が、抵抗した。

吐息が混じりそうな程の至近距離で、黒と黒紫がぶつかった。

そこに恋人たちの甘さなど微塵もない。

強制と抵抗。それぞれを乗せた視線が火花を散らして激突し、互いをねじ伏せようとする。

感情に、互いの魔力が反応し、ギシリと空間が軋んだ。

どれ程そうしていたか。

静かな戦いはセリスが目を伏せたことで終わった。

それでもせめてもの抵抗とセリスはジークに背を向ける。

悩んでいたのは本当に他愛無いことなのだ。なのに、どうしてこんなに意地を張っているのか、自分でもわからない。

コントロールできない感情に戸惑い、固く手を握り締める。

表情がわからないように軽くうつむいて、無理に明るい声を響かせた。

「本当に大した事ではないのよ。以前に魔女の正装を見せたからわかると思うんだけど、私たちには正装の色が決められているの。

ただ・・・私の色は華やかな場所にはあまりそぐわない。

それに、今の私は魔女とはいえないから、そこまでこだわる必要があるのか、って考えて・・・。」

そこで、途切れた。

言葉に詰まったことに、セリスは動揺する。

視界がひどく暗く感じた。

どこか情緒不安定なセリスを救ったのは、淡い温もりだった。

いつの間にかセリスはジークに抱きすくめられていた。

直接触れることはせずとも、小柄なセリスの体はスッポリと覆うように包み込まれる。

僅かな間を通して伝わる体温が、ゆるゆるとセリスの身体のこわばりを溶かしていった。

セリスの様子に安心したジークだったが、ふと眉をしかめた。

「歯形がつくぞ。」

強く強く、色が変わるほどに噛み締められた唇を、そっと指先がかすめる様に触れた。

そのとたん、ゾワリとセリスの体を甘いしびれが駆け抜け、力が抜ける。

ジークはそんなセリスの異常に気付かず、今度はそつと唇をなぞった。

「!?!?!」

「ああ、やっぱり血が滲んできた。」

そう言っつて、ジークは指先に付いた血をぺろりと舐め取る。

セリスはと言えば、再び感じた甘いしびれとジークの行動に、本能的に身を引いていた。

「.....」

「も、もう私寝るから!?!お休み!?!」

気まずくて、そのまま寝室に飛び込んだセリスを、ジークは黙って見送った。

セリスの姿を遮った扉を見つめる。

「お休み、良い夢を。」

そつと吐き出し、ジークも部屋を出て行った。

ジークが出て行ったのを感じ、セリスは息を吐きだした。

月影の間はセリスの支配下にあるため、人の出入りやら何やらはセリスに筒抜けだ。

そのために、ジークが出て行ったさつきまで、気を抜けなかったが。

用心のため物理的・魔術的に施錠し、寝台に寝転がる。

「どうしたんだろう、私……………」

その理由に気づきながら、セリスはそれを否定するようにまぶたを閉ざした。

あの一瞬、確かに、ジークを『男』として意識したという、その事実から。

一方、自室に戻ったジークは、明かりもつけずに指輪を見つめていた。
欠けた月の光を映し、金色に輝くそれは、シェイナから渡されたものの。
これを渡した時、彼女は既に自分がこうすることを予想していたのだろうか。
だが、例え全てが彼女の手の平の内だとしても、それがセリスに関することである限り、ジークは避けることが出来ない。

教えられたとおり古代語を唱えると、あの時と同じ、渦巻く闇を湛えた空間が現れる。
ただし、床に。

「飛び込め、ということか？」

底なし沼を連想させるそこに踏み入ることはなかなか思い切りが要る。

覚悟を決めて踏み込めば、緩やかに体が沈んでいった。
沈み込む、ズブズブという感覚に引きつる顔を隠すことなく、それでもジークは目を閉じて大人しく従う
完全に沈み込むと同時に、入り口は消えた。

そうして、気付けばジークは昼間訪れたのと同じ空間に立っていた。

42話 変化の兆し（後書き）

ジークはセリスの教育によって、「女性に対する態度」を叩き込まれています。

なので、誉め言葉を言い忘れていたのは、わざとです。ルシオン君に気遣ったんですね。

この章では、ちょっとジークとはセリスに近づいてもらいたいなあ、と思っています。

気長に待っていてください。

読んでくださって、ありがとうございました！

43話 真夜中の訪問

シェイナを訪ねたジークが着いたのは、前回と同じ場所だった。昼間と同じ空間、同じ待ち人。

ただ一つ、異なったのはシェイナの脇に控える莓色の髪の女性だった。

アンジェリカのような燃え立つ炎の赤ではなく、甘さを感じる赤。瞳も鼈甲飴のような透明な琥珀。

全体的に甘い、蜜のような印象の女性だ。

優しげに整った顔立ちだが、時の流れを感じさせない年齢不詳な空気が感じられる。

ジークの視線に気付くと一度会釈し、スツと姿を消した。退出ではなく、文字通り空気に溶けて。

「今は……。」

「私の使い魔。それより、座って座って。」

勧められるままに向かいに座る。

卓の上には酒杯が二つ用意されていた。

「下戸なわけ無いわよね。じゃあ、とりあえず乾杯しましょう。」

スイと酒杯を掲げる。

「新たなる月の守護者の今後の努力に」

「そうくるか……陽の精地の平安に」

「乾杯」

一気に飲み干した。

「ぶはっ、何だコレ。」

手のひらの中、小ぶりの杯を見下ろす。4、5口ほどの量なのに、たちまち全身に熱が回る。

トロリとした透きとおったそれは水のような見かけだが、その実、今までジークが口にすることが無いほど強い酒だった。

瞬いて驚きを表すジークにシエイナは笑った。

「そう言いながらも顔色1つ変えないなんて、相当強いね。以前セリスに飲ませた時は、顔真っ赤にさせて目を回しちゃったのに。」
「ああ、セリスはあまり酒に強くないから・・・というか、飲ませたのか？よっぽど強くない限りコレを飲んだら大抵の人間は倒れるだろう。」

まあ、師匠は好きそうだが。なんて酒なんだ？」

「うーん、とにかく強いのが飲みたいって言って作ってもらったやつだから、銘は無いのよね。気に入ったのなら、君が付けてもいいわよ。」

「名付けは製作者の特権だろ？」

「作ったのはさっきの娘^こただけだね・・・ネーミングセンス、壊滅的なよ。」

「ああ・・・。」

ジークもその気持ちはわからなくもない。そのまま、ドストレートなものならまだしも、変に捻った名を付ける場合、手に負えたものではない。

「それでもこれは彼女が貴女の為に作ったものだろうか？俺のような部外者が思いつきでしていい事じゃないと思うぜ？そういう訳で、

辞退させてもらおう。」

「そっか。うーん、やっぱり自分で考えるべきかあ。」

悩むシエイナをよそに手酌で杯を重ねる。酒精の強さは酒豪も尻込みする、はるか北の雪国の火酒以上。しかし強いだけではなく味も良い分、こちらの方が飲みやすいし、好みだ。

向かいから聞こえる、「火精の毒」だの「天国への誘い」、はては「すってんころりん」といった呟きは聞こえない。聞こえないから、それが何を意味するのかなど気にならない。ましてや尋ねるなど絶対に、しない。

関わるまい、その一念で目の前名付けの恐怖の現実から逃避し続ける。

そうしているうちに、何らかの結論が出たのか、「うん、よし」という声で呟きが終わる。

どんな結論が出たのか物凄く気になったジークだが、藪をつついて蛇を出すような真似は出来なかった。

代わりに、違う藪を標的にする。

「なあ、シエイナ。」

これからするのは、藪をつつくどころか思い切りかきわけ、踏み込む行為。しかも、蛇どころではないなにかが出るのは確実。

危険は承知の上。しかし、危険を冒さなければ手を伸ばすことさえ出来ない。

「取引がしたい。」

「対価は？」

「俺に差し出せるものなら何でも。」

「ダメね、問題外もい所。」

シエイナはジークの返答をバツサリと切り捨てた。

魔女の瞳で青年を見やる。

「自覚が無い？守護者となった時点で、君の全てはセリスへ捧げられたの。その命、魔力、魂・・・とにかく、あなたという存在を構成するもの、全てが。」

「そんな君がセリスに内緒で、あたしと取引することなんて出来ないの。」

「・・・そうか、邪魔をしたな。」
「諦めるの？」

あっさりと引き下がったジークにシェイナの視線がきつくなる。先程よりも尖った声は、席を立ったジークの背にぶつかった。そちらを見もせず、ジークは答える。

「いや、別の手段を考える。」
「知っているのは私だけでも？」
「どうにかして聞き出すというのも、『別の手段』だろうか？」

その答えに、シェイナは呆気にとられる。そうしていると、じわじわとある感情がこみ上げてきた。そのまま、素直に衝動に身を任せる。

「ふ・・・ふふ・・・くつくつく・・・ぷ・・・あーははははははは！！ダメ、もー我慢できない！！！」

卓をバンバンと叩き、爆笑するシェイナにジークは驚いて振り返る。

が、大笑いするシェイナへの対応に困り、うろつろと視線を彷徨わせて助けを求めてしまう。

そんなジークを見てシェイナはさらに腹を抱えて笑い転げる。もち

ろん瞳には涙だ。

セリスの銀の鈴を振るような声とは違い、シェイナの声は鐘のような豊かな響きを持つ声だ。そんな彼女の笑い声は閉じられた空間のそこかしこに反射し、その場にいる者の鼓膜を容赦なく攻撃する。その苦行に、ジークは黙って耐えるほか無かった。

43話 真夜中の訪問（後書き）

お久しぶり、そしてお待ちせしました。

連載を始めて1年、なんと10万PVを超えました！！
読んでくださっている方々、ありがとうございます！

読んでもらうとわかるのですが、今回、シリアスに閉めようと思ったのに、ラストはあなりました。

セリスが登場すると妙にシリアスよりになるのですが、シェイナが登場するとどうしても場がシリアスになりきれません。不思議です。

あ、感想を書いてくださった方、お気に入り登録して下さった方、評価をして下さった方、ありがとうございます！
これからもよろしく願います。

44話 予想外（前書き）

地震の被害にあわれた方々の気晴らしになりますように。

44話 予想外

シェイナの唐突な爆笑が始まって数分。

「もういいか？」

うんざり、と顔一杯に描いたジークと、息も絶え絶えのシェイナがいた。

「う、ごめんなさ……くくつ。」

謝罪しようとして、再び笑いの発作に襲われるシェイナ。それを見てジークは諦めたように酒杯に口をつけた。

「あんだ、いつもこんな風なのか？」

やっと笑いがおさまったらしいシェイナに、呆れたように問いかけたジーク。

なにせかれこれ数十分、シェイナは笑い続けていたのに、心配するどころか誰も様子見をする気配も無いのだ。これが日常なのかと疑っても無理は無い。

「普段は使い魔くらいしか話相手はいないから、どつちかって言う
と研究してるほうが多いわね。時々失敗して爆発を起こすこともあ
るし。そんなこんなで、皆私の行動には慣れてるからね。笑い声な
んかじゃびくともしないわ。」
「ずいぶん、大雑把なんだな。」

セリスの使い魔たちを思い返しながらかジークは言った。

彼らはセリスや自分が何かやるたびに一大事かとすっ飛んできたも
のだ。その後、必ず彼らの説教を食らったのは言うまでもない。セ
リスと並んで正座させられてしまったことも、何度もあった。

「そもそも、使い魔になった過程がセリスとは違うもの。あの子は
同情して拾って、行き場が無いから契約ってパターンだけど、私の
場合、気に入ったから契約するってパターンがほとんどだし。だか
ら、忠誠心のあり方が根本から違うのよ。」

使い魔とは魔法士、魔道士と契約を交わした存在をさす。彼らは
契約相手に使役されることと引き換えに、恩恵を受ける。

それは魔力だったり、知能だったり、寿命であったりと様々だ。

ただし、使い魔とされる存在のほとんどが犬や猫、変わったとこ
ろで鳥やサルなど、普通の動物だ。相当な実力者でも、魔獣と呼ば
れる魔力を持った獣位しか従えられない。

聖獣やら精霊といったものたちをこともなげに従えている魔女と
いう存在がどれ程とんでもないのか、こんなところでも理解できる。

「忠誠心のあり方、か。だが、さっきの彼女は精霊なら使い魔にな
って相当長いはずだろう？」

「いや、だからこそ、この対応なのか。」

「うん、大正解！」

失礼なことを言いながら一人納得したジークに、シェイナも気分を害することなくけらけらと笑って応じる。それに反応を見せず、ジークは話を強引に戻した。

「まあ、俺には関係ないから良いけどな。で、結局取引は不成立でいいのか。」

「そう、思ってたんだけどねー。」

頬杖をつき、なぜか不満そうにあらぬ方向を見やるシェイナ。

「君があまりにも予想外だったから、ちょっとだけ期待してみようかなって思ってた。」

「俺には差し出せる対価が無いんじゃないかなかったのか。」

「ううん、本当はひとつだけあった。しかも物凄く有効なのが。」

思い当たらず、首を傾げるジークに視線のみをやり、シェイナは薄く笑う。

「昼間に言ったでしょ。君は『サラティルドを守った』のよ。この陽の精地をね。陽の魔女である私にとって、それは大きな借りとなる。」

「……礼は受けたぞ？」

「あれは『シェイナとしての私』からのもの。『魔女としての私』とはまた別よ。」

「違いがわからないんだが。」

「でしょうね。セリスといたのだから。……そしてそれが問題なの。」

「何か言ったか？」

「いいえ、なんでもないわ。」

こっそりとこぼした呟きを聞きとがめられ、シェイナは首を振る。
今話すべき事柄は別にある。

「私がこれから君に話すことは、セリスのプライベートに踏み込むことよ。本来なら私の口から、それも本人がいない場で承諾もなしに話すなんて許されないこと。それでも話すのは、君がこれからセリスの傍らにいるにあたって、外せないことだと思ったから。」
「俺は、あんたに認められたと思って良いのか？」

出会った時から感じていた視線。それは、最初はザリアスの弟子として、最近では英雄の二つ名をつけられた者として、度々浴びせられてきた視線と同じもの。それでもシェイナに威嚇も拒否も示さなかったのは、その視線が誰のためなのかを理解していたから。
だから、黙って見定める視線に自らの身を晒し続けた。

「やっぱり気付いてたか。正直言って、及第点ギリギリね。」
「そうか・・・ちなみに、具体的な評価を聞いていいか？」

ジークがそう言うと、シェイナは目を泳がせた。

「え」と、言わなきゃダメ？」
「俺はセリスの傍を離れるつもりは無いからな。なら認められるために、至らない点を指摘してもらおうべきだろう？」

ジークとしては当然の言い分に、シェイナは口ごもる。

「で、でも、最後に選ぶのはセリスよ。そこに私の意見なんて関係ない。」

「そうだな。けど、俺のせいでセリスに恥をかかせるなんてこと、

許すわけにはいかないからな。

ということ、何を躊躇^{ためら}っているのか知らないが、俺の何が気に入らないのか大人しく答えてくれ。」

理由はわからないが、こちらが有利、という雰囲気を感じ取ってジークは強気に出てみる。

案の定、救いを求めてわたたと視線を彷徨させたシェイナは、助けがこないことを悟ってがっくりとうなだれた。

「……だから……よ。」

「ん？」

うなだれたまま呟いたシェイナの言葉を聞き取れず、ジークは聞き返す。

「私の生涯で一番大っ嫌いな男に、君が似てたからよっっ！！！！」
「……は？」

ガバリ、と顔を上げて叫ばれた内容に、ジークは目を丸くした。それも見ずに、シェイナは溜まり溜まった鬱憤を晴らすべく、叫び続ける。

「あぁんの最低男っ！！浮気についてはまだ目をつむるわっ、セリスにも非があったと思うし！！でも、でも……だからって、勝手に罪悪感募らせた挙句、耐え切れなくなってセリスを傷つけるなんて！！やっぱりあの時、セリスが止めてでも制裁して性根を正しくんだっただわ！！」

「そんな理由で……？いや、待て。『セリスを傷つけて』だと？」

瞬時に目つきがきつくなつたジークに、シェイナはハツと我に返る。

感情に任せて叫んだ自分を殴りつけたくなりながら、わざとおどけた様に言った。

「あーあ、ちよつと失言しちゃつたわね。それにしてもちよつとした一言に反応するなんて、よっぽどセリスにぞつこんなだね。遊んでいたつて聞いていたけれど、意外と一途？」

けれどもジークは視線を緩めない。口元へ運んでいた酒杯の存在も忘れたように、手は止まっている。

「誤魔化すな。・・・というか、聞いていないのか？」

「何を？」

不思議そうなジークの言葉に、シェイナは思い当たるものが無く尋ね返した。

「俺はセリスの家を出てから7年間、感情を封じられていたんだ。」
「！」

息を呑んだシェイナに構わず、視線は鋭いままにジークは淡々と言葉を続ける。

「封じられたのは『セリスへの恋情』。記憶やそれに付随する恩人としての感謝、師としての敬愛はそのままに、異性として抱いた感情だけを封じられた。」

ただ、封じただけで消した訳ではなかったから、セリスと会えばそれは解けてしまうものだった。だから彼女は俺と会うことを徹底的に避けていたそうだ。

それでも思いそのものは消えないから、文字通り行き場の無い感情を手当たり次第にぶつけていたというわけだ。・・・本当に聞いて無いのか？」

驚いているシェイナにむしろ不思議そうにジークは続けた。

己の行いが褒められたものではないことを自覚しているジークとしては、それが減点対象になっていないことのほうが驚きだった。

「てつきりそれを知っていて、俺を観察しているのかと思っていたが・・・本当に知らなかったのか？」

「ええ。でも、セリスがそこまでするなんてね。うん、ちょっと希望が持ててきたわ。」

驚愕を呑みこみ、そういうシェイナに、ジークはさあ話せと目であいう。

シェイナも、決心がついた。

「もう、千年近く昔の話よ・・・。」

シェイナにとっても忘れられない時代。

記憶は鮮やかに。

目を閉じれば容易く目裏まなひらに甦る日々。

44話 予想外（後書き）

しばらく沈黙していてすみませんでした。

地震の被害はそれ程なかったんですが、計画停電の地域に入っていました、投稿が遅れました。

中止の発表に安心していて、何度突然の停電の餌食になったことが
・
・
・

報告はきちんとして欲しいものです。

45話 幸せのとき(前書き)

お待たせいたしました

45話 幸せのとき

空間が歪むのを感じ、シエイナは顔を上げた。

「シエイナ！」

忽然と現れた銀髪の女性に抱きつかれ、シエイナは持っていた書類を落としそうになった。

「セリス、百歩譲って突然やってくるのは良いとしても、いきなり抱きつかないでちょうだい。危ないから。」

「良いじゃない、久しぶりなんだから。」

「久しぶりって、前にあつてから5日も経っていないじゃない。」

「そうだったかしら。」

そう言ってピロリと舌を出すセリスに、にやりとシエイナは笑う。

「まあ、しょうがないわよね。契約間近なのに相手がこんな離れたところで仕事なんだもの。遠距離恋愛って、辛いんだそうね？」

「しえ、シエイナ！！！」

かかーつとセリスの顔が真っ赤に染まる。

それでもシエイナは容赦せず続ける。

「なんていうか、婚約期間？どつかの地域にもあつたよね、結婚するまで、花嫁は花婿に顔を見せてはいけないうって言う決まり。あ、でもそれだとセリスは失格ね。一週間すら待てないんだから。」

「も、もう黙って

「！」

そんなふうにはセリスをからかっていると、ノックの音と共に扉が開いた。

「騒がしいと思ったら、セリスが来ていたのか。」

「うん、ちよつと息抜きに。参加する？」

「お、良いな。楽しそうだ。」

「シェイナ！息抜きってなに！？そしてあなたも加わろうとしないで、サルダン！！」

セリスの懇願の混じった絶叫に、入ってきた男性はニヤリと笑った。

褐色の肌に深緑の髪の毛の男性は紛れも無く成人しているはずなのに、琥珀色の瞳に宿る光は幼い少年のように無邪気だ。

が、無垢ではない、あるはずもない。

なにせ目の前にいるのはただの男ではない。

血気盛んな砂漠の民をたった数年で纏め上げた、このサラティルドの王だ。それどころか、身一つで魔女の領域を訪れ自らの民を受け入れることを承諾させたばかりか、その期間中に魔女を口説き落としした男など、彼、サルダディアルⅡサラティルドだけだろう。

しかも夫婦だけあって、シェイナと実に息の合ったコンビネーションで相手（エモ）を弄り倒してくれる。

すでに何度かその被害に遭（あ）っているセリスは、またかと内心震え上がる。そんな彼女に救いの手が差し伸べられた。

「陛下、妃殿下、それ位にしてあげて下さい。でないとセリスが倒れるか、泣き出してしまいますよ。」

聞こえた優しいげな声にセリスはパツと顔を明るくし、次いで頬を染めた。

「ヴァッター！」

たちまち上気した顔で青年に駆け寄ったセリスは、その外見よりも幼げな仕草で身振りを交えてシエイナとサルダンの横暴を訴えた。

「はいはい、落ち着いて。」

サルダンとよく似た、しかしもっと柔和にしたような青年は苦笑を浮かべてセリスをなだめる。サルダンとは異なる薄茶の瞳は細められて今は見えなかった。

態度が適当だと拗ねたふりをして、それでも優しい視線は感じて嬉しさを隠しきれない。そんなセリスと彼女の頭を撫でるヴァッターを見ながら、シエイナは少しだけ気にかかるものを感じていた。

「ヴァッターはサルダンの従兄弟で、彼の片腕として働いていた。その縁でセリスと出会って、少しずつ心を通わせていった。そうしてセリスは契約を交わすことを決めたの。」

でも、自分はそれに賛成できなかった。口では祝福の言葉を紡いでいても、内心では気がかりを感じていた。

それを少しでも口に出していたら、結末は異なったのだろうか。

「あの頃は本当に楽しかったのよ。」

サルダンがいて、自分がいて、セリスがいて、皆気兼ねなく笑っ

ていた。辛いこと、嫌なことは多くて決して無くなることはなかったけれど、それを打ち消すほどになんてことのない日常が輝いていた。

その崩壊が今に繋がるのだと、失ったものは戻らないとわかっていてもなお、探してしまっただけだ。

その呪縛くわに囚とらわれている同胞を想う。

ようやく現れた呪縛を解く鍵はというと、新たにもたらされた事実じじつに困惑していた。

「少し、整理するために質問してもいいか。」

困惑を浮かべたジークが拳手をする。

どうぞ、とうながせば戸惑う声で問われた。

「結婚していたのか？」

「あらずそこ？まあ魔女としては珍しいわね。」

「んで、相手がラティルド建国王？ということはあんたは王妃！？」

「そうよ。生年不明で家系図に載ってるわ。生きてるから没年はもちろんナシ。最初はこの都市だけだったから、国名はサン＝ラティルドだけだね。」

「つまり建国王も守護者なのか？」

「アシエ・ヴェルトレイジ結縁契約だから、ちよつと違うわね。結んだのも第一階だけだし。」

「待て、契約は何種類もあるのか？初耳だぞ。」

「ああ・・・まあそれは機会があったら。今はその話は置いておいて、いいわよね。」

その言葉にうなずき、ジークも混乱する思考はとりあえず切り離して現在の最優先事項に集中しようとする。けれどその前に、もう

一つだけ気になったことを尋ねた。

「セリスの言動が今と違いすぎる気がするんだが……。」

「あのねー、千年以上前よ？ 私たち魔女にとっても、十分長い年月。変化があつて当然じゃない。」

「そ、そうか……。そう、だよな……。」

自分を納得させるように呟くジーク。その姿は素直な少年のようで、笑いをこらえるのに苦労した。

何とか喉の奥に押し込めると、それまでの温かさを消した瞳で付け加えた。

「でも、それだけではない。私たちの変化はもつと緩やか。千年は確かに長いけれど……。根本から変えるには短すぎる。」

全く熱を感じない冷たい瞳なのに、苛烈な視線はこちらを焼き尽くすよう。

「ここからがあなたの求める真実。覚悟はいい？」

灼熱の視線をしっかりと受け止めて、ジークは頷きを返した。

だからシェイナは語り始めた。

全てが壊れた、あの日のことを。

46話 裏切り1 (前書き)

前回すぐに投稿できるとか言っておきながら、2ヶ月もお待たせしてしまいました。いやホントすみません。

それなりに理由はあるのですが・・・知りたい方は活動報告にてご覧ください。

46話 裏切り1

その日、セリスが飛び込んできた時、おかしいと思ったのだ。

ヴァッターがセリスの家に滞在していることは知っていたから、その間は来ないだろうと思っていたし……。なにより、セリスの顔色が今にも倒れてしまいそうなほど、悪かったから。

透き通る白磁の肌は血の気が引き、死人のように青白い。真っ青な唇は、何かをこらえるように固く噛み締められていた。

何事かとシェイナが問う前にしがみつかれて、その力の強さに言葉を失った。見下ろせば、細かく震える手が見えた。

触れた箇所から、手だけでなく体全体が震えているのを感じて、シェイナは眉をひそめる。

様子がおかしいと顔を覗き込もうとすれば、それを避けるようにセリスはシェイナの胸元に顔を押し付けた。そのまま、食いしばった歯の隙間から声を絞り出す。

「お願い、シェイナ……。『場』を作つて。一人になれる場を。絶対に誰も通れない場を。」

戸惑ったシェイナだったが、尋常でない様子から言われたとおり空間を開く。そこに飛び込んだセリスを見送りながら、なぜ自分でやらないのかと少しだけ疑問に思った。空間操作のような繊細なものはシェイナよりセリスのほうが得意だ。それは彼女も分かっているはずなのに、と。

引っかかるものはあったが黙ってセリスを見送り、執務に戻る。

それからしばらくして新たな客が窓からやってきた。

「失礼致しますっ！！こちらに我が主はいらっしゃるでしょうか！？」

開いている窓をぶち破る勢いで飛び込んできたのは、セリスの使い魔だった。

ひどく慌てた・・・いや、焦った様子で詰め寄る相手に気圧され、異空間にいることを伝えると、目に見えて安堵していた。

気が抜けたのか、本性から人形ひとがたになると同時に座り込んでしまった少女の姿の使い魔。しかしセリスが誰とも会いたくないと言ったことを知り、シェイナに取りすがった。

「では、様子だけでも！シェイナ様が創られた空間なら、内部の様子はお分かりになるはず！！どうか主の様子だけでもお願いします！！！！！！」

その尋常でない様子ゆえに、シェイナは了承した。
しかし

「駄目・・・内側から結界が張られていて見通せないわ。」
「そんな・・・！！」

絶望的な声を上げる少女。そこへ飛び込んできたのは、やはり見覚えのあるセリスの使い魔だった。
何らかの手段をもってセリス発見を知り、飛んできたらしい。

「主は！？」

こちらもよほど焦っているのか、シェイナへの挨拶もなしに詰め寄ってくる相手に、少女はゆるゆると首を振る。

「異空間に閉じこもって……様子はわかりませんの……」
「くそっ、どうすれば……」

事情が分からないシェイナは、彼らがある程度落ち着くのを待つから口をはさんだ。

「空間は私が作ったものだから、その必要があれば無理やりにセリヌ呼び戻すことが出来るわ。」

だから、今は何が起こっているのか、事情を説明してもらえないかしら。」

シェイナの存在を思い出した彼らはハッと我に返った。

「し、失礼しました。」

少女の姿の使い魔はシェイナが示す席へ、後から来たほうも人身に変化してそれにならう。

行儀よく並んで座った少女と少年にシェイナは読み取れぬ視線を向けた。

「さて、話を聞く前に確認があるの。そこの彼が来た少しあとから、何度も連絡が来ているの。ちなみに発信源はセリスの家。」

最後の言葉を聞いた瞬間、2人から抑えきれぬ殺気が噴出した。それだけで、シェイナはセリスの異常の原因を察した。

「そっ、それじゃそちらは無視ね。」

あつさりと言いつ切る。音はないがひつきりなしに呼び出される感覚が鬱陶しかったので、受信拒否にした。それから眼前の二人の内、比較的冷静そうに見える少年のほうに説明を求めた。

何度か深呼吸して感情をおさめ、頭を冷やして話そうとした少年の、言葉を奪うように少女が低い声を漏らした。

「あの男は主を・・・セリスを裏切ったのです。」

「おい、落ち着け。」

「できるわけないでしょう！」

無礼を咎められる前に宥めようとした少年だが、少女は取りつく島もない。何度か同じようなやり取りを繰り返し、少年は諦めた。ただし、釘を刺すのは忘れない。

「頭が冷えていようがいまいがどうでもいいが、せめて黙っている。」

少女が口をつぐんだことを確かめてから、少年は感情が入らないよう、淡々と事実だけを追っていった。

「ひと月前、『穴』が出現しました。ご存知ですか？」

「ええ。確か『水』の地にだったかしら。」

「はい。しかし今の水の魔女は目覚めたばかり。経験、力量ともに未熟であったために重傷を負いました。そこで手当を奴に任せ、我が代わりに向かいました。」

当然だとシエイナも頷く。ヴァッターは人間の中では強いほうだが、魔女には遠く及ばない。契約も交わしていない彼は足手まとい以外の何者でもなく、置いていくのは当たり前のことだった。

「『穴』を塞ぎ、全ての後始末を終えるまでに一ヶ月。そして、疲れ切った体をおして帰宅したセリスが見たのは・・・固く抱き合う奴と、水の魔女でした。」

思いがけないことに、息を止める。本当かと問おうとして・・・少年の、固く握りしめられた拳に気付いた。白くなるほどに力の込められた手は、抑えきれぬ感情によって細かく震えている。淡々とした声音や事務的な口調から平静そうに見せているが、そうなり切れていないのは一目瞭然だった。

止めた息を声にせず吐き出したシェイナは、聞き役に徹することにした。

「いきり立つ俺たちは遠ざけられてしまったので、それからどんな言葉が交わされたのかわかりません。わかるのは、突然セリスの魔力が消え・・・ここに現れたということだけです。」

「それだけではありません。」

ずっと黙っていた少女が、それまでとは違う地を這うような声を出した。

そのトーンの違いに思わず視線が集まる。

「あの2人、『契約』しています。それも、結絆契約を。」

「なっ、初耳だぞ!？」

椅子を倒す勢いで立ち上がる少年とは対照的に、シェイナは冷静に少女を見つめる。少女も、真っ向から見つめ返した。

「・・・確信があるのね?」

「証拠をと言われれば応えられません。」

いわば女の勘。しかし、使い魔になったことで鋭敏になった彼らの勘を馬鹿にすることはできない。

「ヴァッターは水の適性が高かったし、セリスが相手よりは契約の成功は簡単だったでしょうね。」

契約とは、互いを繋ぐ糸^{パス}を結び、相手の力を受け入れるもの。それぞれの力量や相性によって成功率は変わる。

結絆契約は最も難度の低い契約であるが、《月》属性を持たず、人間としてやや強い程度の力しか持たないヴァッターでは成功の可能性はかなり低い。

だからこそ、セリスは細心の注意を払い、最高の時を選んで準備をしていた。

その矢先の、裏切り。

それがセリスの心をズタズタに引き裂いたことを、シェイナは理解していた。

「あいつが誰と契約を結ぼうと、興味はありません。セリスを傷つけたこと、それだけで万死にあたりますから。」

「でも出てきたら、あの子はきつと、何事も無かったように振舞うわよ?」

全てを自分の内に押し込んで、痛みも悲しみも抑え込んで、笑うセリスの姿が容易に想像できてしまい、2人の顔が蔭る。

「当事者のセリスが無かったことにしようとしていることに、あなた達が手を下すのはどうなのかしらね。」

「恐れ多くもシェイナ様は今回のこと、どのように考えていらっし

やるのか、お聞きしてよいですか！」
「おい。」

シエイナの冷静な指摘は、その内心以上に冷たく響いた。それが
気に触ったのか、慇懃無礼すれすれな口調で少女が噛み付く。

少年の制止も無視して睨みつけてくる少女に、場違いにも笑みが
こぼれた。

「どのように、か……。色々だけど、あえて言うならホツとした、
かしら。」

私はね、最初からセリスとヴァッターの契約に乗り気でなかった
の。」

そして、それを表に出さなかったのはシエイナの罪。

「真剣な恋と、本気の愛は違う。恋は1人でできるけれど、愛は2
人いなければ成り立たない。そして契約も、2人の間で結ばれるも
の。私が見たあの2人は土台から噛み合っていなかった。」

それでも口出ししなかったのは、4人の時間を失いたくなかった
から。だから、契約を土台にした愛もあるのだらうと、自分に言い
聞かせた。

結果、ヴァッターは最悪の形で本気の愛を見つけてしまった。

「セリスもヴァッターも、互いに与えるばかり。でもね、与えるだ
けの愛なんてないの。だってそれは相手に何も期待していないとい
うことだもの。」

セリスがそれを自覚していたとは思わない。けれど、そんなセリ
スに、きつと魔女の本能は警告していたはずだ。

それを無視したのはセリス自身。意識的でも無意識的でもセリスの非に変わりはない。そして経験者としてそれに気づいていながら、何も言わなかった自分の非も。

それらのツケが今、セリスへと流れている。

スツと立ち上がったシェイナは、見つめる二対の目を無視して歩いてゆく。扉に手をかけ細く開いたところで立ち止まった。

「人を遠ざけておくから、しばらく頭を冷やしましょう。」

セリスが出てくるまでに、せめてその殺気だけでもどうにかしておきなさい。」

返事は聞かずに部屋を出て真っ直ぐ歩み続ける。

「言えばよかったのに」

意地っ張りですね、という声は笑いを含んでいる。前触れない声にシェイナは反応を示さない。カツリ、カツリと一人分の足音だけが響く。

沈黙が、満ちる

「彼らに語ったこと、嘘じゃないわ。」

「そうでしょうね。」

あっさり流され、シェイナは頬を引きつらせた。しかし、何を言っても効果が無いことを知っているの、無視する。ただ、淡々と口から言葉が滑り出るに任せる。

「私たちのパートナーには様々な特権が与えられる。だから選択は慎重にしなければならない。そのためでしょうね、契約をしようとするればストッパーがかかるの。」

まず理性。でも私たちは精神は人だから、自分を偽ることができる。そうすると今度は、本能が制止をかける。『この人じゃない』というように。」

シェイナがサルダンと契約する前の様子を思い出し、納得する。普段なら「運命ですね」などと茶化すところだが、今は何も言わず聞き手に徹する。

「だけどセリスはそれを無視した。ううん、本能でさえ偽ってしまっただけでしょう。」

あの子は人嫌いな癖に寂しがりやだから。特に私がサルダンと契約してしまっただけからは、孤独がひとときわ身に沁みただろうしね。」

そつと胸元を押さえる。

「ヴァッターだけが悪いわけじゃない。けれど」

自らが作った空間。そこに満ちる魔力からセリスの心が伝わる。

悲哀、絶望、怒り。そして、それらを抱く自分への否定。

その全てが強い自責の念に彩られている。それは、ともすればセリスの身を傷付けるほどで。

「親友がここまで傷ついていて、黙っていられるほど私は大人しくはない。」

それだけ言い残してシェイナは消えた。

それを見送り、残された存在はある場所へ向かった。

46話 裏切り1 (後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9273j/>

銀月の魔女は闇と歩く

2011年10月1日18時40分発行